

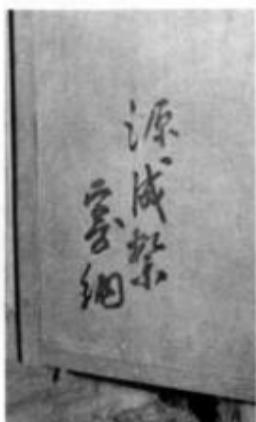
赤城山



赤城神社拝殿



赤城神社本殿



本殿内宮殿の銘



赤城神社本殿内宮殿



赤城塔
(赤城温泉忠治館)



権 石



宮城村役場



宮城村公民館



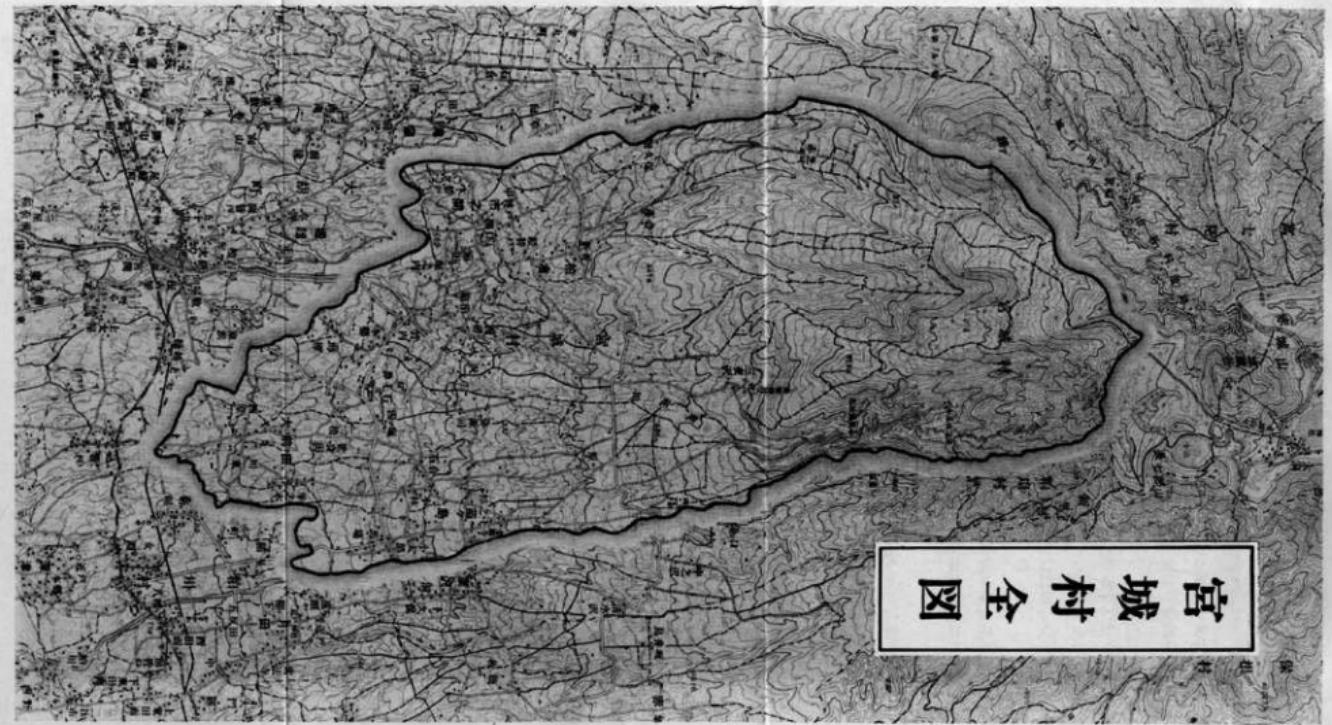
宮城中学校



宮城小学校

思い出の宮城小学校旧校舎





宮城村全図

地圖

序

群馬県勢多郡は赤城山をめぐる地域である。わが宮城村はその赤城山の南をうけて純農村の輝やく伝統と未来への健実な足どりをつづける村である。

嘗々と耕してきた先祖は赤城山南面の大地を耕やすと共にこころを耕やし文化を育ててきた。その事実をまとめて村誌を刊行する企画をたてたのは昭和四十年で阿久沢俊夫村長のときであった。当時、助役であった私が、編さん委員長に推され、委員各位とともに、この事業を推進することになったのである。

修史は誠に大事業であります。のち村長に選ばれ多忙の間に多くの人たちに作業をつづけてもらつたのであります。宮城村は赤城神社の関係で群馬大学名譽教授尾崎喜左雄先生にご指導を賜つて参りましたが、この度の村誌編さんについても当初から先生のお世話になることで発足いたしました。幸に先生にご快諾いただき、先生の指導をうけた方々のご協力によりこの仕事が進められたのであります。

まず研究篇が刊行されました。市之関禪文前期住居跡の調査報告、宮城村の古墳、赤城山の入会、片並木遺跡（製鉄跡）などが発刊され、学問的なすぐれた成果を世に送りました。その間に役場資料、区有文書、個人有文書などの調査をすすめました。

担当の諸先生には暑中休暇を利用して、日曜日を返上して村内をかけめぐり、涙ぐましい努力をかたむけたのであります。が、近時益々多忙の業務の間を執筆してゆくのは大変なことであったと存じます。

長い間の研さんがここによくまとまり印刷のはこびとなりました。編さんの大任をはたし得て何よりの喜びと

するものであります。

ご執筆いただいた諸先生、資料提供くださった村民各位に深甚なる感謝の意を表して序といたします。

昭和四十八年六月一日

宮城村誌編さん委員長

上野丑之助

序

宮城村は赤城山の南面中央にある。標高二〇〇層から山頂にまでのぼっていて、標高六〇〇層以上は急傾斜の森林、菅野の地帯、それから下は山頂の小沼から出る柏川が渓谷を出てからの扇状地帯と、荒砥川及びその支流の浅い開析谷地帯とであり、ここに農村が発達している。

この農村地帯の最高位置に大字三夜沢の集落がある。三夜沢というは「みやさわ（宮沢）」の諺であろう。赤城神社が鎮座している。この神社の一ノ鳥居から旧参道が三方に下つていて、松並木がそれぞれ三種類ほどつづいている。現在は中央のみ残っているが、その下の端あたりまで村落はほとんど見当らなかつた。三夜沢は赤城神社の奉仕者のみの集落であったのである。この各参道の末端に、東から苗ヶ島、鼻毛石、柏倉、堀久保、その外側に馬場、大前田、市ノ関などがつづいている。三夜沢は扇を開いて逆さにした要のような位置になる。

このように宮城村は赤城神社の鎮座地を要として発展している。ただし、神社を真中にしているのではない。むしろ、農村地帯から押しあげられた形である。権力者として君臨した姿であり、古代的でもなければ、現代的でもない。

歴史を知ることは経験を積み重ねることであり、明日への発展の踏切板をかためることになる。懐古趣味も好かろうし、家柄を誇示するためでも悪いとは言えないが、遠い過去からの経験に新らしい理論や技術をかみ合わせるためのものでなければならない。道路構築や団地造成も必要ではあるが、その土地毎に異なる自然条件や人的条件の積み重ねを基にして行なわれなければ、自然や人為のバランスを崩して、とんでもない返り傷を負うことがある。

歴史は場所によつてみな違う。日本のようく細長く東北から西南にわたっている国にあっては、ところによつて違うのがあたりまえである。他所では結構であつても、ここでは不都合なことがあり得る。まず、自分の住んでいるところを、村を、よく知つて置かねばならない。

宮城村では昭和四十年に村誌編集が着手され、私のところにその編集及び執筆の依頼があつた。私は昭和十一年来赤城神社についての調査にはじまり、市之関遺跡、白山等の古墳、その他の遺跡、遺物の発掘・調査に、特別なお世話を受けていたので、喜んでお受けし、関係の諸君と計つて、意図に副えるものをと心懸けたのである。爾來八年、しかし仕事は一向にはかどらず、幾度か延期を重ねた。其の間、村誌編集委員長上野丑之助氏の絶大な理解と援助とを煩わし、ようやく上梓の運びとなつた。

さて、書きあげてみると、思つた通りにはいかないものがある。書き足らない点、気にいらぬところが諸所に目につく。日数ばかりはかかったけれども、それに応えるには余りにも薄い。

だが、執筆者は、誰も忙しい本務を持つていての余暇の仕事であるので、隔離の感をもつてゐる。そのうちにでき上つたものであるが、中には白眉のものもある。自画自賛になるけれども、三夜沢の赤城神社の成立の歴史は本書においてはじめてまとめてみた。赤城神社蔵の『年代記』は全文を載せた。同神社蔵及び北爪家蔵の中世文書も網羅した。できる限り資料に頁数を割いたのは、読者が自分で歴史を組み立てて貰いたいためである。

ここに宮城村誌発刊にあたり、いささか微意を述べて村誌の活用を期待し、併せて村民各位への謝意を兼ねて序とする。

昭和四十八年六月二十一日

群馬大学名誉教授
文学博士 尾崎喜左雄

目

次

序.....
宮城村誌編集委員長 上野 丑之助
序.....
群馬大学名譽教授 尾崎 喜左雄

口絵

赤城山・赤城神社拜殿・赤城神社本殿・赤城神社本殿内宮殿・同銘文・額
石・赤城塔・宮城村役場・宮城村公民館・宮城中学校・宮城小学校・思い
出の宮城小学校/地図

前編

第一章 わが宮城村

第一節 宮城村	1
第二節 地形と地質	2
一 はしがき	3
二 赤城火山の噴出以前	4
三 赤城火山の噴出と火山体の形成	5
四 宮城村の地形	6
五 まとめ	7
第三節 気候	8
第四節 動物・植物	9
一 動物	10
二 植物	11
第十節 民家	12
一 地域の神と集団神	13
二 古い形式を示すグループの民家	14
三 中間的な形式を示すグループの民家	15
四 赤城南麓地方の屋根形態の変遷	16
第五節 宮城村となる	17
第六節 地名	18
第七節 人口	19
第八節 村の名字	20
第九節 集落	21
一 集落の分布	22
二 宮城村における集落の研究史	23
一 石田川式土器出土地と大古墳の分布	24
二 「まつり」祀・祭	25
三 「まつり」の発展	26
四 古墳文化と水と「まつり」	27
第三節 赤城神と上毛野君	28

第二章 赤城神社をめぐる村

一 繩	29
二 第一節 自然の神	30
三 第二節 新田の地から見た赤城山	31
一 石田川式土器出土地と大古墳の分布	32
二 「まつり」祀・祭	33
三 「まつり」の発展	34
四 古墳文化と水と「まつり」	35
第三節 赤城神と上毛野君	36
一 地域の神と集団神	37
二 古い形式を示すグループの民家	38
三 中間的な形式を示すグループの民家	39
四 赤城南麓地方の屋根形態の変遷	40
第五節 宮城村となる	41
第六節 地名	42
第七節 人口	43
第八節 村の名字	44
第九節 集落	45
一 集落の分布	46
二 宮城村における集落の研究史	47
一 石田川式土器出土地と大古墳の分布	48
二 「まつり」祀・祭	49
三 「まつり」の発展	50
四 古墳文化と水と「まつり」	51
第三節 赤城神と上毛野君	52

二	豪族の神と支配者の神	一究
三	豪族上毛野君と「新田」の地	三五
四	赤城南麓地帯と上毛野君	三九
第五節	上野国の地と赤城神社の鎮座	五一
一	二之宮の地と赤城神社の鎮座	五
二	官社赤城神社	一〇
三	神仏習合	一六
第五節	仏教化された赤城神	二四
一	二大明神と三所明神	一七
二	「赤木櫻燒」	一九
三	赤城山の世良田	二〇
四	赤城塔の分布	二〇
五	「神道集」の赤城神	二二
六	三夜沢赤城神社の「年代記」	二八
第七節	上野國の神社の情勢	三〇
八	三夜沢赤城神社の鎮座	三〇
第六節	三夜沢での赤城神社	三一
一	赤城大明神への復興	三一
二	「年代記」ひらい読み	三五
第三章	古代	三五
第一節	旧石器時代	二四
第二節	縄文時代	二五
第三節	弥生時代	二五
第四節	古墳時代	二六
第五節	仏教文化時代	二七
第一節	中世の文書	二九
第二節	赤城神社文書	三〇
一	赤城神社文書	三〇
二	北爪家文書	三二
第二節	古城墨跡	三五
第三節	文化財	三七
第六章	記録・文書	三七
第一節	赤城神社「年代記」	三八
一	赤城神社靈石	三九
二	赤城神社本殿内宮殿	三九
三	赤城塔	三九
四	六地藏石塔と阿弥陀如来像	三九
第五節	箱田の豆人形	五五
六	三夜沢神社の神樂	五五
七	大前田の獅子舞	五五
八	民家	五五
九	文化財目録	五七
第五章	江戸時代の村のよ	五九
第一節	領主の推移	五九
第二節	村高と新田開発	五九
第三節	家族構成と人口	五九
第四節	五人組と統制	五九
第五節	産業のあらまし	五九
第六節	貢租	五九
第七節	近世資料	五九
第六章	記録・文書	六一
第一節	吉勝翁物がたり	六一
第二節	赤城神社奈良原家文書	六一
目録抄		六一

第四節 赤城神社真岡田家文書目録抄略	三三
第五節 宮城村役場所蔵資料目録	三四
第六節 旧家所蔵文書目録	五六
第七節 村誌(明治十年) 云々	五七
後編	
第一章 村の政治	
第一節 行政	一六
一 戸長役場の時代	一九
二 村役場の設置	二二
三 村役場の組織	二五
第二節 村役	二八
一 歴代村長	二三
二 助役・収入役	二五
三 役場書記	二七
第三節 村議会	二九
一 戰前の議会	三一
二 戰後の議会	三三
三 歴代議長	三五

四 村会議員	六六
第四節 選挙	六六
一 衆議院議員選挙	六六
二 各種議員選挙	六六
第五節 村の諸役職	七〇
一 区長	七〇
二 その他役職	七〇
第六節 村の財政	七七
第七節 村税と交付金・補助金	七七
第二章 土に生きる	
第八節 並木事件	一五
第九節 新農村建設事業	一九
第一章 土に生きる	
第一節 農業構成	一九
第二節 土地利用	一九
一 耕地面積	一九
二 耕地の分布	一九
三 耕地と農家戸数	一九
四 自小作別農家戸数	一九
五 資料	一九
第六節 農業團體	六六
一 農業会	六六
二 農業組合・購買組合	六六
三 農業会	六六
四 農業協同組合	六六
五 農電研究所	六六

一 農地改革進捗状況	六六
二 ドニガム軍政官の視察	六六
三 農地改革推進の通知	六七
第四節 農業生産	六七
一 農産物の収入	六七
二 烟作	六七
三 米作	六七
四 農業機械の台数とピニールハウス等	六七
第五節 かんがい用水	七〇
一 機況	七〇
二 稲川水系	七〇
三 荒砥川水系	七〇
四 鳴沢川水系	七〇
五 大穴川水系	七〇
六 群馬用水	七〇
第六節 農業團體	六六
一 農業会	六六
二 農業組合・購買組合	六六
三 農業会	六六
四 農業協同組合	六六
五 農電研究所	六六

第七節 農業

一 義理状況	九六
二 雜種飼育・蚕種	九七
三 桑園	九八
四 生糞など	九七
五 功労者	九八
第八節 農業特産物	九九
一 果樹	九九
二 ハウス園芸	一〇〇
三 花木	一〇一
四 しいたけ	一〇二
第九節 畜産	一〇七
第十節 林業	一一〇
第一節 開拓	一一一
一 赤城山興業組合	一一一
二 赤芝の開拓	一一二
三 海外移住研修所	一一三
四 赤城農場	一一四
第十二節 商工業	一一五
一 商業	一一五
二 鉱工建設業	一一六
三 商工会	一一七

第十三節 水産業

第一節 地租改正	一一一
第二節 観光	一一二

第三章 交通・通信

第一節 道路	一一四
一 県道	一一四
二 村道	一一九
第二節 交通機関	一一九
一 バス	一一九
二 交通用具	一二〇
第三節 通信	一二〇
一 有線放送	一二〇
二 電話	一二〇
三 郵便局の開設	一二一
四 テレビ・ラジオ	一二二

第四章 健康のために

第一節 保健・福祉	一二六
一 伝染病隔離病舎	一二六
二 国民健康保健	一二七
三 国民健康保健診療所	一二八
四 保健文化宣に輝く改良便所	一二九

第五章 水道事業

一 村の福祉	一二〇
二 天災のあらまし	一二〇
三 昭和十年の風水害	一二〇
四 昭和二十二年の風水害	一二〇
五 昭和三十二年と四十一年の災害	一二〇
六 防災計画	一二〇
第二節 消防	一二〇
第三節 駐在所	一二〇

第六章 戰争と銃後

第一節 応召	一二〇
一 徵兵と勤員	一二〇
二 在郷軍人分会	一二〇
三 宮城村戦没者芳名録	一二〇
第二節 銃後の生活	一二〇
一 生活物資の欠乏	一二〇

二 食糧の増産と供出	一五三	二 青年学級	一六三
三 警防團	一五二	三 宮城村婦人会	一六四
四 英霊殿の建設	一六四	第九節 スポーツ	一六六
第三節 東宮鉄男大佐	一六六	一 学校体育	一六八
		二 学校体育	二〇〇
第七章 教育		第一節 学校教育以前における教育	一六九
		一 寺子屋時代の教育	一七一
		二 東宮學	一七二
		第二節 明治期の小学校	一七三
		第三節 大正期の小学校	一七三
		第四節 昭和前期の小学校	一七三
		第五節 文獻に表われた宮城	一七三
		第六節 小説栄五郎の成長	一七三
		第七節 樹の会	一七四
		第一節 宮城の神と仏	一七五
		第二節 宮城村の神社	一七五
		一 現在の神社	一七五
		二 神社の歴史	一七六
		三 明治初年の神社	一七七
		四 神社の合併	一七八
第八節 社会教育	一七九		
一 青年会	一七九		

第一節 文学	第一節 詩	一 現在の寺院と教会	一七六
第二節 短歌	二 寺院誌	二 江戸時代の寺院堂宇	一七七
第三節 俳句	三 江戸時代の寺院堂宇	三 現在の寺院と教会	一七七
第四節 紀行	四 鼻毛石の爪引不動さま	四 神社の財政と運営	一七九
第五節 村	第五節 文獻に表われた宮城	第五節 宮城村所在指定文化財	一七九
第六節 小説栄五郎の成長	第六節 小説栄五郎の成長	市之関と大前田	一七九
第七節 樹の会	第七節 樹の会	赤芝山の大崎治部先生	一七九
第九章 宮城の神と仏		井上浦造「思い出」より	一七九
第一節 宮城村の神社			
一 現在の神社			
二 神社の歴史			
三 明治初年の神社			
四 神社の合併			
第八節 社会教育			
一 青年会			

五 神社誌	一七九
六 神社の財政と運営	一七九
第七節 宮城村の寺院と教会	一七九
第一節 現在の寺院と教会	一七九
第二節 寺院誌	一七九
第三節 その他の信仰	一七九
妙録	
柏川の水げんか	一七九
苗ガ島と馬場	一七九
宮城村所在指定文化財	一七九
市之関と大前田	一七九
赤芝山の大崎治部先生	一七九
井上浦造「思い出」より	一七九
あとがき（松本浩一）	
跋（丸山知良）	

前

編

八村誌調査あれこれ

赤城神社は、明治の初年までは東西両宮であった。その鳥居の「くつ石」が今でもそのままある。

東の宮は、太古から靈石信仰の延長であり、西の宮は、柏川の御殿から、平安時代か鎌倉初期にこの地へ遷ったものだと思う。御殿といつても宇通であり、ここに今発見されているもので「十二の宮の隕石」があるし、なかには八角の塔の「くつ石」がそのままある。その一ヶ所を発掘したところ、平安時代の布目瓦がたくさん出た。

東の宮は、奈良原家が代々祭祀を掌り、西の宮は、真鍋田家で祀官をしている。それに統いて東西御間があった。

両家とも多數の古文書を所蔵していて、戦国時代の上杉謙信や北条氏邦その他めづらしいものがたくさんある。

× ×

柏倉には、ぼた餅觀音と焼餅觀音の二つあつて、今でも秋になるとお祭りをしている。

諏訪神社の本地仏は、馬頭觀音で、鎌倉時代の縣公である。これと関連して、六本木さ

んの東の墓地にある觀音様も馬頭觀音である。このお祭りは、鎌倉時代から現代に至るまでおこなわれている。

民俗の習慣や信仰はつくづく長いものと感じた次第である。

柏倉は、明治の始めまでは東と西に別れていた。堂の上は、室町以前のお堂の跡がある。阿久沢秀夫さんの家は、民家の代表的な古い家である。袖入り柱とかすじかいで分かる。裏に清水の滝がある。阿久沢家は黒保根の上神御の阿久沢能登守の系統で奥州の阿倍氏の系図をつぐものだという古文書がある。また、雅又謙など貴重な文化財がある。

北爪房右衛門は阿久沢家で生れ、箱田の北爪家へ養子にゆき学問武芸に長じ房右衛門並木や、また、荒山横の道を房右衛門が沼田へ通ったので房右衛門通りと呼ばれている。大洞の赤城神社には、房右衛門の納めた大きな石燈籠がある。

(上野丑之助)

第一章 わが宮城村

第一節 宮城村
第二節 地形と地質
第三節 気候
第四節 動物・植物
第五節 宮城村となる
第六節 地名
第七節 人名
第八節 村の名字
第九節 口名
第十節 落字
民 集 家

第一節 宮城村

赤城山南面の中央に位置する宮城村は

東経 一三九度一分

北緯 三六度二六分三〇秒

にあり、明治二十二年四月一日に

鼻毛石、柏倉、市之関、三夜沢、苗ヶ

島、馬場、大前田

の七カ村を合併して発足した。

役場所在地は

宮城村大字鼻毛石一四二六一三番地

にあり、標高二五五メートルである。本村

の最も低い所は標高一九〇メートルで、赤

城山の山麓地帯で南にゆるい傾斜をもち、

農耕地として適している地域である。

この地は旧石器時代の樹型遺跡から始まる古代遺跡、赤城山信仰につらなる信仰遺跡が多い。古くからの先人の活躍の跡は大地に刻みこまれた歴史として記録されないものを含めて、先祖の生活を今に伝える。

土地利用とその内訳 (昭和40年) 単位ha

林野面積	2,633 (54.3%)	国有林	298		
		私営林	1,794		
		人工林	1,512		
耕地面積	1,490 (30.7%)	田	480		
		畠	1,010	普通畠	588
				樹園地	415
				牧草地	7



苗ヶ島地内所見

本村の面積、土地利用状況は次の通り。

大字別面積

総面積	四八・四九平方キロメートル	鼻毛石	五・七五平方キロメートル	柏倉	一九・三〇平方キロメートル	市之瀬	三・二一平方キロメートル
三夜沢	七・三四平方キロメートル	苗ヶ島	八・七八平方キロメートル	馬場	一・一四平方キロメートル	大前田	二・九七平方キロメートル

第一節 地形と地質

一、はしがき

わたくしたちの郷土宮城村は、赤城火山の外輪山である荒山から流れる荒砥川、大穴川を中心にして赤城南麓のはば中央部にひろがる村である。荒砥川、大穴川、柏川の水系は、上流域でさかんに赤城火山体を侵蝕し深い谷をつくり、下部ではその岩屑、砂礫を堆積してゆるやかな裾野を形成している。

宮城村の土地がどのようにしてつくられたかを論ずるとすれば、赤城火山がどう山体を形成し、どのような侵蝕をうけ、またどのような堆積作用をおこなってきたかを明らかにする必要がある。現在雄大な姿でそびえる赤城火山も、絶え間なく続けられる外的營力により侵蝕がすすめられて、やがては老年期をむかえさらには火山体としてのかたちを失うことになる。

ここでは、赤城火山噴出以前のようすを尾山地の秩父系古生層と、第三紀層の分布によって考察し、赤城火山の噴出と火山体の形成、宮城村の地形の各項により宮城村の土地がどのようにしてできたかを述べてみることにした。

二、赤城火山の噴出以前

赤城火山は地質時代でいえばごく新しい時代に噴出した火山である。古生層に不整合に堆積した新生代の新第三紀中新世の堆積層の上に、火山噴出物を堆積させているのである。

この中新世は、火山活動のさかんな時代で端穂—フォッサ・マグナ褶曲帯（那須火山帯とほぼ一致する）は火山活動の最も激烈な地方であった。（大塚弘之助、日本の地質構造二二二頁）

赤城火山が噴出する以前のようすはどうなっていたのであろうか。赤城火山が噴出する前の地形は、足尾山地の古生層ならびにその上に堆積している第三紀層の分布を考察することによつて推定することができる。

(一) 足尾山地

足尾山地は渡良瀬川の東側に連なる山地で北西に高く、南東に漸次低く傾動地塊をなす山地で、断層が著しく発達している。

地質は秩父系古生層より成りたち、同じ古生層の関東山地と連なつていていたものと考えられている。またこの古生層は渡良瀬川の西側にも分布している。断層による分離丘陵と考えられる八王子山系に見られ、赤城山の裏側にも分布していて、秩父系古生層の山々が深く山系をなしていた時代があつたことが考えられる。現在の足尾山地は侵蝕がすすみ壯年期の地形をなしており、その刻みこまれた山容は宮城村から遠望されるし、桐生や大間々附近で直接古生層の岩石にふれた山も多いと思う。

足尾山系はチャートの発達が著しいが、黒保根村には厚い粘板岩が堆積して深い海の堆積物と思われる。その粘板岩層に入れる石灰岩層からは紡錘虫などの化石が発見されており、特に足尾線花輪駅附近では矢部博士によつ

て魚の化石が報告されている。（註古生代の歯のあごの化石）（藤本治義、日本地方地質誌「関東地方」八七頁）

赤城山の山脚のように見える新里村奥沢の官林山（四四六メートル）は古生層のチャートからなりたち、現在採石されている。

勢多郡誌によれば、「この裾野を刻む放射谷に沿ってさかのぼると、局部的ながら火山帯のかなり高所まで古生層の露出が認められ、ほとんど赤城火山山頂部附近まで達しているので、少なくとも赤城火山東半部では高峻な古生層山地が火山の直接の基盤となっていることが考えられる。（勢多郡誌、一九頁）」とあり、赤城根村大洞部落附近で海拔九〇〇メートル、花見原で海拔一、一〇〇メートルの地点で古生層の露出を指適しているのである。

小野寺透氏によれば、「不動滝の下流約三〇〇メートル、粕川の右岸に僅か古生層が露出している。この部分の古生層は黒色の砂質粘板岩で薄く成層し、その走向は約N六十五度E、傾斜はほぼ五十度NWである。この古生層の凹凸面上に浮石を含む黄褐色のやや緻密質の集塊岩が堆積している。（群馬県「カスリソウ台風の研究」一五〇頁）」と記載されている。走向と傾斜の測定は貴重な資料で、渡良瀬川をはさんだ古生層の北西側の走向・傾斜に類似している。

赤城火山噴出以前の宮城村の土地は、今から約二億数千万年前に海中に堆積した古生層の山々がそびえ、地盤運動をくりかえしていたのである。

〔〕第三紀層

大間々町の南方に鹿田山、茶臼山、金山の三丘陵が続いているが、八王子山系と呼ばれている。この山系には古生層と第三紀層が分布している。その第三紀層について河井與三氏は入穂灰岩層、新田凝灰質岩層、馬見岡凝灰岩層に大別しており、馬見岡凝灰岩層を最も新しいものとしていて、中新世の上部に位置づけている。

この馬見岡層の凝灰岩が笠懸村鹿田の天神山に露出していて、多量の木片化石や貝化石を含有している。この延長

が新里村武井の鍋木川岸で知られ、貝化石もみつけられている。最近新里村小林地内の石山の採石場から大量の貝化石が発見された。灰白色の凝灰岩を主とするが、古生層の円礫を多く含む砾質凝灰岩層を介在している。

この凝灰岩層の走向は筆者の測定によるとN一八度W、傾斜は二八度SWであった。

なお帶貝化石層は二層あって、その間は六七メートルである。現在は殆ど碎石として運搬されて平坦化しているが、天神山と同じように丘陵をなしていたものである。

この露頭から考えられることは、海岸線近くの海底となつたことが二回あり、地盤運動による海進・海退作用をくりかえしたことである。

柏川村上東田面の伴内酒造店で二〇〇メートルの深井を掘さくしたことがある。その時の調査報告によれば、火山噴出物の下から古生層の円礫層が厚く堆積し、地表下約一五〇メートルの深さから第三紀層となり、貝化石が採集されている。(青木幹雄「柏川村の地質」)

このように赤城南麓に第三紀中新世に凝灰岩を主とする海底堆積がおこなわれていてことから、宮城村も中新世(約一、五〇〇万年と一、〇〇万年前)は、海底で火山灰の堆積を受けながら海岸線の一進一退がおこなわれていたことになる。

三、赤城火山の噴出と火山体の形成

前述したように赤城火山の基盤は、秩父系古生層の足尾山地に続く山なみと、東南部から北西部に見られる第三紀層で、特に古生層は赤城火山体のかなり高所でみられるのである。東部で花見原の海拔一、一〇〇メートル、瀧沢不動流附近で八〇〇メートル、新里村では四四六メートルの地点で古生層が露出しているが、不動流附近の粘板岩は古

生層の山なみの山頂部であろうか。

これに対して第三紀層は山麓の低い位置で露出がみられ、新里村の石山の標高が一八〇メートルである。柏川村上東田面の第三紀層は、火山噴出物と第三紀層の間に古生層の円礫を含む礫層が約一〇〇メートルも堆積している。そしてこの地点からわずか一、五キロメートルしか離れていない石山の第三紀層との対比であるが、石山より新しくその上部に堆積したと考えられる地層が一七〇メートルも低いことである。

勢多郡誌に「赤城火山の新旧両基盤の境界は、利根郡川場村生品附近から赤城火山山頂部を通り八王子山に延長する北西と南東の方向をもつた著しい断層であることが考えられる。すなわち我が赤城火山は高原火山、男体火山をへて榛名および浅間火山に連なる那須火山帯が、丁度前記の断層と交わる位置に噴起して那須火山帶における主要火山をなしているのである。」とあり、山頂部を通る北西—南東方向の著しい断層を指廻しているのと一致していく、赤城南麓にみられる第三紀層も著しい地層のくいちがいがみられるのである。赤城火山の基盤は厚い古生層で、これをうちやぶって噴出し、低い部分に残されている第三紀層の上にも噴出物を堆積させて火山体を構成したのである。

以下噴出した赤城山の火山体形成を三期に分けて述べてみる。

(一) 初期活動時代

古生層をつきやぶり、その上に集塊岩や熔岩、火山碎屑物を噴出して現在の赤城山の基底部をつくった火山活動時代である。

集塊岩は、熔岩塊や火山岩屑が火山灰や熔岩によつてかためられたもので、この期のものとしては暗紅色集塊岩、黄色集塊岩が知られている。荒砥川流域では、不動流の柏川の右岸に黄色集塊岩が露出していて集塊岩の最下位層をなしている。

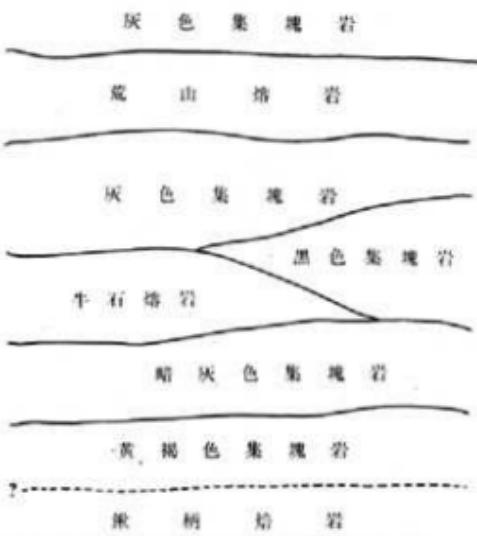


図1 荒砥川流域の地層序（小野寺通氏による）

熔岩は、鍾乳熔岩・巣下熔岩・沿尻熔岩が外輪山熔岩の下位にあって、外輪山の基底となっているが、鍾乳熔岩は赤城火山の中で最も下位にある熔岩と考えられている。

荒砥川流域では、この鍾乳熔岩が荒山、牛石熔岩が荒山、牛石熔岩附近の基底をなしており、荒砥川の上流端の軽井沢岬附近の谷底部に見られる。



集塊岩（湯ノ沢付近）

入った。

この時代は外輪山の活動時期で、荒山等の熔岩が噴出し、暗灰色集塊岩が噴出されて外輪山の山体がつくられた。これらの寄生火山は、灰色集塊岩を初期活動時代で山体の基部が構成された後、休止期を経て中期活動時代に入つた。

(二) 中期活動時代
る。(カスリン台風の研究 小野寺透執筆)

噴出しさかんに活動して現在の赤城山の主要部を形成したのである。

寄生火山の活動後、山頂部が陥没してカルデラが形成された。このカルデラは東西三キロ、南北四キロの大きなもので、宮城村の最北部牛石峠はこのカルデラ壁にあたる。

荒砥川の侵蝕により、荒山熔岩、牛石熔岩の下部に堆積している暗灰色集塊岩が露出している。また最近の道路工事により通してかたく凝固して、湯之沢附近の切

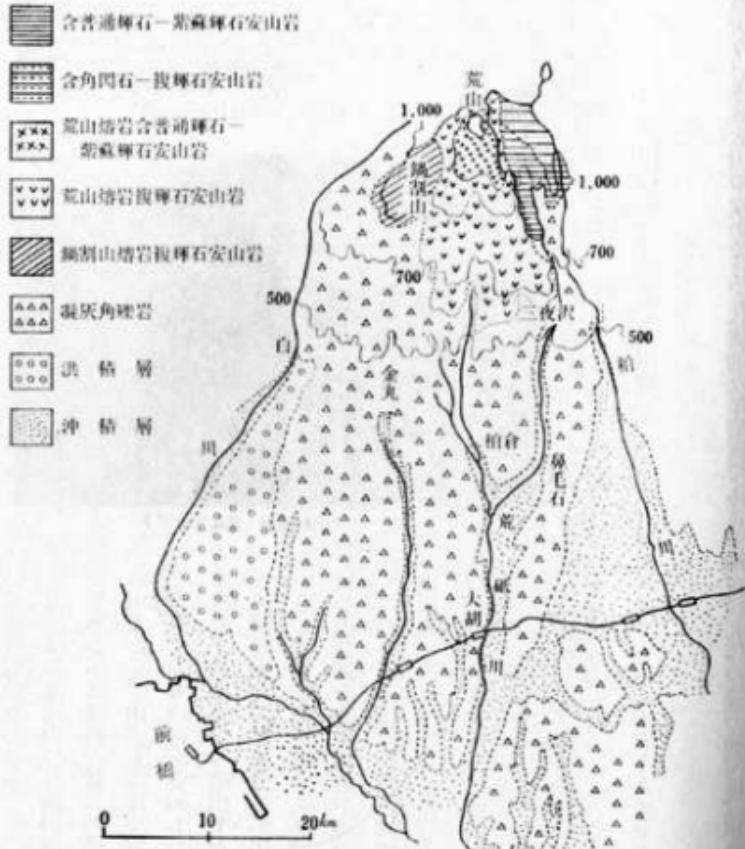


図2 荒砥川流域地質図（勢多郡地質図により作成）

いる集塊岩がみられる。

荒山は赤城火山の外輪山のひとつであるが宮城村と最も関係の深い山である。山容も秀麗で宮城村を代表するものにふさわしい。宮城村の土地は荒山の噴出した集塊岩、熔岩火成岩層で骨格が出来ているということができよう。宮城村の山腹部を荒山熔岩が覆っていて、複雑な安山岩の熔岩流は、三夜沢まで達している。熔岩末端面は、現地形によくあらわされていて観察が容易である。



荒山熔岩（神東橋付近採石場）



火山砂礫層（荒砥川上流）

合は、安山岩二四%、集塊岩六九%、礫層七%となつていて（カスリン台風の研究）、集塊岩の割合がたかくなっている。この火山噴出物を含む集塊岩は、侵蝕を受けやすく、崩壊して多量の岩屑を供給し、大水害を与えてきたのである。

荒山熔岩流は、熔岩流の少ない赤城火山のなかでは、代表的な熔岩流である。神東橋北側の採石場では、厚さ約三

荒砥川上流の地質区分の分布割

○メートルで、冷却時に生じた板状及び柱状節理が発達し、灰色で緻密でありさかんに碎石されて建設原料として利用されている。

荒山山頂部附近には、含普通輝石・紫蘇輝石安山岩が噴出している。

(3) 後期活動時代

寄生火山と見られる荒山等の外輪山が噴出し、山頂部が陥没して大きなカルデラを形成したあと静かな休止期が続いた。そして、カルデラ内に中央火口丘の噴出することにより後期活動時代がはじまるのである。

長七郎山が熔岩を噴出させて山体を築き、カルデラのほぼ中央に地蔵岳が噴出して中央火口丘を形成したのである。

中期活動期に噴出した外輪山の熔岩よりも粘性が強いため、お椀をかぶせたような円頂丘をなしているのである。

その後、小沼、地獄谷が噴火をおこない火山岩屑を噴出して附近に堆積させたが、牛石峠附近に見られる玻璃質または浮石質の安山岩片がそれである。

地獄谷は最後迄蒸気を噴出していったと思われるが今はまったくだえている。

四、宮城村の地形

隆起運動や火山活動によって高くなつた土地は、重力や大気の影響を受けて絶え間のない侵蝕作用をうけるのである。風化され、崩壊し、川によって侵蝕され運搬された岩屑は低いところに堆積する。

前述したように古生層をつきやぶって噴出して火山体を構成した赤城山は、山崩れ、河川の侵蝕作用等絶え間なくはたらきかける労力によつて変形を受けてきたし、今後も続けられるのである。このような作用は山地としての生命

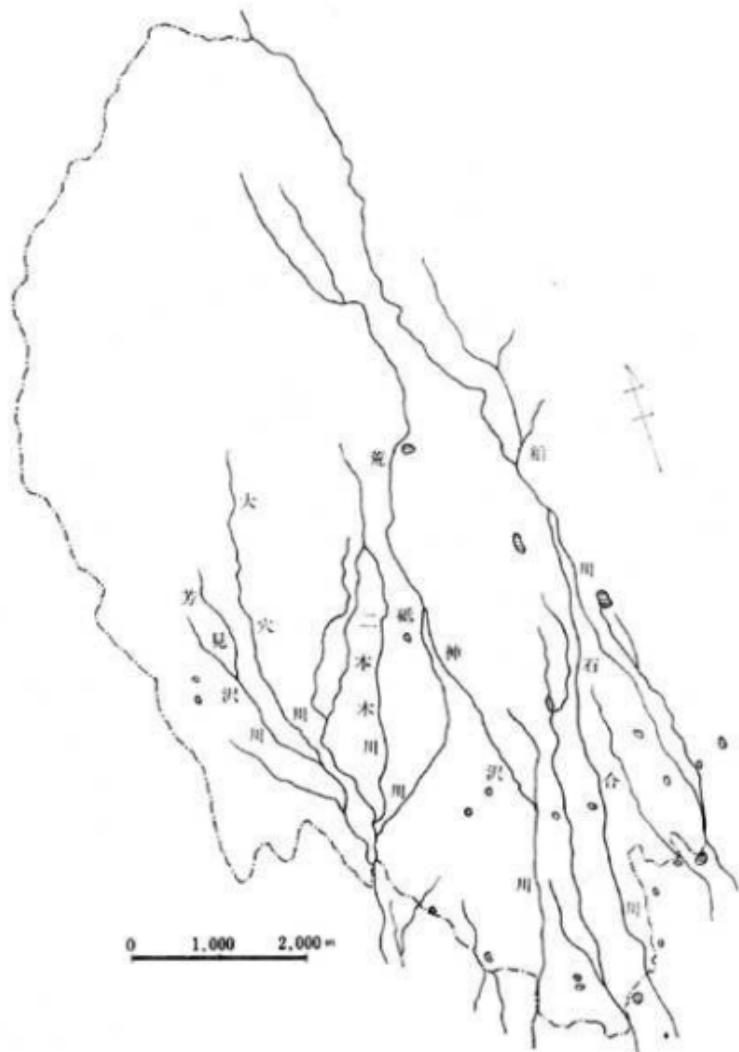


図3 宮城村切峰面図

のなくなるまで続ければあるのである。

この項では荒砥川・大穴川の侵蝕と堆積作用を中心として、宮城村の地形を考察してみることにする。

(一) 切峰面図による観察

宮城村の最高点は荒山山頂である。二万五千分の一地形図により切峰面を作成し、原地形を考察すると、宮城村の土地は荒山を頂点として、その熔岩流による傾斜地をなし、赤城火山の山腹部を形成する。山頂より約四・六キロメートル続き、山麓部へ移行する。そして、約七・五キロメートルはなだらかでみごとな赤城の裾野をなしている。

切峰面作成については、三〇〇メートルの谷中の谷は全部埋めて一〇〇メートルだと等高線で侵蝕をうける前の原地形を表現しようとしたものである。しかし三〇〇メートルの谷を埋めたこの切峰面では、荒砥川・大穴川の上流の侵蝕谷が埋め残された。このことは侵蝕量が極めて大であるか、原地形にも凹地があつたかである。

赤城南面を流れる主な川は荒砥川と柏川である。大穴川は河川としてはこの二つの川より小さいしその谷頭もカルデラ壁まで達していない。しかし谷頭は広く大きいことが観察される。

柏川・荒砥川は、谷頭がカルデラ壁に達し、柏川はカルデラ壁を破って峡谷をつくり、荒砥川は牛石峠でカルデラ壁を侵蝕し、これを破壊しようとしている。

大穴川がその集水面積、川の発達からみて大きな谷頭を谷幅を有するのは注目に値する。

(二) 高度分布頻度曲線

宮城村の土地はどのような高度をもつてひろがっているのであろうか。宮城村の高度別分布の頻度を表わす図4によつて考察すると次のことがいえる。

ア 標高二〇〇メートルから五〇〇の土地が宮城村の面積の六〇%を越える分布をしており起伏量の少ないやや

かな傾斜地となつてゐる。

イ 六〇〇メートルから分布が少くなり熔岩流末端地形が高度分布にあらわれてゐる。

ウ 七〇〇メートルと八〇〇メートルは比較的多く分布してて、侵蝕からとり残された荒山熔岩流の平坦面が広く存在していることをしめしてゐる。

エ 九〇〇メートルから急に分布が減少してゐるのは荒山に対する荒砥川・大穴川の侵蝕が影響してゐる。

オ 一〇〇メートルからは荒山の山頂部の高度分布をあらわしてゐる。

(三) 荒砥川・大穴川の侵蝕と堆積

赤城火山の噴出により火山体の基部がつくられ、中期の活動によつて荒山が噴出して集塊岩、熔岩等を堆積させて宮城村の原地形ができた。また鍋割山も、荒山と同質の復輝石安山岩の熔岩を噴出したが、荒山より粘性があり熔岩を遠方まで流出させずに、鐘状火山様の山体を築いた。その後これらの土地は侵蝕作用を受け現在のような地形をなしてゐるわけである。

ア 荒砥川
火山体を侵蝕し、その岩屑・土砂礫を下流に堆積させたのは、荒砥川・大穴川・柏川の各水系である。

ア 柏川

柏川はカルデラ内の小沼より流出し、カルデラ壁を侵蝕して、火口瀬の銚子の伽藍の峡谷をつくつてゐる。火口瀬の外側は谷壁三〇〇メートルの高度差を示す深い侵蝕谷をなしてゐる。柏川は宮城村と柏川村の境界を南下するが、多量

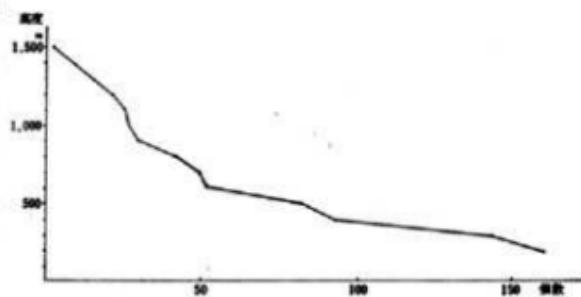


図4 宮城村高度分布頻度曲線

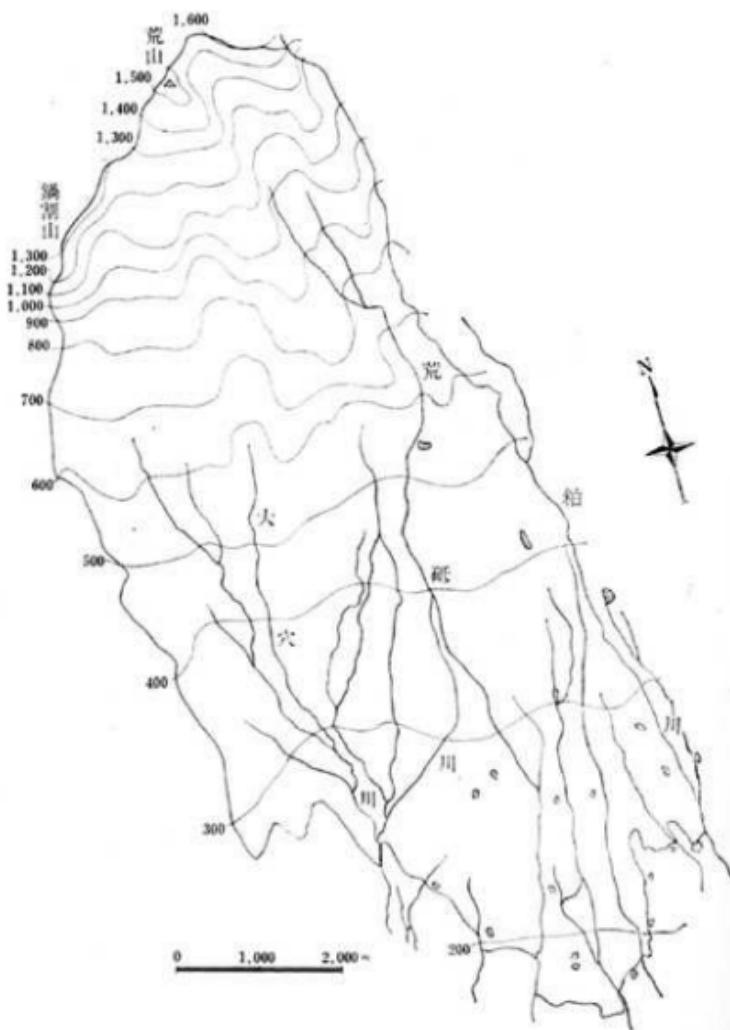


図5 宮城村の水系図



砂の堆積（赤城農場付近）

の岩屑や砂礫を運搬し、堆積して河口である湯之口附近を頂点とする扇状地を形成している。

またその下流の原附近を頂点として苗ヶ島、馬場等に砂礫を堆積させ、より低い土地を求めて流路をかえ、荒砥川の旧河床とも考えられる神沢川によって荒砥川水系と交さくしている。

イ 荒砥川

荒砥川は渓谷集水面積が柏川より広く集水地が杓子形をしている。神東橋の荒山熔岩末端より上流は壯年期の侵蝕がはげしい山地をなし、谷は深く刻まれ、谷頭はカルデラ壁に達している。谷頭部は谷壁が三〇〇メートルに達し、右岸は、荒山山頂部に迫っている。昭和二十二年九月のカスリン台風で荒砥川上流は多くの山崩れが発生し、その土石流は下流で氾濫して多大な被害を与えたのである。神東橋から上流では、谷壁やカルデラ壁をさかんに侵蝕し下刻を続いている。

上流部においてさかんに侵蝕をおこない供給された岩屑を運搬し、堆積させて荒砥川扇状をつくった。大沢附近を扇頂として鼻毛石を中心にはら原浜にいたる標高四〇〇

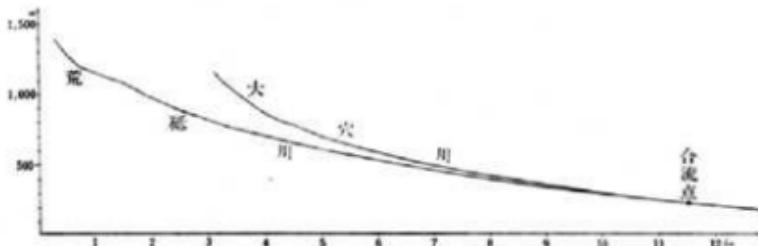


図6 荒砥川と大穴川の縦断面図

メートルから二〇〇メートルの地帯であって、等高線にもよくあらわれている。前述のカスリン台風のおりにはこの扇状地で氾濫している。

ウ 大穴川

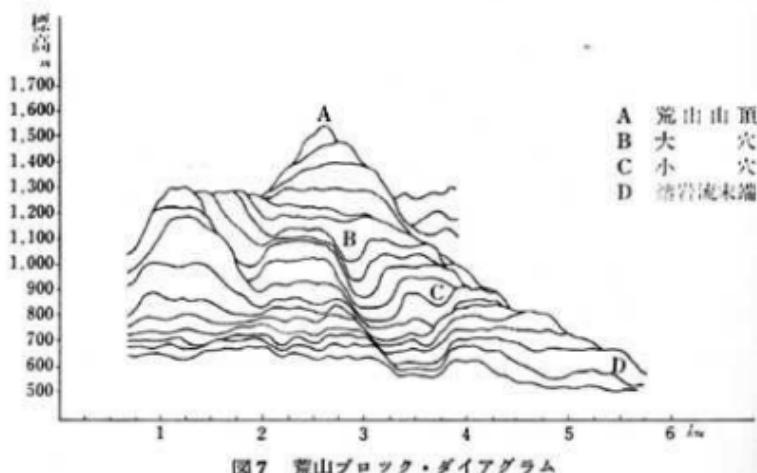
大穴川は荒山の南面中央部をえぐっている。谷頭は荒山の一〇〇メートル地点である。谷壁の最大標高差は二〇〇メートルで、谷は大穴の主谷と小穴の支谷に分かれている。

荒山のブロック・ダイアグラム（図7）は、荒山と大穴川に焦点をあてて作成したものである。荒山山頂より二五〇メートルごとの断面図をつくり、それを投影させたものである。この図は断面の連続によつて、表現が視覚的になり観察が容易にできる長所がある。観察の要点をあげると、

(ア) 荒山山頂部の南面はほとんど侵蝕を受けていない原地形が残されて幼年期の地形をなしている。

(イ) 大穴川の左右岸に平坦面が残され原形面が残され、幼年期の地形を示し、荒山熔岩流の末端である赤城神社裏まで続いている。

(ウ) 大穴川の谷の西壁はほぼ直線状をなしてて支谷は殆ど



発達していない。

(2) 大穴川の谷は、谷頭が荒山山頂の中腹であること、谷のまわりに原形面が残り幼年期の地形を示していることなどから侵蝕は荒砥川よりおくれていて、これから侵蝕がはげしくなる河谷であるということができる。

(3) 侵蝕の形態から荒砥川より初期のものであるが水量に比して谷幅が広い、これらのことから大穴川は川だけによる侵蝕ではなくて大きな崩壊をなし泥流となり流下したとも推測されるのである。

荒山南面断面図(図8)は、荒山山頂と三夜沢、柏倉を直線で結んでその断面をあらわしたものである。A線大穴川の東側の山脚を、B線は大穴川の谷底を通っている。

プロフタ・ダイヤグラムとあわせて読みとついただくと、荒山の山頂部、熔岩流による平坦な原形面、熔岩末端面の山脚、大穴川の谷底等が観察できる。

四 地形区分

赤城山は、カルデラ内の殆ど侵蝕を受けない幼年期の地形を示す山頂部と、河川による侵蝕がさかんにおこなわれて、急傾斜な山稜をなす山腹部、火山噴出物や河川の堆積物によって形成され、放射谷が発達しその間に原形面が残

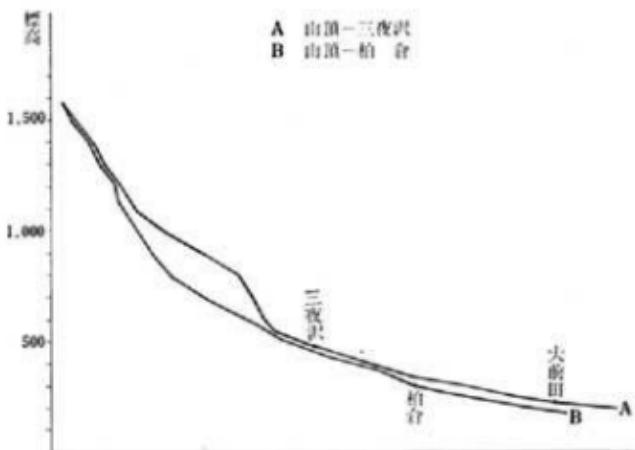


図8 荒山南面断面図

され、ゆるやかな傾斜をなす山麓部に分けられる。

宮城村は、カルデラ壁から南面にひろがるのであるが、外輪山である荒山の噴出によってその山頂が最高点であり、荒山の熔岩、集塊岩等が宮城村の土地形成に大きな役割を果たしたのである。したがって地形区分を宮城村の場合には、荒山山頂部とその下にひろがる中腹部の熔岩流原形面で幼年期の地形を示す平坦面、赤城山の山腹部に該当する侵蝕のすんだ荒砥川の上流部と、大穴川の侵蝕した谷でこれからも侵蝕が活発におこなわれる地域、それに火山噴出物と河川による堆積によって形成されたゆるやかな傾斜地の山麓に分けられる。

山頂部と原形面は熔岩で侵蝕から取り残されたわけであるが、基盤の集塊岩の侵蝕が進むとやがて、その面積は漸次減少する。

荒砥川は昭和二十二年のカスリン台風でも集塊岩や砂礫層の崩壊がはげしく大きな被害を出したが、さらに侵蝕がすすめば、カルデラ壁を破壊し、もっと多くの岩屑を下流に供給するであろう。

山麓は、荒砥川、粕川の大穴川などによって岩屑や砂礫を堆積し、流路をかえて扇状地を形成したが、生活の舞台となつていている。

赤城火山体の侵蝕は絶え間なくおこなわれ、洪水時には、人の眼にわかるような侵蝕、堆積をおこなうのである。水量を傾斜の増加は侵蝕の力を増大させる。渡良瀬川はローム層堆積後において一回下刻を復活し段丘をつくつているのである(町田貞著「河岸段丘」)。

五、まとめ

宮城村の地形、地質の赤城火山噴出以前として、足尾山地の古生層をとりあげ、二億年前の海底堆積物として山地

をつくり何回か海底に没し、一、五〇〇万年から二、〇〇〇万年前の中新生世の第三紀層が堆積した。これらの地層をつきやぶって赤城火山が噴出した。前期の活動時代で火山体の基部を構成し、中期の活動時代で、外輪山が噴出して、山頂部にカルデラが形成された。荒山は熔岩や集塊岩を噴出して、宮城村の土地がつくられた。後期の活動は、山頂部のカルデラに中央火口丘を噴出して現在の赤城火山が完成した。それとともに侵蝕作用がはたらき侵蝕がすすめられたが、山頂部は殆ど侵蝕を受けず幼年期の地形を示し赤城山全体としては若い侵蝕地形をしているが山腹部ははげしい侵蝕がおこなわれており壮年期の山容として多量の岩屑を下流に堆積した。最も侵蝕のすんだ柏川はカルデラ壁を破って火口瀬をなし、荒砥川はカルデラ壁を侵蝕していく、柏川とともに山麓に扇状地をつくっている。

荒山には原形面が残され、大穴川の侵蝕は両河川よりなおかくれているが山腹の原形面を侵蝕している。宮城村の主要河川は上流部でさかんに侵蝕をおこなって下流部へ岩屑、砂礫を運搬し堆積をしているのである。

赤城山は更に年月による侵蝕を受けて榛名山のように山体を変させていくであろう。

第三節 気候

本村の気候は、冬の異常乾燥と強風、夏の高温多雨といった一般的な特質があげられる。特に冬のからつ風は、気温のわりには冷たさを感じさせるとともに、異常乾燥とあいまつてもうれつな砂ぼこりを舞いたたせ、夏の雷雨となるで赤城山南麓一帯の気候上の大きな特色となっている。しかし、反面、冬の日照時間は圧倒的に多く、明るい冬を過すことができる。

これらの気象現象、特に、気温と降水量については、明治三十三年から現在に至るまで、前橋地方気象台の鼻毛石観測所として観測が続けられてきた。観測年次及び観測場所は次のとおりである。

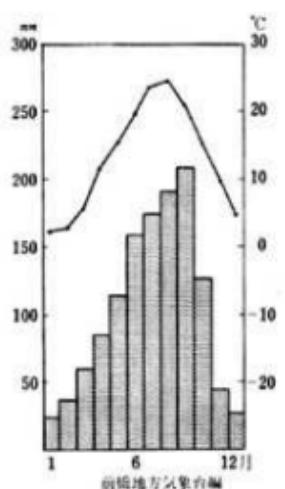
宮城小学校 明治三三～昭和一五年一時中断

宮城中学校 昭和三〇年～現在

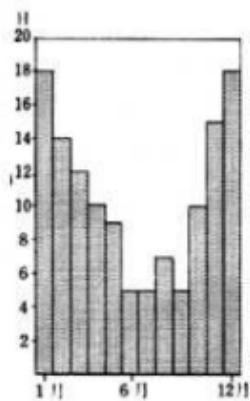
この長期間の累積された観測資料は、昭和三十三年に「群馬県気象年報」（前橋地方気象台編）としてまとめられ、済平堂から刊行された。以下、この本をもとに、本村の気候に関する各種資料を列挙してみよう。

(1) 気温及び降水量

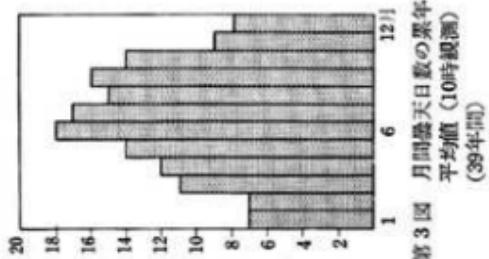
観測場所 宮城小学校



第1図 月別累年平均気温（最高・最低の平均）
月間降水量の累年平均値



第2図 月間快晴日数の累年平均値
(10時観測) (39年間)



図の月間晴天日数・月間曇天日数をあわせてみると、夏の多湿、冬の乾燥の様子がよくわかる。

この間ににおける年間総降水量の平均は、1114.1リットル最も多かった年は、一九一〇年(明治四三年)で一六六九.1リットル、最も少なかったのは、一九一四年(大正二年)で七八.4リットルである。

また、各月の最多降水量及び最少降水量の記録は、第1表のとおりである。表中の()内の数字は、それを記録した年を表示したものである。

第1表 月間降水量の累年最大値・最小値とその起年(38年間のうち)

(単位mm)

月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
最大値	55 (1909)	109 (1922)	105 (1927)	166 (1915)	287 (1920)	364 (1938)	358 (1916)	557 (1910)	417 (1921)	251 (1921)	199 (1916)	84 (1904)
最小値	— (1908)	2 (1907)	12 (1940)	28 (1919)	24 (1906)	37 (1904)	34 (1924)	28 (1931)	72 (1928)	22 (1914)	2 (1908)	— (1939)

(西暦年)

第2表 日最高気温・最低気温の月別累年平均値(39年間の平均)

(単位摂氏)

月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
最低気温	-3.0°	-2.3°	0.3°	6.1°	10.0°	15.0°	19.5°	20.5°	16.9°	10.5°	4.5°	-0.6°
最高気温	7.7°	9.0°	11.5°	17.3°	21.2°	24.5°	27.8°	28.8°	25.3°	19.9°	15.2°	10.2°

第3表 日最高気温・最低気温の月別累年最高値・最低値とその起日 (39年間) (単位西氏)

	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
最低気温	-15.4°	-10.1°	-10.3°	-5.4°	-0.2°	5.4°	7.6°	10.6°	5.8°	0.5°	-4.7°	-9.9°
	(24.1904)(10.1913)(1.1936)(2.1911)(6.1922)(6.1918)(8.1902)(12.1902)(30.1912)(26.1918)(25.1927)(31.1911)											
最高気温	21.7°	21.6°	24.7°	29.5°	30.8°	34.0°	37.5°	37.0°	33.1°	31.3°	24.8°	20.5°
	(23.1916)(25.1922)(29.1930)(21.1912)(6.1925)(27.1933)(24.1938)(9.1929)(8.1901)(8.1915)(1.1923)(8.1905)											

() 内は(日・年)

おだ、気温については、第一図のやうに、各月の平均気温であるが、これを最高気温・最低気温別の各月平均を示したもののが第2表であり、やむに、一日のうちの最高気温と最低気温の記録を表示したものが、第三表である。第三表中()内の数字は、その記録を出した年と日である。

第1表、第3表とともに

異常気象とも言ふべきであらうが、夏の降水量の少なかった年(一九三一年八月・二八〇)気温の上がらなかつた年(一九〇二年七月八日気温七・六度)等においては干ばつ、冷害で悩まされたことである。近年



第4図 7月平均気温



第5図 1月平均気温

は、これほどの異常は認められない。

以上は、宮城村一村についての資料であるが、これらを県内の他の地域と比較してみると次のようになる。

気温については、一月、七月の平均気温を等温線でみると、第4、第5図に示すとおりである。

これにみるよう、本村の気温（平均）は、夏は水上、中之条といった山岳部に近い所と同じであり、平野部の各地に比較してやや涼しいのに對し、冬は、山岳部より気温は高く、むしろ平野部に近いという特色をもつてゐる。

一方降水量についてみると、第6・7・8図のとおりで年間降水量、夏・冬の降水量ともに平野部に近いものであり、山岳部に比較すると少ない。

(2) 季節風

本村の気候上、大きな特色を示すものは冬のからつ

風であるが、この風に関する観測は過去においてなされていない。そのため正確な記録はない。しかし、幸

い、前橋気象台での前橋市における観測資料がある。

本村は、前橋市に比較的近接した地区でもあり、その



第6図 年降水量



第7図 7月降水量



第8図 1月降水量

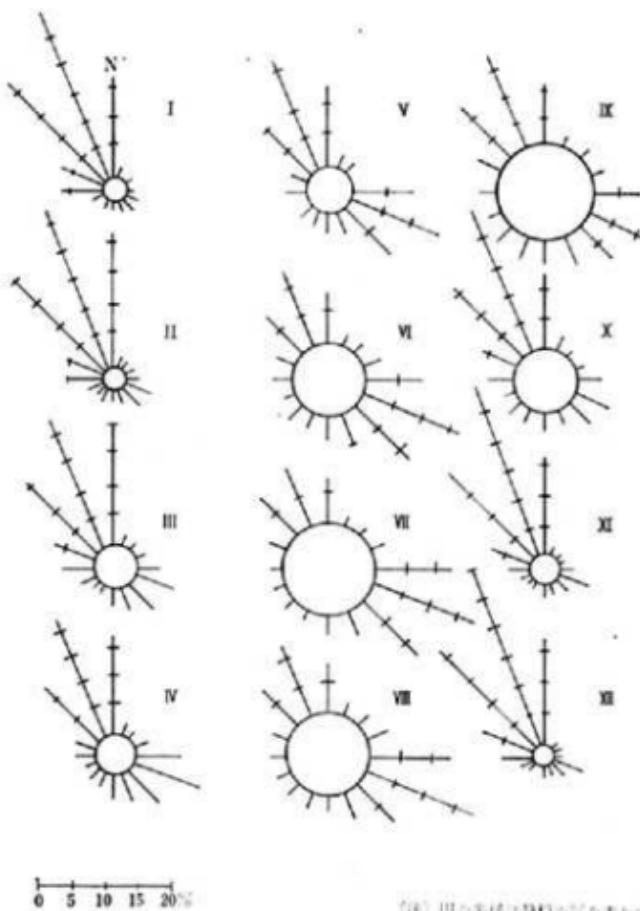
傾向は前橋市に類似しているといえよう。参考までに、前橋市の月別風向分布をかけておく。

この図からその風向は、十月から翌年の四月にかけての七カ月間は北風及び北西風が多く、六月から八月までは、南東風が多い。この両者の中間にある五月と九月は、風向の変り目にあたり、北西風及び南東風と同じ程度に吹いている。

また、十一月・十二月・一月・二月の冬の期間は、円の半径が小さく、即ち静かな日が少なく、風の強い日が多いのに対し、六・七・八月は円が大きく、比較的静かな日が続くことを示している。

風力についても、冬の季節風は、夏と比較して強い風が多く、風速二〇メートルに及ぶこともみずらしくない。この強風による被害も少なくない、特に、最近は、冬季のビニールハウスによる促成栽培が盛んになるにつれ、この倒壊も時々見られ、強風の農作業への影響もこれまでとはちがつた形で出てきている。

昭和四十五年八月二十一日、午後五時十分頃、本村鼻毛石南部でたつ巻が発生、赤城寺の西を、南東から北西にむけ通過し、民家一戸が倒壊、十戸が被害を受けた。



【注】円の半径は頻度の%を表す

第9図 前橋の風向頻度分布

(前橋地方気象台編「群馬県気象年報」による)

第四節 動物・植物

一、動物

家のまわりの動物

春の終りから晩秋まで、家のなかにハエやカまたはノミなどがあらわれてくる。ハエの類ではもつともふつうなのはイエバエであるが、クロバエ類・キンバエ類・ニクバエ類・サシバエ類・ショウジョウバエ類など各種のものがみられる。

力は座敷に侵入してきて人の血をすうのはほとんど全部アカイエカであるが、コガタアカイエカ・オオクロヤブカ・トウゴクヤブカ・ヒトスジシマカ・シナハマダラカなどもみられる。家の周囲でハエやカの発生源となるものは、ごみ箱・ごみ箱・汚水溜め・便所・肥溜め・畜舎・堆肥場などであるが、ごみ箱内はイエバエ類・クロバエ類・キンバエ類・ニクバエ類など、汚水溜めはアカイエカ、便所はハエの類、肥溜めは糞尿の腐敗の程度によつていちじるしくなるがハエ・オオクロヤブカ・アカイエカ・シナハマダラカ・コガタアカイエカ、畜舎内の散わらやまわりの土の中はイエバエ類、ことにブタ小屋はブタがこぼすえさの影響もあるものかイエバエ・サシバエのほかにクロバエ・キンバエ・ニ

クバエなどが発生する。またあまり注意されていないが、つけ物おけのあつかい方が悪いとヒメイエバエが多量に発生する。

台所には食物があるだけでなく、火を用いることが多いので冬もかなりしのぎやすく、水を使うので常に濡っている場所がある。さらに飼には暗いところがあるので、ハエやカの類・クロゴキブリ・チバネゴキブリ・ヤマトゴキブリ・マダラカマドウマ・ナメクジ・キイロナメクジ・ゲジ・オオゲジ・カマクラオオゲジ・ヘルヘフワジヤスデ・ヤケヤスデ・オカダンゴムシ・ホソワラジムシ・ワラジムシなどやトビズムカデ・アオズムカデ・イフスンムカデなども見られことがある。しかし、台所の改善がおこなわれたために、ここに出てくる動物は激減している。ことにコクゾウムシ・ココクゾウ・アズキゾウムシ・ニンドウゾウムシ・ソラマメゾウムシなどといわゆる貯穀害虫はあまり見られなくなつたが、ノシメマダラメイガ・コナマダラメイガ・コクヌスト

モドキ・ヒラタコタヌストモドキ・ノコギリヒラタムシ・ハラジロカツオブシムシ・トビカツオブシムシ・ヒメカツオブシムシなどのカツオブシムシ類・ホシカムシ類・ヒヨウホシムシ類など包装された食品や魚・肉加工品を食害する種類がみられるようになった。

このほか天井裏などをイエネズミがはしまわったり、これをおねらってアオダイショウが入りこんだりすることもある。

家のなかにはハエやカなどのほかにも、電灯をめがけたりしてシモフリスズメ・エビガラスズメ・ベニスズメ・モモスズメ・ウスタビガ・ヒメヤマニ・クサン・マエカカヒトリ・シロヒトリ・アカハラゴマダラヒトリ・シロシタヨトウ・アカバキリガ・オビカレハ・トビモンオオエダシヤク・ママノメイガ・マエアカスカシノメイガ・ヘビトンボ・マダラガガンボ・ウスバカゲロウ・ヘビトンボ・アメバチ・ムネアカセンチロガネ・シロスジコガネ・ドウガネブイブイ・コキコガネ・ナガヒラタムシ・クロカミキリ・アオカミキリモドキ・フウセンムシ・ゲンゴロウ・ミズスマシ・ガムシ・ツマグロヨコバイ・ベツコウハゴロモ・クサカゲロウ・セスジツニムシなどや時にはテンボ・カマキリなどまでいろいろの虫が入ってくるが、それをたべにオオヒメグモ・シラヒゲモ・ヒラタグモが姿をあらわしたりする。

衣服整理のやり方も、時代とともにかわってきたが、衣類を食い荒らされることはだんだん少なくなってきた。それでモヒマルカツオブシムシ・ヒメカツオブシムシ・イガ・コイガなどが全くなくなったわけではない。家具や家屋の木材に孔を開けるのにヒラタキタイムシがあり、家の土台や床などをヤマトシロアリ、イエシロアリが潜入していることもある。

家の外まわりでは、外燈があると夏にはいろいろな昆虫が集まるのでヤモリがびったりと着いていることがあるし、冬には日だまりになる壁などにハエ・ハナアブなどが集まるのでハエトリグモがはいかいでいる。板壁の下や柱の根元などに長い管状の住居を作っているのはジグモである。床下などで風通しのよいところの乾いた砂に、すり鉢状の穴をつくってその底に潜んでいるのはウスバカゲロウ・コウスバカゲロウ・ホシウスバカゲロウの幼虫である。軒まわりなどにはよくキアシナガバチ・セグロアシナガバチの丸い巣がぶら下っているが、種につかってある木に穴を開けたり、竹の穴を利用してジガバチモドキ・クマバチなどが巣くっているのもみかける。泥をかためてつくったスズバチの巣があることもある。スズメやキセキレイなどは屋根を中心として巣をかけ、ツバメは軒先や時には家中に入りこんで巣をつくることがある。

庭の動物

庭の動物は広さやそこに植えられている植物やその状態によって種類も異っているが、花に集まるもの、葉や茎に集まるもの、実際に集まるもの、地上で生活するものなどはかくそ・トンボなど、気をつけてみると調べつくせないほど多くの種類と複雑な生活が営まれている。

花に集まつてくるものとしてはクロアゲハ・モンキアゲハ・アゲハ・キチョウ・ベニシジミ・ヤマトシジミ・ツバメシジミ・ルリシジミ・キタテハ・イチモンジセセリ・ホウジャク・カノコガ・ヨトウガ・エビガラスズメ・ベニスズメ・シモフリスズメ・モモスズメ・シマハナアブ・ハナアブ・オオハナアブ・アシブトハナアブ・マメヒラタアブ・コハナモグリ・ハナモグリ・トラハナモグリ・ミドリカミキリ・エグリ・トラカミキリ・ヒメマルカツオブシムシ・ミヅバチ・クマバチ・クロマルハナバチ・シロスジヒゲナガハナバチ・バラキリバチなどの昆虫のほかに、冬にはツバキやビワの花にメジロ・ヒヨドリが訪れる。

葉や茎に集まるもののうち、葉についているものはたいていチョウカガの幼虫であるが、チュウレンジバチやバラリツツハムシの幼虫がバラ類・ルリチユウレンジバチの幼虫がツツジ類の葉を食べ、スズバチやセグロアシナガバチやクロスズメバチはチョウやガなどの幼虫を自分の幼虫の食物とし

ている。樹木の若芽・若い枝、キクやバラなどの芽につくものにはクリオオアブラムシ・ワタアブラムシ・キクヒメヒゲナガアブラムシ・イバラヒゲナガアブラムシがあり、樹木の茎につくものにはカメノコウロウカイガラムシ・ルビーロウカイガラムシ・ワタフキカイガラムシ・バラシロカイガラムシがある。アブラムシはやわらかい体をして敵を防ぐ方法をもたないから、コマユバチ・ドロバチ類・コバチ・ヒメハナバチ・セグロアシナガバチ・ヒラタアブ類・クサカゲロウ・ナナホシテントウムシ・テントウムシ・ヒメカノコテントウムシなど敵が多い。アリがアブラムシの分泌物を食物として得て、これを保護するのは共生の例として有名である。デンデシムシとして親しみぶかいマイマイの類はミスジマイマイ・ヒダリマキマイマイ・ヒタチマイマイ・チャイロヒダリマキマイマイ・オオケマイマイ・オナジマイマイなどであり、木や垣根などに多いが、昼は樹蔭に棲んでいるから、注意しないと見当らない。アシナガバチは家の軒の下だけでなく、庭の木の小枝や生垣の中などにも巣をつくる。アブラゼミ・ニイニイゼミ・ミンミンゼミ・ツクツクボウシなどは夏のあいだだけ巣をあらわし、木の幹に止まって鳴き立てる。庭にはいろいろな虫が集まるのでこれをねらってカマキリ、ハラビロカマキリ、ハラビロカマキリモドキ・ウスバカマキリな

ども入りこんでいる。

冬は野鳥にとつてきびしい時期であり、春には人家の附近から姿を消す野鳥も冬は人里近くで冬を越すが、庭や屋敷林の樹木などの実は絶好の食べものとなるので、スズメ・オナガなどの留鳥のほかにいろいろの漂鳥や冬鳥も庭先を訪れる。鳥のはかでは熟し柿にハチがやってくる。

地上生活をするものにはまずアリがあるが、アリには非常にたくさんの種類があり、どの家の庭にも一〇~一五種類ぐらいはみられる。アズマオオアカアリ・ヒメアリ・クロヤマアリ・アメイロアリ・ムネアカオオアリ・クロオオアリ・アシナガアリ・クロナガアリ・トビロシリアゲアリ・キイロシリアゲアリ・ウメマツアリ・シベリアカタアリ・トゲアリ・トビロケアリ・クロクサアリ・サムライアリなど乾いたところでもしめられた場所でも、あるいは石の下、朽ち木の中・地中などあらゆるところに棲息している。石の多い庭では夏にはトカゲのチョロ／＼と走るのがみられるが、尾がルリ色に青びかりしているのは未成熟のものである。ヒキガエルは夕方に姿をあらわし、のっそり／＼と歩いているがミズや昆虫をねらっている。庭の落ち葉や石の下、植木鉢の

下など湿気のあるところには、オカダンゴムシ・ワラジムシ・ヤスデ・ムカデ・ゲジ・ハサミムシ・クロイロコウガバイブル・フツウミミズ・シマミミズ・ゴミムシ・ヨツボシゴミムシ・セスジヒラタゴミムシ・アオバアリガタハネカタシなどがかくれている。夏から秋にかけてはクサヒバリ・エンマコオロギ・セスジツユムシ・ヒシバッタなど草地にふつうな種類もみられる。

庭にくるトンボの類はシオカラトンボ・ナツアカネ・アキアカネ・ギンヤンマなどであるが、時にはオニヤンマが姿を現わすこともある。夕方にはカトリヤシマ・ヤブヤンマがさかんに飛びまわる。

庭にはいろいろの虫がいるから、かなり多くの種類のクモがみられるが網をつくるオニグモ・ジョロウグモ・コガネグモ・アシナガグモ・オナガグモ・ゴミグモ・タサグモ・タナグモ・ヒラタグモなどと、巣をつくらないあちらこちらと歩きまわっているハエトリグモ・アリグモ・ハナグモ・ドクグモなどと、庭木の根元などの地中に巣をつくっているジグモなどがある。

屋敷林は規模やはえている植物の種類などいろいろちがいがあるが、森林に似た環境のなかに、人為的なものが加わった

ているから、そこに生活する動物は、多分に森林の様相を示すとともに、自然とはことなった状態もあらわれてくる。た

屋敷林の動物

とえば森林ではヤマトヤブカ・ヤマトハマダラカ・ヒトスジシマカなどがみられるが、竹がはえていて切り株があればシロカタヤブカ・ヤマシマカ・オオクロセブカが多くヤマトヤブカはわずかにみられない。また森林よりも実のなる木が多くあるから、冬のあいだはいろいろな野鳥が集まっている。木の実とこれを好む鳥との関係をみるとカキカラス・オナガ・ムクドリ・メジロ・ヒヨドリ・ツグミ・スルデークラス・カケス・オナガ・ムクドリ・メジロ・ヒヨドリ・ツグミ・ミ・ジョウビタキ・キジバト・シジニウカラ・ニノキカラス・オナガ・ムクドリ・メジロ・ヒヨドリ・ツグミ・ヒサカキカラス・カケス・オナガ・ホオジロ・メジロ・シジュウカラ・ヒヨドリ・ツグミ・キジバト・ムクドリ・ホオジロ・ヒヨドリ・ツグミ・ジョウビタキ・カラ・ヒヨドリ・ツグミ・キジバト・ヘンカズラカラス・キジバト・ムラサキシキブカラス・オナガ・メジロ・ツグミ・キジバト・ヤブコウジーシジユウカラ・ツグミ・キジバト

ト・タラノキカラス・カケス・ホオジロ・メジロ・ヒヨドリ・ツグミ・キジバト・ノブドウカラス・オナガ・メジロ・ヒヨドリ・ツグミ・キジバト・ツルウメモドキ・オナガ・ムクドリ・メジロ・シジニウカラ・ヒヨドリ・ツグミ・マツ・スズメ・ホオジロ・シジニウカラ・ヒヨドリ・ツグミ・キジバトなどとなるが、周年みられるものはスズメ・コカワラ・ヒワ・シジニウカラ・ムクドリ・モズ・オナガ・キジバト・ハシブトカラス・ハシボソカラスくらいであるのに、冬鳥としては庭先などをふくめてこれらにまじってウズラ・ホオジロ・アオジ・ウグイス・ヒヨドリ・イカル・メジロ・カケス・ブクロウ・ジョウビタキ・ツグミ・ヒガラ・コガラ・ゴジユウカラなどがみられる。

昆虫その他、クモなども森林にすむものと共通のものが少くない。

森林の動物

森林は雑然としているように見えても、樹木の高さ、枝の広がり、明るさなどからかなり整然とした層状の構造がある。ふつう高木層・亜高木層・低木層・草本層・コケ層などに分けられているが、その下に土壤があり、それぞれのところにきわめて多様な動物の群れが生活しているのである。

まず哺乳類からみるとシカ、イノシシ、クマなど大型のも

のは山麓地方に棲むことはもちろん、山地においてもクマを除いては見られなくなってしまった。中型のものもヤマイヌ（ニホンオオカミ）は絶滅したし、サル・キツネ・タヌキ・アナグマなども山地に生き残っているだけである。これは乱獲の結果と山麓地方の森林・草原の開拓による食物の欠乏、かくれがの消失などとヤマイヌは犬の病気・イノシシは豚

レラの伝染などのためである。小型のものでもノウサギ・リス・ニッコウムササビ・ホンシニウモソングなどは山地にかぎられ、平地にすんでいるものはホンシニウモグラ・ヒメヒミズモグラ・ホンシニウジネズミ・ホンシニウトガリ・ネズミ・アカネズミ・ヒメネズミ・ハタネズミなど地下や半地下生活を送るものであり、これらの大部分は山地にもすんでいる。小型の哺乳類で山地を本来の棲みかとしているものはコモグラ・ミズラモグラの二種である。コウモリ類はアブラコウモリ・モリアブロコウモリ・ヤマコウモリ・コヤマコウモリ・キグシラコウモリ・コテングコウモリ・テングコウモリなどであるが、アブラコウモリのはかは森林性のものであって山地に多く、アブラコウモリも數は多くないので、コウモリを見かけることは少ない。

哺乳類について大きなものは鳥類であるが、夏と冬、山麓地方と山地、低木林と高木林とではいちじるしくことなつたものがみられる。

山麓地方で周年みられるのは、カラス類ハシブトガラス・ハシボソガラス・オナガ・ムクドリ類のムクドリ、アトリの類のコカラヒリ・ホオジロ・メジロ類のメジロ・シジルウカラ類のシジュウカラ・エナガ・モズ類のモズ・ヒヨドリ類のヒヨドリ・ウグイス類のウグイス・フクロウ類のオオコノハヅク・フクロウ・ワシタカラ類のトビ・ハト類のキジバト、キジ類のコジケイである。カラスのハシブトはハシボソに

くらべて嘴は太く長く、体もやや大きい。鳴き声もややふとく硬いから、野外においてもそれを識別することは困難でない。近来はしだいに影がうすくなっているが、山麓地方のあちこちにアカマツやクロマツの大きい木や林があったころには果もたくさんかけられたり、繁殖期以外には群棲し、夕方大きな群れをなしてねぐらの森に帰つてゆくのがみられた。モズが人々の注意をひきやすいのは秋であるが、木の梢でキイキイと高鳴きをするのは、冬を越すために脚をとる構張りを宣言しているのである。コカラヒリ・ホオジロは以前はスズメの類とされていたが、最近ではスズメ類（キンバチ科）に属するものは、スズメ・ニユウナイスズメの二種になつた。ムクドリ・メジロ・エナガ・ヒヨドリ・ウグイスはだんだん夏には姿がみられなくなつていて、オオコノハヅクはいわゆるミミズクである。コジケイは中国南部を原産とする鳥であるが、大正一〇年ごろに東京と横浜とで放鳥されたのが帰化するはじまりで、その後各地でも放たれ、現在では北海道を除く各地で繁殖している。キジは以前は山麓地方の雑木がまばらにはえたところで見かけたし、地震などの前に現ではおそらく跡を絶つたのではないか。これらのようにはほんと移動せず同一地方に一年じゅうみられるものを留鳥といい、夏は涼しい山地に移つて繁殖し、秋には山麓地方に現われるというように、季節に応じて水平あるいは垂直

的に多少の移動（漂行）をするものを漂鳥、繁殖地と越冬地の間を毎年きまつた季節にくりかえし移動するもので留鳥。漂鳥よりも季節的・距離的に広範囲にはつきりしているもの渡り鳥といい、そのうち日本において繁殖するものを夏鳥、越冬するものを冬鳥、繁殖も越冬もしないものを旅鳥といふようによんでいる。山麓地方に夏にみられるものは、留鳥のはかに夏鳥のモズ類のチゴモズ、サンショウウクイ類のサンショウウクイ、ヒタキの類のコサメビタキ、サンコウウチヨウ、ウグイス類のセンドアイムシクイ、ヨタカ科のヨタカ、ホトトギス類のホトトギス・カツコウ、フクロウ類のアオバズクなどである。サンショウウクイはヒリッヒリ、ヒリッヒリと鳴きながらやや緩慢に波状に飛び、一見セグロセキレイに似ているが、地上におりることはない。サンショウウクイという名は鳴き声によつて「山椒はヒリリと辛い」という意味であつて、この鳥がサンショウウクイをくうということではない。サンショウウクイも鳴き声が「月・日・星・ホイ・ホイ・ホイ」といふようにきこえるところからついた名であるが、雄は非常に長い尾をつけている。センドアイムシクイは山麓も標高の高いところにいる。ヒタカ・カツコウは標高の低いところにはほとんどなくなつたが、ホトトギスは夜間注意していればまだ鳴きながら飛ぶのをきくことはできよう。冬にみられるものは、留鳥のはかに漂鳥としてカラス類のカケス、アトリ類のイカル・ウソ・アオジ・ホオアカ、セキレイ類のビンズ

イ、ゴジュウカラ類のゴジュウカラ、シジュウカラ類のヤマガラ・コガラ・ヒガラ・キクイタダキ、ツグミ類のルリビタキ・アカハラ・トラウグミ、ミソサザイ類のミソサザイ、キツツキ類のアオゲラ・コゲラ、ワシシタカ類のノスリ・ハイタカ・チョウゲンボウ、シギ類のヤマシギなどと、冬鳥としてアトリ類のカシラダカ・クロジ・マヒワ・イスカ・アトリ、レンジャク類のキレンジャク・ヒレンジャク・ツグミ類はジコウビタキ・ツグミなどである。カケスは姿は美しいが鳴き声はギヤーギヤーといふ調子で、ドングリやクリなどを樹の洞などに貯えたり、ほかの鳥の声を巧みにまねしたりすることがある。ゴジュウカラやシジュウカラの類は他の種類のカラ類とまじりあって集まつて小さな群をなしていることが多い。ミソサザイはきわめて小形で、ウグイスの「笛」鳴きによく似た声でチャツチャツとなきながら、敏捷に「飛」などを潜りあつていて、コガラは単独でもいるが、よくカラ類の群れの中に混つていて、ノスリはいわゆるマグソタカであり、ハイタカはタカであるが、ほとんど見かけることができなくなつたというのが実情であろう。イスカは上下の「嘴」の先が交叉しているが、松の種子を好んで食べるから、それには都合がよい。レンジャク類は渡りにむらの多い鳥で、多く見られる年と少ない年とがある。ヤドリギの実を好み、その伝播にはヒヨドリも一役かっているが、この鳥が主としてやつていている。ジコウビタキは庭先などによく飛んできて、尾を上

下にふりながら鋭い声でヒッカ・ヒツクワ・タワ・タワツと鳴くので、冬鳥のなかでは最も目立つ。

山地の森林での留鳥はカケス（カラス類）、ゴジュウカラ（ゴジュウカラ類）、シジュウカラ（ヤマガラ・コガラ・ヒガラ・エナガ（シジユウカラ類）、アカゲラ・アオゲラ・コゲラ（キツツキ類）、フクロウ（フクロウ類）、キジバト（ハト類）、ウズラ・コジュケイ・キジ・ヤマドリ（キジ類）など、漂鳥はハシブトガラス・ハシボソガラス（カラス）、ムクドリ（ムクドリ）、イカル・ウソ・ホオジロ・アオジ・ホオアカ（アトリ）、ビンズイ（セキレイ）、メジロ（メジロ）、モズ（モズ）、ウグイス（ウグイス）、トラフグミ（ツグミ）、ミソサザイ（ミソサザイ）、ヤマシギ（シギ）などであるが、実際は一種の鳥でも個体的にみれば留鳥のなかにも夏は山地で繁殖し、冬は山麓に漂行するものがあり、漂鳥にも冬も山地にとどまるものもある。山地での真の留鳥はヤマドリくらいであろうが、ヤマドリはキジとともに日本特産種で、本州・四国・九州に限って棲息する。森林の地上にすむが、飛翔は早く直線的で、サジとともに狩猟鳥としてよろこばれる。鳴き声は低くク、ク、クであるが、翼でドンドドとドラムをたたくような音を出す。敵が近づくと樹の枝に飛び上がるかまたは飛び去るが、繁殖期には親鳥は傷ついたような態度で歩き、巣から離れたところまで誘ういわゆる擬傷をおこなう。ビンズイは木の梢にとまってビ・ビ・チチチと美しい

声でさえずりつけ、それが高調に連するとヒバリのようにさえずりながら一メートル空に舞い立つのでキヒバリともよばれている。夏鳥としてはチゴモズ・アカモズ（モズ）、サンショウクイ・サンコウチ・コサメビタキ・キビタキ・オオルリ（ヒタキ）、センダイムシクイ・ヤブサメ（ウグイス）、マミジロ・クロツグミ・アカハラ・ノビタキ・コルリ（ツグミ）、ヨタカ（ヨタカ）、カツコウ・ツツドリ・ホトトギス・ジュウイチ（ホトトギス）、サンバ（ワシタカ）、アオバト（ハト）などがみられる。チゴモズの鳴き声はギチ・ギチと獨りついてハルゼミの声に似たところがある。アカモズはモズに似ているが、額が白いこと、翼をたんだときに白斑がないことなどで識別できる。オオルリは谷の崖地や林間の枯損木のくぼみなどに営巣するため、渓谷附近に多い。トラフグミは早朝や夜間または曇天の日にヒー・ヒーの一聲をくり返して鳴くが、非常に渋い声のため各地にいろいろ不吉な伝説がある。トラフグミ・マミジロ・クロツグミ・アカハラは山頂に近いところに棲息している。ホトトギス類は自分で果をつくらす他の鳥の果にその卵を産むことで知られているが、カツコウはモズ・ホオジロ・ツツドリはセンダインムシクイ・ホトトギスはウグイス・ミソサザイ・ジュウイチはオオルリ・コルリに托卵することが最も多い。ワシタカ類の野外における識別はかなり難しいが、飛んでいるところをみると、翼の端が開くもののうち、トビは尾の端がへこで

いるが、ノスリは扇形であり、サシバ・ハイタカは尾をほとんど開かない。翼の端の開き方はサシバの方が大きい。鳴き声はトビがビー・ヒヨロ、ヒヨロ、ノスリがビー・ニー（ビー・ビィー）。サシバがビツ・クイー（ビヅー・ビィー）、チヨウゲンボウがキイキイキイ、ハイタカはほとんど鳴かないがキフキフキフ、飛び方は直線的ではやいのがハイタカ・チヨウゲンボウ、かんまんなのがサシバ、旋回するのがノスリ・トビである。アオバトはキジバトより大きく緑色でうつくしいが、アオー・アオーと長く続く薄気味悪い声でなき、數は少ない。冬鳥として渡ってきてここで冬を越すものは見られない。

哺乳類・鳥類のほかに比較的大きなものとしては、ヘビ類のオオダイショウ・ヤマカガシ・シマヘビ・マムシ・ヒバカリ・ジムグリ、トカゲ類のトカゲ・カナヘビ・カエル類のヤマアガエル・ニホンアガエル・アマガエル・ヒキガエルなどが多い。ヘビは山麓にも山地にもいるが、毒蛇として注意しなければならないのはマムシだけである。トカゲにくらべてカナヘビは湿ったところに多くみられる。カエルではヤマアガエルは山地に多く、ニホンアガエルは山麓に多いが、いずれもどちらにもすんでいる。ヒキガエルは山地にいるものには赤い斑点があるが、種類は山麓のものと同じである。

昆虫は動物のうち、最も多數を占めているが、森林にみら

れる動物としてやはり多いのは昆虫である。森林の昆虫といつても草原や田・畠の昆虫とくらべて根本的なちがいがあるわけではないが、植物の種類が変化に富み、環境条件が立体的であるだけに、昆虫の種類が多い。それらの昆虫が食物とする植物がきまっていることはいうまでもないが、森林昆虫は比較的多くの種類の植物につくものが多い。植栽林などの單純林よりも雜木林などの混生林の方が昆虫の種類が多いことは当然であり、雜木林にはチヨウ・ガの類だけでもおそらく一〇〇種以上の多くの種がいるといわれるが、いわゆる大発生は單純林に起きることが多い。

チヨウ・ガの生活は森林に限ったことではないが、森林は草原とともにチヨウ・ガの類のおもな発生源であり、生活の場でもあるから、チヨウは山麓地方でアゲハ・チヨウ類のクロアゲハ、シジミ・チヨウ類のムラサキシジミ・ウラゴマダラシジミ・アカシジミ・ウラナミアカシジミ・ミズイロオナガシジミ・オオミドリシジミ・ミドリシジミ・トラフシジミ・クロシジミ、テングチヨウ類のテングチヨウ、タテハ・チヨウ類のミドリヒヨウモソ・メスグロヒヨウモソ・イチモンジチヨウ・アカタテハ・ルリタテハ・シータテハ・コムラサキ・ゴマダラ・チヨウ・オオムラサキ、ジヤノメ・チヨウ類のヒメウラナミジャノメ・ヒメジャノメ・ヒカゲチヨウ・キマグラヒカゲセセリ・チヨウ類のダイミ・ウセセリ・キマダラセセリ・ホシチャバネセセリなど、山地でジャコウアゲハ・オナガアゲ

ハ(アゲハチヨウ)・スジグロシロチョウ・エゾスジグロシロ
チヨウ(シロチヨウ)・ウラゴマダラシジミ・ウラキンシジミ
・ウラナミアカシジミ・ムモンアカシジミ・ミズイロオナガ
シジミ・ウスイロオナガシジミ・オナガシジミ・ウラクロシ
ジミ・フジミドリンシジミ・オオミドリンシジミ・クロミドリン
ジミ・ジョウザンミドリンシジミ・エゾミドリンシジミ・ヘヤシ
ミドリンシジミ・ミドリンシジミ・メスアカミドリンシジミ・アイ
ノミドリシジミ・トラフシジミ・ミヤマカラシシジミ(シジ
ミヨウ)・コヒヨウモンモドキ・ミドリヒヨウモン・メス
グロヒヨウモン・イチモンジチヨウ・アサマイチモンジ・ホ
ンミスジ・ミスジチヨウ・アカタテハ・ルリタテハ・エルタ
テハ・ヒオドシチヨウ・キベリタテハ・シータテハ・コムラ
サキ・スミナガシ・ゴマダラチヨウ・オオムラサキ(タテハ
チヨウ)・ヒナウラナミヤナメ・ヒメヤナメ・コジヤノ
メ・クロヒカゲ・ヒカゲチヨウ・クロヒカゲモドキ・ツマジ
ロウラジヤノメ・ヤマダラヒカゲ・ヒメキヤマダラヒカゲ・オ
オヒカゲ(ジャノメチヨウ)・ダイミヨウセセリ・キマダラセ
セリ・ホシチバネセセリ(セセリチヨウ)などがいる。タ
テハチヨウ・ジャノメチヨウの類は木の幹の傷口からにじみ
出る樹液に集まり、その他の類のものは多くは花に集まつて
いる。ウスバシロチヨウ・ルリタテハなどは氷河時代に南へ
追いやられた残留種の一部とされている。イチモンジセセリ
は種の害虫であるのにもかかわらず「豊年虫」とよぶところ

があるのは、多照高溫が発生の好条件になるためと思われる。ガの類は主なものでもヨコエビガラスズメ・クロスズメ
・クチバズズメ・ヒメウチズズメ・ウチスズメ(スズメガ)、
ウスタビガ・クロウスタビガ・ヤママユ・ヒメヤママユ・ク
サン・エゾヨツメ・オナガミズアオ・オオミズアオ(ヤマ
マユガ)・カノコガ・キハダカノコ(カノコガ)・イボタガ
(イボタガ)・サラサヒトリ(ヒトリガ)・トラガ(トラガ)
ナシケンモン・オオケンモン・カラフトゴマケンモン・ニツ
コウケンモン・オオバヤガ・ヒトテンケンモン・ウスイロケ
ンモン・ギシギシヨトウ・ホソアオバヤガ・ナカグロヤガ・
シロシタバ・キシタバ・ウスアカヤガ・コガタキシタバ・コ
ウスチャヤガ・オオトモエ・アケビヨノハ(ヤガ)・シヤチホコ
ガ・セダカシチャホコ・ブナアオシャホコ・ツマキシチャホ
コ(シャチホコガ)・スギドクガ・アカヒゲドクガ・マイマイ
ガ・エルモンドクガ・ノンネマイマイ・カシリマイマイ・モ
ンシロドクガ(ドクガ)・カレハガ・オビカレハ・ツカレハ
・クヌギカレハ(カレハガ)・イカリモンガ(イカリモンガ)、
モントガリバ・オオバトガリバ・ギンモントガリバ・サカハ
チトガリバ(トガリバ)・ウスギスカガバ・フタシロカガバ・
マエキカガバ(カガバガ)・シロオビフュシヤク・クロテンフ
ュシヤク・ホソバフュシヤク・ウスモソフュシヤク・ホシシ
ヤク・ウスアオシヤク・チズモンアオシヤク・アトヘリアオ
シヤク・カギバアオシヤク・ヒメカギバアオシヤク・カギシ

ロスジアオシヤク・クロスジアオシヤク・キマエアオシヤク・ホソバカラカアオシヤク・クロモントアオシヤク・ナミガタウスキアオシヤク・ウスキトガリヒメシヤク・ウスキヒメシヤク・オイリケヒメシヤク・フタナミトビヒメシヤク・アカモンナミシヤク・シラフシロオビナミシヤク・ツマキシロナミシヤク・ヨコジマナミシヤク・クロオビフユナミシヤク・ソトカバナミシヤク・ウメエダシヤク・ヒョウモンエダシヤク・シロテンエダシヤク・ウスバミスジエダシヤク・ヨモギエダシヤク・トビモンオオエダシヤク・ニッコウエダシヤク・アミメオオエダシヤク・アトジロエダシヤク・ハスオビエダシヤク・ホソバタガリエダシヤク・クワエダシヤク・カバエダシヤク・ウスマラサキエダシヤク・シロツバメエダシヤク・シロモンクロエダシヤク・アカエダシヤク(シヤクガ)・アゲハモドキ(アゲハモドキ)・キンモンガ(フタオガ)・ウスバツバメガ・シロシタホタルガ・ホタルガ(マダラガ)・ギンツバメ(ツバメガ)・コスカシバ・カシコスカシバ(スカシバ)・ゴマフボクトウ(ボクトウガ)・キアダラコウモリ(コウモリガ)など、非常に種類が多い。

一般にチヨウとガは対立的に扱われているが、区別を一口に説明することはむずかしい。チヨウの類は昼間に活動し、触角の先端がこん棒状にふくれ、体が細くて翅が大きく、静止する時には翅を合わせて直立させるのに對し、ガの類は夜間に活動し、触角は糸状または羽状で、体は太く、静止する

時は翅を巻き戻すとされている。これらの点は大体あてはまるけれども、チヨウの中では、セセリチヨウ科は、全体の構造が他のチヨウ類とはことなつており、触角の先端はこん棒状あるいは糸状で、ミヤマセセリやダイミョウセセリは翅をひろげて静止するし、ガの中では、スズメガ科に属するオオスカシバやホウジャクなどは触角の先端は糸状であり、カノコガ・ソンシロモドキ・トラガ・セセリモドキ・トンボエダシヤク・ホシベツコウカガギバ・ホタルガ・キンモング・アゲハモドキ・スカシバガ類・マドガなどをはじめ多数の種類が昼間活動性であり、イカリモンガなどは、チヨウと同じように活動し、静止する時には翅を合わせて直立させる。ガの類は種類も多く変化に富み、一部のガとチヨウの相違は、ガの中での変化よりも小さいらしい。

雜木林の中のナラ・クヌギなどの幹に、木くすがもり上があろう。これはたいていカミキリムシ類の幼虫が、幹の中に穴を開けてもぐりこんでいる。木くすとふんを外に出したところから、樹液がにじみ出でているのであり、大形のアカシアクリガタ・ミヤマクワガタ・ノコギリクリガタ・コクワガタ・スジクワガタ(クワガタタムシ)・カブトムシ・カナブン・アオカナブン(コガネムシ)、ウスバカミキリ・ノコギリ

カミキリ・ミヤマカミキリ・ゴマダラカミキリ・キボシカミキリ・ヒゲナガカミキリ(カミキリムシ)、小形のヨツボシオオキスイ(オオキスイ)、ヨツボシケシキスイ(ケシキスイ)などの甲虫をはじめ、ホソアシナガバチ・キアシナガバチ・セグロアシナガバチ・ヒメスズメバチ・スズメバチ・キイロスズメバチ・クロスズメバチ(スズメバチ)、オオムラサキ・シータテハ・コムラサキ・キタテハ・ルリタテハ・アカタテハ(タテハチヨウ)、ジャノメチヨウ・コジヤノメ・ヒカゲチヨウ・キマダラヒカゲ・クロヒカゲ(ジャノメチヨウ)をはじめアブ・ハエなどが集まつてくる。夕方になるとスズメガ類も飛来し、暗くなると大形のヤガも盛んに活動する。

このように樹液を出す孔には、数多くの昆虫が集まつてきて、液をすつたりなめたりしているが、一見すると雅然と集まっているように見えて、昆虫間には順位関係がある。大小いくつかの樹孔が、一つの幹にあいていると、液汁がよくにじみでるものから、ほとんどかわいているものもある。いままであげたかなりの種類の昆虫は、それぞれが単独で、樹孔のある樹にやつくると、みな同じあなを選ぶ性質がある。しかし、実際にはこれらの虫は、同じ時にあつまり、同じあなをえらぶことになるので、そこに競争がおこる。ところでの虫の間には、強いものと弱いものとの序列がある。そして、これは生まれてからのもの学習の結果ではなく、うまれながらにきまつているもので、この虫たちの間に

見られる順位関係は、樹孔群にやつきたときに、どの種類がどの樹孔におちつくかということに反映している。カブトムシ・クワガタムシ・カナブンなどは、樹孔群の中でもっともいい場所を占めるが、スズメバチ類も同じような樹孔にむけている。カブトムシなどは、スズメバチの存在を無視したように行動し、スズメバチがカブトムシなどを攻撃することはあっても、あまり効果はない。これはスズメバチは、カブトムシなどよりも劣位になつていているからである。チヨウ類はこれよりも劣位になつていてるので、カブトムシなどやスズメバチ類が汁をすっている樹孔から、少しはなれたあまりよくない樹孔にむれたり、そばでじつと止まつて待機したりしている。スズメバチの類はつぎつきと飛んでくるチヨウを、追いやつていることもある。同じチヨウ類といつても、コムラサキ・キタテハ・シータテハなどは、いっしょにむれて汁をすうが、劣位のルリタテハ・クロヒカゲ・ヒカゲチヨウ・コジヤノメなどはそれを避けて他のあの汁をすっている。しかし、これらのチヨウは、アカタテハなどがやつくると追い出してしまう。スズメバチ類のなかにも順位関係があるが、優位のコガタスズメバチが、樹孔群中のもつともよいものを占領すると、劣位のキイロスズメバチや、さらに劣位のキアシナガバチは、そばにあるあまりよくないあのほうに移ることはせずに、そこから飛び去つてしまつて、チヨウでみられたような、追いはらわれたものが、それを避けてそば

にあるますいあなたの汁をすうというような現象はみられない。スズメバチ類には、樹孔群を一種類だけで独占してしまった習性がある。スズメバチがつぎつきとやってくるショウ類を追いはらうのは、この性質のあらわれである。樹孔をえらぶ競争にみられる昆虫の順位関係は、カブトムシ・クリガタムシ・カナブン・コガタスズメバチ・キロスズメバチ・キシナガバチ・フクラスズメ・ゴマダラチョウ・ウーシータテハ・コムラサキ・キタテハーリタテハ・クロヒカゲ・ヒカゲ・ヨウ・コジャヤノメー・アカタテハとなり、一見するとたくさんの虫が雑然と集まってきて、液をすったりなめたりしているように見えても、よく観察すると、そこにはきびしいおきてがはたらいていることがわかる。

クワガタムシ・カブトムシなどとともに夏の森林に忘れられないものにセミとトンボがあるが、セミ類ではヒグラシが雑木林・スギ林などに多く、ハルゼミはマツ林にふつうに見られ、エゾゼミ・エゾハルゼミは山地にすみ、トンボの類ではカトリヤンマ・ヤブヤンマが多く、モノサシトンボ・オオアオイトトンボ・ホンサンエ・ノシメトンボなどのほかに、山地にミヤマカワトンボ・ムカシトンボ・ムカシヤンマなどがみられる。

これらのほかふつうにみられる昆虫としてコロギス・ヤブキリ・ホソクビフユムシ・オオカマキリ・ハラビロカマキリ(直翅類)、ヒメグンバイ・ノコギリヒラタカメムシ・ハサミ

カメムシ・セアカツノカメムシ・ヒメツノカメムシ・ツマジロカメムシ・アシアカカムシ・ツノアオカメムシ・トホシカメムシ・サジタヌギカメムシ・マツアワフキ・ミミズク・ツノゼミ・アオハゴロモ・マツオオアブラムシ・クリマダラアブラムシ(半翅類)、ブライシリニアゲ(長翅類)、ウスモソニヒロバカゲロウ・ホシウスバカゲロウ・ヒメカマキリモドキ(瓢虫類)、ハンミョウ・クロカタビロオサムシ・クロナガオサムシ・マイマイカブリ・ルリヒラタゴミムシ・ジルウジゴミムシ・ヤホシゴミムシ・ルリコガシラハネカクシ・ヨツボシヒラタシデムシ(甲虫類)、アカウシナップ・シナガムシヒキ・マガリケムシヒキ・ホシアシナガヤセバエ(双翅類)、ニホンキバチ・クビナガキバチ・セマダラハバチ・コンボウアメバチ・オオホシオナガバチ・トゲアリ・スズメバチ・キイロスズメバチ・ホソアシナガバチ(膜翅類)などがいる。山地の朽ち木の中や石の下などにいるガロアムシは、日光中禅寺湖畔ではじめてこれを発見した駐日フランス總領事の方ロアにちなんで名づけられたが、ガロアムシ類は、コオロギ類とゴキブリ類の中間の特徴をもち、地質時代に繁栄したものが、"生きた化石"の一つであり、日本(本州)と北アメリカの一部に限って分布している。

なお、森林は、多くの動物のすみ家であり、飼場であり、休息所であるが、森林の動物といつても、草原や田畠・屋敷林・庭などの動物とくらべて、根本的な相違があるわけでは

なく、環境条件が立体的であるだけに、生活様式も多様となつてゐるのである。

耕作地の動物

耕作地と自然環境のもつとも大きなちがいは、耕作地ではかなり広い面積にわたってただ一種の作物だけが生育しているのに対して、一般の自然環境では同じ場所にいろいろな種類の植物がいりまじって生育しているのが普通であり、たとえば寒いところに成立するエゾマツ・トドマツなどの針葉樹の純林でも、高木層だけでなく低木層・草本層などをもつていて、かなり複雑である。耕作地は人工的に単純な植生を作るのであるが、食草が單一であるために棲息する動物はある程度限定されることになる。

〔水田の動物〕 水田にはイネが栽培されているが、イネが寄生した内部は高温多湿で、気象の変化が少なく安定している。しかし真夏のころは張られている水の温度も三七・八°Cに上るほどであるから、ここに棲む動物は高温にじゅう分抵抗するものではなくてはならない。水田の水中にみられるのは貝類のタニシ・モノアラガイや昆虫のゲンゴロウ・コオイムシ・ミズスマシ・アメンボ・タガメ・マツモムシ・タイコウチなどである。ミズアブ・ガガンボ・ユスリカの幼虫なども眼につくが、時にはドジョウが水底の泥を散らかして、通りのなかにその姿をかくす。湿田にはカワニナや小さなヒラマキミズマイマイなどやトンボの幼虫などがすんでいること

もある。トノサマガエル・ツチガエルはよく知られているが、ニホンアカガエルも産卵期には水田に集まる。水田の動物の中で特に問題になるのは害虫であり、その代表的なものはニカメイガ・セジロウンカで、そのほかにフタオビヨヤガ（イネアオムシ）・イチモソングセセリ（イネツムシ）・セジロウンカ・トビイロウンカ・ヒメトビウンカ・ツマグロヨコバイなどがいる。保温折衷苗代という育苗様式が普及し、それに適する品種として農林一六号が奨励されたが、これが栽培されるようになると、それまであせやぐるその他にはえていたイネ科の雜草で生活していたイネカラバエが水田に侵入し、イネに寄生するようになった。イネの穗が出来るところになると、附近の林などで越冬したイネカメムシが集まってくるし、コバネイナゴ・ハキナガイナゴがイネの間をガサガサと音を立てながら飛びかっている。秋口になればタンボコオロギ・タンボオカメコオロギ・ミヅカドコオロギ・エンマコオロギ・ツヅレサセコオロギ・クマコオロギなどの声もきかれる。

夏の水田は日本脳炎と重要な関係がある。それはコガタアカイエカのボウフラがそだつ主要な場所となるからである。コガタアカイエカはウシやウマ・ブタなど大型の家畜の血を

すうもので、人間の血を吸いにくるのはごくわずかであるとされているが、日本脳炎ウイルスに汚染されているブタなどを吸血したコガタアカイエカによって、人間への感染がおこるのであろうと推論されている。

このように水田には多くの種類の小さな動物がいるので、これを食物とする鳥類のツバメ・スズメ・コワラヒリ・ムクドリ、時にはコサギ・チュウサギ・ヒタイナ・クモ類のセスジアカムネグモ・ウズキドクダモ・キタズキドクダモ・ハマキフクログモ・ドヨウオニグモ・コモリグモ・アシナガグモなど、トンボ類のシオカラトンボ・アキアカネ・ナツアカネ・ハラビロトンボ・シオヤトンボ・ショウジョウトンボ・コシアキトンボなどがみられる。飛虫類ではカナヘビ・シマヘビ・ヤマカガシなどであるが、ヤマカガシは特に本道を好むと見えて最も多く姿をあらわす。哺乳類ではホンドハツカネズミ・ニホンクマネズミ・アズマモグラ・ホンシュウジネズミ・ホンドハタネズミ・ホンドイタチなどがはいりこんでくる。春には裏作の麦の間にヒバリが巣を営むことも多い。

(烟の動物) 烟には栄養豊富な食草がふんだんにあり、そして、よく耕された柔軟な土は多量の有機物を含み、適度の湿り氣を常に保っているために、その中で生活したり、繁殖したり、越冬したりするのにきわめて好都合であるから、いろいろの動物が集まつてくる。土の中にはフツウミミズ・シマミミズ(ミミズ類)、ハサミムシ(ハサミムシ類)、オサムシ

モドキ・アオオサムシ(オサムシ類)、ゴミムシ・ヨツボシゴミムシ・アオゴミムシ・キボシアオゴミムシ・セスジヒラタゴミムシ(ゴミムシ類)、ケラ(ケラ類)、キリウジガガンボモモハバチ・ダイコンサルハムシ・ダイミョウバッタ・ドウガネブイブイ・マメコガネ・ヒメコガネ・イネネクライハムシなどの幼虫が目につき、ホンドハツカネズミ・アズマモグラ(哺乳類)がトンネルをつくっていることもあり、地上をツヅレセコオロギ・エンマコオロギ・シバスズ・タマコオロギ・マダラズズ・ミツカドコオロギ・ハラオカネコオロギ(コオロギ類)、キリギリス・セスジツユムシ(キリギリス類)、ヒシバッタ(ヒシバッタ類)、ゴミムシ類、クサグモ・ウズキドクダモ・アシダカグモ・ハタケグモ・スジブトハシリグモ(クモ類)、トカゲ(爬虫類)などがはい、茎や葉にはアブランシ・ハムシ・テントウムシ・カヌムシ・ゾウムシ・チヨウヤガの幼虫、カマキリ・クモ・アマガエルなど非常に多くの種類がすんでいる。花にはチヨウ・ハチ・アブなどが多數飛んでくるし、鳥類のヒバリ・スズメ・ムクドリ・カラス・キジバトなどは煙で餌をあさることが多いし、果をつくるものとしては地上にヒバリ・高刈りの桑にホオジロ・モズ・チゴモズなどがある。

烟と一口にいっても、栽培している作物の種類はさまざまであるが、烟にいる動物にはどの煙にも共通なものと、その作物に特有のものとがある。その作物特有の動物といえば、

そのほとんどが、その作物を食草とする害虫である。おもな作物とその害虫をみるとムギ畑にはキリウジガガンボ・トビムシモドキ・ハリガネムシ・ムギアブラムシ・ムギダニ・ムギハモグリバエ・ムギアカタマバエ・マダラズス・ベクガ・イネヨトウ・ヨツテンヨコバイ・ホソハリカメムシ・ヒメコガネ・サツマイモ畑にはテングスケバ・エビガラスズメ・ナカジロシタバ・イモコガ・ネコブセンチユウ・ネグサレセンチユウ・ハリガネムシ・ジャガイモ・ナス・トマト畑にはニジュウヤホシテントウ・オオニジユウヤホシテントウ・ジャガイモガ・ネグサレセンチユウ・ホオズキカメムシ・アブラムシ・ウラナミシジミ・ナスノミハムシ・カブラヤガ・ダイズ・アズキ・エンドウ・ソラマメ畑にはマメコガネ・ヒメコガネ・コフキゾウムシ・フタスジヒメハムシ・ヒメキバネサルハムシ・ダイズモグリバエ・ダイズカキタマバエ・ダイズキモグリバエ・マメハニミヨウ・キタバコガ・ウコンノメイガ・ツメタサガ・ダイズアブラムシ・ダイズシストセンチュウ・ダイズサヤタマバエ・ダイズシントムシ・マメヒメサヤムシガ・シロイチモンジマダラメイガ・マメドクガ・ヨトウガ・トビイロスズメ・ソラマメゾウムシ・エンドウゾウムシ・エンドウハモグリバエ・アズキマメゾウムシ・モンキチ

プラムシ・ニジュウヤホシテントムシ・ダイコン・葉畑にはハイマダラメイガ(ダイコンシンクタイムシ)・ヨトウガ・モンシロチョウ・アオムシ・カブライガ・ハブラハバチ・キスジノミハムシ・ダイコンサルハムシ・アブラムシ・ヤサイゾウムシ・ダイコンバエ・ネコブセンチユウ・タマナヤガ・ナノメイガ・ウリハムシモドキ・ナガメ・マメハニミヨウ・ゴボウ・ニンジン畑にはニンジンノメムシ・キアゲハ・ウリハムシモドキ・アカスジカメムシ・オオゴボウゾウムシ・ハスジゾウムシ・ホギ・タマネギ畑にはネギアザミウマ・ホギタマバエ・ネギハモグリバエなどである。

今まで述べたことはかなりおもむきがちがうが、畑については下ごえの使用と、回虫や十二指腸虫の感染の問題がある。カイチュウの寄生率は歐米では一〇%内外、アジア・アフリカ・南米では三〇~四〇%であるが、日本では都合で三〇~四〇%、農村では五〇~六〇%に達するといわれる。カイチュウは下ごえにまじっている卵が、野菜についたりほこりに混つて口の中に入り、十二指腸虫は下ごえにまじつていた卵からかえって、被鞘幼虫となり、野菜について口からいるか、または地表にあつて農作業の際などに手足の皮膚をつらぬいて体内に侵入する。

農作物だけではなく、一般に害虫を駆除するもっとも安易で効果的な方法として薬剤散布があげられる。耕作地においては生産者としての作物に、第一次消費者としての害虫が依存

して生活し、さらに第二次消費者としての天敵がいて自然の平衡が保たれているのであるが、薬剤を散布した場合一般に害虫だけが選択的に駆除されるわけではなく、同時に天敵も駆除することになり、それまでの平衡はまったく乱れてしまい、別の平衡をもとめての動きがでてくることになる。その結果、新しくうまれててくる平衡が、作物の収穫を考えたうえでのぞましいものであるかどうかが問題になってくる。たとえば水田においてBHC粉剤を使用した場合に、初期から中期にかけて重要な害虫をおさえている反面、中期から後期にかけて、ウンカ・ツマグロヨコバイが、いちじるしくふえ

山麓から山地にかかるあたりにある草原は、伐採がくりかえされるために低木状になった樹木のあいだにススキが侵入しているものや、草刈りがくりかえされてススキを主とする野原になっているところ、森林伐採後の切り跡地などであるが、草原は耕地とちがって人の手があまりくわわっていないので、植物の種類が変化に富んでいるから、そこに生活する動物、ことに昆虫の種類が多い。
ぐるむらという虫の声がおもいうかぶが、「一口に草むら」といつても、乾いているもの・湿ったもの・低いもの・高く茂ったものがあり、その群落をつくる植物の種類によっていろいろの環境が構成されていて、そこにすむものの種類もか

るのが目だっている。水田にはかなり多数のクモ類がいるが、これらは一日に数匹のウンカ・ヨコバイを捕食し、全体としてはウンカ・ヨコバイの増加をかなりふせいでいるといわれる。これが薬剤散布によって減少するために、ウンカ・ヨコバイがふえづけることになるのであって、今までによく考えないで薬剤が使用されていたように思われるが、自然の平衡がそのためどのように破られ、その結果どのように変ってゆくのかということは、じゅうぶん検討されなければならない。

さを感じせざる。「届させ、届させ」と鳴いて夜寒を教える
というのはこの虫の声である。ミツカドコオロギ、ハラオカ
メコオロギ・クビキリギスなども田畠や人家附近の草地にす
んでいるが、それより浅い草地・畑・芝生などにはシバズズ
がよくないでいるし、マダラズズもまじっている。ややしめ
た草地にいくとこれらが少なくなつて、クマコオロギ・ス
ズムシが多くなる。草地でも低木が散在するものにはタサヒ
バリ・カネタタキ・カンタン・キリギリス・カマキリ・ウマ
オイ・クツワムシ・セスジツユムシ・クサキリの鳴き声がき
かれ、ササ原にはマツムシ・ササキリが多い。カンタンは八
月初めごろから鳴き出しが、ル・ル・ル……と長く鳴き
続けるその声は鳴く虫のなかで最も美しく、幽玄であり、夢
見るような感じがする。カンタンという名は那郷の夢という
故事から連想されたものである。キリギリスは七月ごろから
鳴き出し、初秋まで聞かれるが、真昼にも鳴いていて、草い
きのする原などでその声を聞くと、けだるい感じがする。

クツワムシはその鳴き声が馬の響きをガチャガチャ鳴らす音に
似ているからであり、長く鳴き続ける声はきわめてやかまし
いが、鳴きはじめと終わりは調子が低くふぜいがあり、遠く
で二~三四鳴いている声を聞くと野趣を覚える。

野原のくきむらにはいろいろの種類の鳴く虫もいるが、鳴
かないものも多々さつとあげてみるだけでも、トノサマバッ
タ・クルマバッタ・クルマバッタモドキ・ショウリョウバッ

タ・オノブバッタ・カマキリ・オオカマキリ・ウスバカマキ
リ・ヒメカマキリ(直翅類)、アジアトンボ・クロイトンボ
・セスジイトンボ・オオイトンボ・オフネントンボ・ハ
グロトンボ・カワトンボ・コサナエ・ヤマサナエ・オナガナ
ナエ・ウチワヤンマ・ギンヤンマ・オオルリボシヤンマ・オ
ニヤンマ・オオヤマトンボ・コヤマトンボ・ハラビロトンボ
・シオヤトンボ・オオシオカラトンボ・ヨツボシトンボ・シ
ヨウジョウトンボ・ミヤマアカネ・マユタテアカネ・チョウ
トンボ・ウスバキトンボ・アキアカネ(トンボ類)、ホシアワ
フキ・ツマグロオオヨコバイ・オオヨコバイ・ヨモギシロテ
ンヨコバイ・カスリヨコバイ・ヒツメヨコバイ・タテスジ
ヨコバイ・テングスケベ・ヒシウンカ・マダラメタラガメ・
ホソハリカメムシ・アカスジカメムシ・ナガメ・ウズラカメ
ムシ(ヨコバイ・カメムシ類)、ヒメバンミヨウ・ヨツボシゴ
ミムシ・アオゴミムシ・キボシアオゴミムシ・ゴミムシ・セ
スジヒラタゴミムシ・アオオサムシ・クロシデムシ・エンマ
ムシ・ジョウカイボン・アオジヨウカイ・ヒメジヨウカイ・
ベニボタル・オバボタル・サビキヨリ・トラフコメツキ・ベ
ニコメツキ・アオハムシダマシ・アカハムシダマシ・クビナ
ガムシ・シラホシハナノミ・オスクロハナノミ・アカハネム
シ・スゲハムシ・アカクビナガハムシ・アカガネサルハムシ
・ハツカムシ・フジハムシ・イタドリハムシ・ジンガサハム
シ・カメノコハムシ・イチモンジカメノコハムシ・フタコブ

ルリハナカミキリ・カラカネハナカミキリ・セスジヒメハナ
カミキリ・ルリハナカミキリ・アカハナカミキリ・ニンフハ
ナカミキリ・マルガタハナカミキリ・ヨツスジハナカミキリ
・クロハナカミキリ・ヤツボシハナカミキリ・フタスジハナ
カミキリ・ホソハナカミキリ・キイロカミキリモドキ・ハス
ジカツオゾウムシ・コフキゾウムシ・センチコガネ・ダイコ
クコガネ・ゴボンダイコクロガネ・ツノコガネ・カドマルエ
ンマコガネ・オオフタホシマグソコガネ・ヒメアシナガコガ
ネ・アシナガコガネ・マメコガネ・クロハナムグリ・マルク
ビツチハシミヨウ(甲虫類)、セグロカブラハバチ・チャイロ
バチ・オオコシアカバチ・ハグロバチ・アゲハヒメバチ・ト
クリバチ・フタモンアシナガバチ・キスジジガバチ・キゴ
シジガバチ・コクロアナバチ・オオハキリバチ・トラマルハ
ナバチ・クロナガアリ・クロオオアリ・アカヤマアリ・ツノ
アカヤマアリ・クロヤマアリ・サムライアリ(ハチ・アリ
類)、ハナアブ・シマハナアブ・ツマグロハナアブ・アシブ
トハナアブ・ベッコウハナアブ・ヨスジメクラアブ・キイロ
アブ・ヤマトアブ・ウシアブ・キノシタシロアブ・アオコア
ブ・タイワンシロアブ・シロアブ・チャイロオオイシアブ・
アオメアブ・シオヤアブ・ヒメフンバエ・ベッコウバニ・ノ
サシバエ・ノイエバエ・ミドリキンバエ(アブ・ハエ類)など
がいる。

浅間山麓や佐久地方にはチヨウが多いが、日本アルプスの

島々谷にはガの類が多い。これは沼や湖があつたり草原があ
れば、チヨウの類が多くすみ、平地が少ないとガの類が多く
なるといわれている。草原にみられるチヨウとしては、山麓
地方でアオスジアゲハ・キアゲハ・アゲハ・カラスアゲハ
(アゲハ類)、モンシロチョウ・モンキチョウ(シロチョウ
類)、コツバメ・ゴイシシジミ・ベニシシジミ・ウラナミシジ
ミ・ツバメシジミ・ヤマトシジミ・シルビヤシジミ(シジミ
チヨウ類)、アザギマダラ(マダラチヨウ類)、ウラギンヒヨ
ウモン・オオウラギンヒヨウモン・ギンボシヒヨウモン・ツ
マグロヒヨウモン・コミスジ・オオミスジ・ヒメアカタハ
・ヒメタテハ・シータテハ(タテハチヨウ類)、ヒメウラナ
ミジナメ・ヒメジナメ(ジャノメチヨウ類)、ミヤマセセ
リ・キマダラセセリ・オオチャバネセセリ・チャバネセセリ
・コチャバネセセリ・イチモンジセセリ・ホシチャバネセセ
リ(セセリチヨウ類)、山地ではウスバシロチョウ・ヒメギフ
チヨウ・キアゲハ・ジャコウアゲハ・カラスアゲハ・ミヤマ
カラス(アゲハ類)、モンシロチョウ・ヒメシロチョウ・ツマ
キチョウ・スジボソヤマキチョウ・キチヨウ・モンキチョウ
(シロチョウ類)、コツバメ・ゴイシシジミ・ベニシシジミ・ウ
ラナミシジミ・ゴマシジミ・ヒメシジミ・ミヤマシジミ・ア
サシジミ(シジミチヨウ類)、アザギマダラ(マダラチヨウ
類)、コヒヨウモン・ヒヨウモン・ウラギンヒヨウモン

・ギンボシヒヨウモン・ツマグロヒヨウモン・コミスジ（ヒヨウモンチヨウ類）、セカハチヂヨウ・クジヤクチヨウ・キタチハ・シータテハ（タチハチヨウ類）、ヒメウラナミジナノメ・ジヤノメチヨウ・ヒメジャノメ（ジヤノメチヨウ類）、チャマダラセリ・ミヤマセリ・キバネセリ・ギンイチモンジセセリ・キマダラセリ・スジグロチャバネセリ・ヘリグロチャバネセセリ・ヒメキマダラセセリ・コキマダラセセリ・アカセセリ・コチャバネセセリ・オオチャバネセセリ・ミヤマチャバネセセリ・イチモンジセセリ・ホシチャバネセセリ（セセリチヨウ類）などである。ガの類はベニモントマダラ・ツメクサガ・キクギンウワバ・ヒメキシタヒトリ・モンシロモドキ・カノコガ・キハダカノコ・スキバホウジナク・クロスキバホウジヤク・ホシヒメホウジヤク・ヒメクロホウジヤク・ホシホウジヤク・クロホウジヤク・オオスカシバ・ホウジヤク・エビガラスズメ・ベニスズメ・シロヒトリ・シロシタヨトウ・シロスジトモエ・トラガ・ナシケンモノなどがおもなものである。

川や池・沼の動物

淡水の動物は海洋の動物にくらべて種類も少なく、一般に单调であつて形態や生態の変化にとぼしいとされているが、このあたりのように川は流れが早くて距離が短く、池や沼は灌漑用のものであつて、水生植物も繁殖することができない場合には、動物相も貧弱にならざるをえない。

「小川の動物」 水田の用水路などは渓流とは異なり、その水流もあまり激しくなく、水温もある程度高いために、ここには静水型の動物が多い。
 川の表面にはアメンボ・オオアメンボ・ミズスマシが走っている。水中にはコオイムシ・タガメ・ミズカマキリ・マツモ・ハヤタゲモ・ニオウイロハシリグモ・スジブトハシリグモ・ハナグモ・ハタケグモ・コタサグモ・コハナグモ・ワカバグモ・オオハエトリグモ・アリグモ・マエジロハエトリ・カバキコマチグモ・ヤハズフクログモ・チシマフクログモ・ハマキフクログモ・シボグモ・セスジアカムネグモ・ヨツボシアカムネグモ・ユウレイグモ・ナゴコガネグモ・トゲグモ・ゴミグモ・アシナガグモ・ヤサガタアシナガグモ（クモ類）、カナヘビ・トカゲ・ヤマカガシ・アオダイシヨウ（ヘビ・トカゲ類）、ホオアカ・ノビタキ・オオジシギ・ホオジロ・アオジ・ノジョ・ウグイス・モズ・チゴモズ・アカモズ・キジ・ヨタカ（鳥類）が個をあさることが多い。ノウサギ・ホンシユウトガリネズミ・ホンシユウヒミズ・コモグラ・カゲネズミ・ハタネズミ・イタチ・キツネ（哺乳類）などもみられる。

ソムシ・タイコウチ・コミズムシ・ゲンゴロウ・コツブゲン
ゴロウやシマハナアブ・ヒメニスリカ・セスジニスリカ・ヒ
メスリカ・ハマダラシギアブなどの幼虫(昆虫類)などが
みられる。ホウネンエグが背を下にして巧みに泳いでいるこ
ともある。ドジョウ・ホトケドジョウや時にはシマドジョウ
・イモリがチョロ／＼と泳いでいる。オオタニシ・マルタニ
シやモノアラガイ・カワニナ・ミスジカラニナ(貝類)は、
数個づつ集まって群をなしていることが多い。夏には夜は川
辺のくさむらのなかで、ゲンジボタルやハイケボタルが真珠
のように点々と光っているし、昼はアジアイトトンボ・クロ
イトトンボ・ハグロトンボ・カワトンボ・ホンサンエ・ヤマ
サンエ・オナガサンエなどが飛び廻っている。一年じゅう水
が流れいて、底が砂れきになっているところにはマジミ
がすんでいることがある。

(川の動物) 川にいる魚類、すなわち淡水魚は、海産魚の
ように多くの種類があるわけではない。川といつても一年を
通じて水の流れもあり変わらないのは荒砥川と和川・東神沢
川であるが、それでも冬にはかなり水は枯れてしまうし、
昭和二十二年九月十五日のカスリーン台風による流路の荒廃
とその後の治水工事などのために、魚のすむ環境としては好
ましいものではなくなつたので、かつて棲息していたもので
も、現在では見られなくなつたものもあるかと思う。さらに
これらの川はもとよりもっと小さい川では農業などの影響も

考えられる。以前には川底が泥地のところにドジョウ・ホト
ケドジョウ・ナマズ・ウナギなど、砂礫のところにはスナエ
ツメ・シマドジョウ・カマツカ・ヨシノボリ・ドシコ・カジ
カなど、淵になったようなところにはヤマメ・ウグイ・アブ
・ラハヤ・コイ・キンブナ・ギンブナ・ギバチ・モツゴなどが
すんでいた。イワナ・オイカワ・アユについては確認してい
ない。

一方、川底にすむ底生動物はなかなか豊富である。ことに
溪流の淵には種類も個体数も多い。底生動物は分類学的にみ
ると、だいたい扁形動物(ウズムシなど)・袋形動物(ハリガ
ネムシなど)・環形動物(ヒル・イトミミズなど)・軟体動物
(カワニナ・シジミなど)・節足動物(エビ・カニ・昆蟲など)
となり、あんがい多數の種類が見られるものであるが、その
主体となっているのは、なんといってもいわゆる水生昆虫で
ある。川にみられる水生昆虫には、カゲロウ類・カワゲラ類
・トビケラ類・トンボ類・ヘビトンボ類・甲虫類・カリアブ
・ヒヌスリス類などがおもなものであるが、その大多数は幼虫
だけが水にすみ、成虫になると陸上生活をするようになる。
このうちもつとも数が多いのはトビケラ類であって、ヤマナ
カナガレトビケラ・ヒデナガカワトビケラ・ムナグロナガレ
トビケラ・トワグナガレトビケラ・ヒロアタマナガレトビケ
ラ・イノブスマトビケラ・コガタシマトビケラ・ウルマ
シマトビケラ・コガタシマトビケラ・ニンギョウトビケラ・

コカクツツビケラ・エグリトビケラなどがみられる。これについてはカゲロウ類が多く、フタスジモンカゲロウ・モンカゲロウ・キイロカワカゲロウ・エルモンヒラタカゲロウ・オナガヒラタカゲロウ・シロタニガワカゲロウ・ヒメヒラタカゲロウ・オオフタオカゲロウ・ナミフタオカゲロウ・クロマダラカゲロウ・ナミトビヨロカゲロウ・シロハラコカゲロウなどがすんでいる。カワゲラ類はトビケラ類やカゲロウ類ほど種類も個体数も多くはないが、ノギカワゲラ・オナシカワゲラ・オナシカワゲラモドキ・アミメカワゲラ・カミムラカワゲラ・カワゲラ・ヤマトフタツメカワゲラ・モンカワゲラ・オオヤマカワゲラなどがみられる。これらのほかにゲンジボタル・ヘイケボタル・ヒラタドロムシ・ヒロバカゲロウ・ベビトンボ・トンボ類・ヤマトアミカ・シラキスカシアミカ・ガガンボ・アシマダラブユ・ヒメユシリカなどがいる。これらは山麓地方の流れの比較的ゆるやかなところよりも、水勢の強い溪流に多くすんでいる。

水面にみられるものにはシマアメンボ・オオアメンボ・アメンボやミズスマシなどがある。カジカガエルは山地の溪流において五月下旬ごろから夏いっぱい美しい声がきかれる。

このように川にはいろいろの小さな動物がみられるが、これを本来のすみかとする鳥はキセキレイ・セグロセキレイ・カワセミ・カワガラスなどで意外にすくない。しかし、山間部では森林・灌木林にすむオオルリ・ミソザザイ・ウグイスなどは沢筋に多くみられる。カワガラスはみずかきなどを全く知らないのに、たくみに激しい流れのなかを滑って、水底の昆虫などを捕食している。夏には山地にだけみられるが、冬にはかなり低いところまでおりてくる。確認できた最も低い地点は荒砥川の大胡町根古屋より少し上流である。獣ではカワウソもいた時代があつたにちがいないが、もちろん絶滅してしまった。イタチもいちじるしく減少したし、カワネズミも今

下の小さな卵五万個以上を産み、ゾエアおよびメガロバ期をブランクトンとして過した後に、やっとカニらしくなるのに対して、サワガニは直径三mm以上の卵を三〇~五〇個を産み、雌の腹に抱かれて幼生時代をすべて卵殻内ですませ、ふ化したときは親と同じ形の小ガニになつて出てくる。しかも、小ガニになってからも、しばらくは親の腹部の内側に収容されて、保護を受けている。日本にはカニの仲間は七〇〇種ほどあるというのに、純淡水産のものはサワガニだけである。

では全く姿をみない。ホタルやトンボの類の姿がみられることは小川の場合と同じである。

[池・沼の動物] 科学的には止水のうち、水深が大きくて大型植物（沈水植物）が水域の深部にはえていないものを湖といい、水域が浅くて中央部にまではえているものを沼といつて、挺水植物が中央部にまではえているものを沼沢といっている。このあたりでふつう沼といつてるのは比較的大きな溜池、つまり灌漑用貯水池のことであり、その小さなものが池とよばれているが、湖・沼・沼沢というわけ方とはちがつた概念である。

ところでこのような水域では、まず水面に浮んで活動しているアメンボ・コセアカアメンボ・ヒメアメンボ・オオアメンボやオオミズスマシ・ミススマシなどが目につく。水中をのぞくとゲンゴロウ・クロズマメゲンゴロウ・マメゲンゴロウ・ヒメゲンゴロウ・クロゲンゴロウ・シマゲンゴロウ・ミズカマキリ・コオイムシ・タガメ・タイコウチ・マツモムシ・コミズムシやスジエビ・テナガエビ・スマエビなど、モツゴ・ヨシノボリやコイ・フナなどが泳いでいる。山麓地方上部ではアブラハヤがみられることがある。水底にはニッカリ・トンボなどの幼虫やマルタニシ・カワニナ・ミスジカワニナ・モノアラガイ・ドブガイ・ヤマトシジミ・マシジミなどの貝類、ドジョウ・ウナギなどの魚がすんでいる。トンボの幼虫ではギンヤンマ類・イトトンボ類は浮葉植物や挺水植物

の間で生活し、サナエトンボの類は砂泥の中にもぐって生活しているが、多く見られるものはオオシオカラトンボ・シオカラトンボ・シヨウジョウトンボ・アキアカネ・ヨシシアキトボ・キイトトンボ・クロイトトンボ・オオイトトンボ・アオイトトンボ・ベニイトトンボ・オオヤマトンボ・ギンヤンマ・コサナエなどである。

池や沼の水が融けはじめること、水面に両手に一杯くらいの寒天状の塊が浮いているのは、アカガエルの卵である。これより少し遅れて、二月末から三月中旬にかけて、ヒキガエルが現われて、長い帯状の寒天質に包まれたたくさんの卵を水の浅い岸辺などに産みける。トノサマガエルやツチガエル・アマガエルは五六月に、ウシガエル（食用蛙）はさらにくれて六七月になつてから産卵する。

さらに水中には肉眼ではつきり見ることのできないミジンコやワーム等原生動物などプランクトンとよばれる微小な動物が無数に生活している。ことに原生動物のベン毛虫類が多く、時にはそのため水を赤や黄褐色に変えるほどである。

水のあるところには必ず生き物がいる。動物は倒や水を求めて水辺に集まつてくるが、とくに鳥は移動力が大きく、遊泳や潜水のたくみなものも多く、もっぱら水辺を生活場所にしているものもかなりあるが、このあたりには比較的少なく種鳥・夏鳥としてカワセミキセキレイ・セグロセキレイ・カツブリ・オオヨシキリ・ヒクイナ・コサギ・ゴイサギ・ト

ビなど、冬鳥としてハクセキレイなどがいるくらいである。時には夏にチュウサギが飛来したり、コアジサシのスマートな飛翔や、渡りの季節にガン・カモ類の群れが空高くをゆくのがみられることがある。

〔後記〕

“家のまわり、庭、屋敷林、森林、耕作地、草原、川や池沼”とにかく、それぞれのところにみられる生物について述べてみた。しかし、生物はきわめて限られた環境にだけ棲息・生育しているものもあれば、広くいろいろなところに適応しているものもある。編集責任者の意向は、動物目録とか植物目録というようなものでなく、読めるものとのことであったから、それぞの環境にみられるものを網羅して述べるのは煩雑でもあり、また、膨大な紙数を必要とするので、それぞれの環境のなかで“生きているものを観察する眼”を養うという意味で、観察に適した対象を選んで説明し、ファ

ウナあるいはフロラについては別の機会にゆずった。しかし、たとえば森林の動物としてはカタツムリやタマの類はあるまいが、「庭の動物」「耕作地の動物」などのところを参照するようにしていただけば、ある程度わかついたと思う。

科学技術の進歩とともに、自然の開発が大規模になること、気象の変動による異変が起きるかも知れないと指摘されている。日本の風土にも変化が起きつつあるようである。生物社会のバランスの崩壊は、人間にとつて危険な破局をまなくかもしれない。自然の保護と生活環境の保全とが、緊急の課題として注目されている。

まだまだ述べたいことや問題はたくさんあるが、自分たちを取り巻く環境の中から“ものを観察する眼”を養うきっかけとなるならば、これに過ぎる喜びはない。

宮城村の植物について述べる前書きとして、日本の自然植生域について説明する必要がある。動物には原生動物から哺乳類まで、きわめて多くの種類があるが、どの種類も食物として必要とする有機物を無機物からつくることはできない。また、生存環境としても植物は動物にかかせないもので

あるが、動物と植物との間に深いつながりがあるかぎり、植物も動物の存在によっていろいろの影響を受けるのは当然であって、動物の棲息地と植生との間には密接な関係があるのである。

植物集団（植物群落）の区分については、いろいろな研究

法や分類法がおこなわれているが、ブロン・ブロングの植物社会学的分類基準による植物群落分類法がもつともすぐれた分類とされているので、ここではそれに従うことにする。

○ヤブツバキクラス域（常緑広葉樹林帯） 高木は海岸ではスダジイ・タブノキなど、内陸ではシラカシ・アラカシなど、亞高木や低木ではヤブツバキ・シロダモ・アオキ・ヒサカキ・ヤツデなどの常緑広葉樹、林床ではチイカカラ・ヤブラン・シユンランなどやイタチシダなど、林縁ではクズ・ノブドウ・カナムグラなど、自然林が破壊されたあとに生育する二次林ではクヌギ・コナラ・イヌシデ・ネムノキ・ハンノキなどの夏緑広葉樹や、常緑針葉樹のアカマツ・クロマツなどを標徴種とするが、それらに混じってヒイラギ・モミ・カヤ・イスガヤなどが見られる。栽培種ではチヤノキがその代表である。

○ミズナラーブナクラス域（夏緑広葉樹林帯） ミズナラ・ブナ・カシワ・サワグルミ・トチノキ・クリハダカエデ・イタカエデ・シラカシ・シナノキ・アズキナシ・ナナカマド・オオカメノキ・ヤマハンノキなどの夏緑広葉樹（落葉樹）によって特徴づけられるが、ウラジロソミ・ツガなどの常緑針葉樹やアズマシタケナゲ・アセビ・ヤマグルマなど少數の常緑広葉樹も見られる。

○コケモモートウヒクラス域（針葉樹林帯） 亞高木は高木ではトウヒ・シラビツ・オオシラビツ・コメツガ・エゾマ

ツ・トドマツ・アカエゾマツなどの常緑針葉樹、林床ではジョンヨウイチヤクソウ・コイチヤクソウ・ゴゼンタチバナ・コミヤマカタバミ・コフタバランなどの草本とタチハイゴケ・セイタカスギゴケなどのセン類などを標徴種とするが、ソウシカンバ・ネコシデ・ウラジロナナカマド・オガラバナ・ミネカエデ・ミネザクラ・ヤハズバンノキ・ヒロハカラツラ・オオバヤナギなどの落葉樹やハクサンシャクナゲなどもわめて少數の常緑広葉樹も見られる。

○高山草原・ハイマツ群落域（高山帯） 高木や亞高木は見られず、ハイマツ・キバナシヤクナゲ・ウラシマツフジ・コケモモ・タカネナナカマドなどの耐飼性の低木とミヤマシオガマ・ミヤマアズマギク・ハクサンコザクラ・タカネスマレ・ミヤマキンバイ・タモマグサ・ミヤマハタザオ・タカネツメクサ・チシマアマナ・オノエスグ・ヒゲハリスグ・ミヤマコウボウ・ミヤマノガリヤスなどの草本を主要な標徴種とするが、ハイマツ群落の構成種は亞高山帶針葉樹林と共に通する種類であつて、コケモモーハイマツ群集域とし、亞高山針葉樹林帯と同一の上級単位に総合されるものとするのが適当であるとされている。

『勢多郡誌 赤城の植物』においては、武田久吉博士による植物帯の垂直分布の分類法に従つて説明したが、それによると丘陵帯はヤブツバキクラス域、低山帯はミズナラーブナクラス域、亞高山帯はコケモモートウヒクラス域、高山帯は高

山草原・ハイマツ群落域に相当する。

四つの自然植被域の移行点をはっきりした線をひいて示すことはできないが、標高種や生育状態の変化を認めるることはできるから、適当な部分に移行帶を設けることは必ずしも不可能なことではなく、垂直的には関東地方で標高六〇〇~七

〇〇m、一、五〇〇~一、六〇〇m、二、五〇〇m前後にあ
る」とされている。

官城村は赤城山の南斜面にあって、南端の大前田が標高約
一八〇m、三夜沢が五三〇m内外、最高地点の荒山が一、五
七二〇mであるから、三夜沢附近を境にしてそれより低いこ

□ 林
■ 草原
■ 水田

宮城村土地利用図



るがヤブツバキクラス域、それより高いところがミズナラ—

ブナクラス域によつてしめられていることになる。

三夜沢附近より低い地域の植物

宮城村においては赤城山の傾斜変遷点は標高六〇〇m附近にあるが、既存の集落や畠・桑園・水田などは四〇〇m内外を上限として存在し、畠や桑園は原形面に、水田は放射谷に分布している。

このあたりの自然林は長い間人に間のさまざまな影響を受けて破壊され変形されているので、眞の自然林を見ることは

自 然 林

日本のヤブツバキクラス域は、海岸ぞいのシイータブ林域とカシ林域に大きくわけられているから、このあたりはカシ林域にあたるが、カシ林を高木・亜高木・低木・下生えとにわけてみると、つぎのようなものとなろう。

高木、シラカシ・アラカシ・ツクバネガシ・ウラジロガシなどのカシ類を主体とした常緑広葉樹とモミ・ツガ・カヤ・イヌガヤなどの常緑針葉樹も混じることがある。

亜高木、ヤブツバキ・シロダモ・ヒイラギなどの常緑広葉樹にサワフタギ・ヤマザクラなどの夏緑広葉樹が見られる。低木、ヒサカキ・アオキ・イヌツゲ・ヤブコウジなどの常緑広葉樹とコウヤボウキ・ツルグミ・ヤマツツジなどの夏緑広葉樹も混じる。

下生え、シニンラン・ヤブラン・ジャノヒグ・キンラン・

できないが、自然林のなごりや自然林への回復途上へのものが、神社や寺の境内あるいは川や道ぞいのがけなどの人があり近寄らないところに見られるから、それによって人間の影響をまったくうけずに自然のままに生育する植物としての生命体の集まりである自然植生を推定すると、ヤブツバキクラスの自然林におおわれることになる。

トウゲシバ・キジムシロ・カンスゲ・エビネなどの草本やベニシダ・オオイタチシダ・イノデなどの常緑シダ類が生育する。

太平洋戦争の末ごろから戦後にかけてにわかつ開拓が進み、いまではほとんど廢を消してしまったが、かつては畠や桑園・水田が拓かれている間に、あちこちと飛地的に雜木や松・杉などの林が散在していた。松や杉などの林は緻密な管理がおこなわれるから、誰がみても天然状態と見誤るようなことはないが、あるいはタヌギやコナラなどの落葉樹を中心とする雜木林を、自然林だと思っていたものがいたかもしれない。しかし、それは自然林ではなく、このあたりは常緑広葉樹のカシ類を中心とした樹林におおわれていたはずである。このことについては植物学者の中でも疑問をもつていている人があ

るほどであるが、たとえば中国大陸の広大な黄河・揚子江流域をはじめ平野・丘陵部にもシラカシ・アラカシ・アカガシ・クスノキ・タブノ木などを主とする常緑のカシ林域がひろがつてゐるのであるが、約四、〇〇〇年前から農耕がおこな

雜木林

いまでは大分減つてしまつたが、このあたりの樹林は、特に植林されたものでないかぎりは、クヌギ・コナラを中心としてエゴノキ・ヤマザクラ・タリ・アカシデ・イヌシデなどの落葉樹（夏緑広葉樹）の混交林で、その間にアカマツやクロマツをともなつてゐることもある。

「秋の中ごろか冬の初、試みに中野あたり、或は渋谷、世田ヶ谷、又は小金井の奥の林を訪ぶて、暫く座して散歩の疲を休めて見よ。此等の物音、忽ち起り、忽ち止み、次第に近づき、次第に遠ざかり、頭上の木の葉風なきに落ちて微かな音をし、其も止んだ時、自然の静謐を感じ、永遠の呼吸身に迫るを覺ゆるであろう。武藏野の冬の夜更けて星斗闇干としたる時、星をも吹き落しそうな野分がすさまじく林をわたる音を、自分は屢々日記に書いた。風の音は人の思を遠くに語ふ。自分は此物凄い風の急ち近く忽ち遠きを聞いては、遠い昔からの武藏野の生活を思ひづけた事もある。」と国木田独歩は「武藏野」に野趣に富んだ雜木林を紹介しているが、農家では薪材や堆肥にする落葉や草を得るために雜木林をた

われてきたため、自然林は破壊されついに消滅してしまつて、人間による自然植生の破壊がいかにはげしいものであるかを物語つてゐる。

ておく必要があったのである。ことに火山の裾野は肥沃度の低い輕質土でおおわれてゐるので、冲積低地のような豊かな生产力をもつてしないのが普通であるから、防風林や日常生活に必要な燃料の供給源としてだけではなく、耕地を開発し經營するためには堆肥・草肥の材料を獲得しなければならなかつた。幕政時代には赤城山の斜面にまだ山林・原野が多く残っていたが、そこは山麓の農家が採草や林産物などの採取に利用する入会地（個人の所有者がなく、何ヶ村かが共同で利用する土地）であり、林場慣行（個人の所有地でない原野などから、牛馬の飼料や敷草をとるためのならわし）もおこなわれていたのである。

人間によつて伐採されたり、火入れがおこなわれたりして破壊された自然林のあとに、二次的に生育してくる林を二次林とよんでいるが、雜木林（これを構成する最も主要な樹種であるクヌギとコナラによつて、クヌギ—コナラ林とよばれるが、便宜的に雜木林をここでは使っておく）を構成してい主要な高木は前に述べたようなものであるが、そのほかに

エノキ・カシワ・ケヤキ・ヤマハンノキ・ハリギリネムノキ・スルヂ・ヤマウルシ・ミズキ・カキ（日本の山中に生えているものは野生であるか野生化したものか明らかでないが、このあたりではヤマガキとよばれている）・ハリエンジニ・ヤマグワ・リヨウブなどの落葉樹やシラナシなどの常緑のカシ類、モミ・イヌガヤ・サワラ・ヒノキ・スギなどの常緑針葉樹、マダケなどが見られる。しかし、一五~二五年に一回、薪炭材として伐採されるので、亞高木状態になつてゐる。亞高木・低木としてはサワフタギ・ムラサキシキブ・ガマズミ・ウツギ・シモツケ・サンショウウ・イスザンショウ・ナツグミ・ニシキギ・タラノキ・ハシバミ・ツルハシバミ・コアジサイ・マルバハギ・ヤマツヅジ・クサボケ・ヤマブキ・ノイバラ・エビガライチゴ・ニガイチゴ・コジキイチゴ・クサイチゴ・ナワシリオイチゴなどの落葉樹とシラカシ・ヤブツバキ・ヒイラギ・ヒサカキ・イヌツゲ・ヤブコウジなどの常緑樹がみられる。これらは比較的まばらにはえているから、林内は意外に明るいし、冬から春にかけては日光の直射にも恵まれるので、下生えは春のヤブタビラコ・センボンヤリ・キツネアザミ・タツナミソウ・キランソウ・コケリンドウ・フデリンドウ・アオイミミレ・タチツボスミレ・マルバスミレ・スミレ・アカネスミレ・ヒカゲスミレ・フモトスミレ・エイザンスミレ・キジムシロ・ミツバツチグリ・ムラサキケマン・イカリソウ・キバナイカリソウ・オキナグサ・ウ

マノアシガタ・ヒトリシズカ・フタリシズカ・キシラン・シユンラン・エビネ・スズメセリ・ウラシマソウ・オオマムシ・ダサ・マムシグサ・ヤブズグ・コカンスグ・ヒカゲスグ・ホソバヒカゲスグ・ヒメスグ・アオスグなど、夏のオオバナニガナ・コウゾリナ・ノアザミ・オトコヨモギ・チコグサ・ヨメナ・ホタルブクロ・ハエドクソウ・アキノタムラソウ・ウツボグサ・オカトラノオ・イチヤクソウ・オオチドメ・ウマノミツバ・ヤブジラミ・ヤブニンジン・オトギリソウ・ナクトウダイ・タカトウダイ・ゲンノショウコ・ススピトハギ・クサフジ・ワレモコウ・キンミズヒキ・チダケサシ・ヤマハタザオ・アキカラマツ・ミヤマカラマツ・フシグロセンノウ・フシグロ・カワラナデシコ・イノヨズチ・ヤナギノコズチ・イタドリ・ケイタドリ・アカソ・コアカソ・ドクダミ・トンボソウ・ツチアケビ・ギンラン・サバギンラン・ノハナショウブ・ヤブラン・ジャノヒゲ・チゴユリ・ナルコユリ・ヤマユリ・オオバギボウキ・カシワバハグマ・ハベヤマボクチ・アオカモジグサ・トボシガラ・チヂミザサ・ケヂヂミザサ・スキなど、秋のヤカシソウ・アキノノゲシ・ヤマニガナ・オケラ・コウヤボウキ・カシワバハグマ・ハベヤマボクチ・ニッコウアザミ・トネアザミ・ホソエノアザミ・モリアザミ・イヌヌモギ・リュウノウウギク・メナモミ・ヤブタバコ・サジガンクビソウ・コヤブタバコ・ミヤマヤブタバコ・ガントビソウ・ノツボロガントビソウ・アキノハコグサ・ノコ

ンギク・アキノキリンソウ・フジバカマ・ヒヨドリバナ・キヨウ・ツリガネニンジン・オミナエシ・オトコエシ・タチコゴメグサ・イスコウジユ・ナギナタコウジユ・センブリ・リンドウ・ノダケ・ウド・ミズヒキ・ハナタデ・ナガバヤブマオ・メヤブマオ・ヤブマオ・ホトトギス・アブラスキ・メカルガヤなどなかなかに見やかであり、早春から晩秋にかけて花の絶えることを知らない。これらのほかにアケビ・ミツバアケビ・フジ・ノブドウ・ヘクソカズラ・サルトリイバ・タ・クズ・エビヅル・スイカズラ・アカネ・ヤマノイモ・オニドコロ・キクバードコロ・タチドコロ・ツルウメモドキ・ヒヨドリジョウゴ・コバノカモモヅルなどの蔓性の低木あるいは草本やワラビ・ウゲシバ・スギナ・イススギナ・イヌドクサ・フユノハナワラビ・オオハナワラビ・ナツノハナワラビ・ヒロハナヤスリ・ゼン・マイイスシダ・オオバイノモトソウ・イワガネゼンマイ・イワガネソウ・タサソテツ・ジユウモンジシダ・イノデ・ヤブソテツ・ベニシダ・ハシゴシダ・イスワラビ・シシガシラなどの草本類やアズマネザサなどがあちこちに見られる。

また、帰化植物のヒメジョオン・ハルシオン・ヒメムカシヨモギ・アカツメクサ・シロツメクサ・キタイモ・コキタイモ・オオイヌノフグリなどがみられることがある。雑木林にこのように多くの植物が見られるのは、伐採時だけに人の手が加わるのではなく、伐採後一〇年ぐらいたでの

間は、二~三年おきに山そうじがおこなわれ、一〇年ぐらいたるも一年おきぐらいに下草刈りや落ち葉かきがおこなわれるのも要因の一つである。したがって、人手のはいる回数によって、林床の植物に変化が見られるが、下草刈りや落ち葉かきがありおこなわれない林では、アズマネザサが繁茂し草本は貧弱になる。

このように雑木林は一五~二五年ごとに伐採され、その後は切り株から芽が出て樹林が再生するという。崩芽更新によると高木と低木林經營のもので存続してきたのである。

それでも晩秋から早春にかけてすっかり枯れ葉をふるい落してしまったところ、新緑のころの雑木林の野趣に富んだ美しさは、特に優って見捨てられない風景であったが、太平洋戦争末期から終戦後に伐採され、開墾されて畠や田に変わってしまったところ、新緑のころの雑木林の野趣に富んだ美しさは、特に優って見捨てられない風景であったが、太平洋戦争末期から終戦後に伐採され、開墾されて畠や田に変わり、ほとんど見られなくなってしまった。平地に立てられる雑木林は前に述べたように、燃料の供給源や防風林としてよりも、耕地を經營するのに欠くことのできない堆肥・草肥料などの材料の採取が主な目的であったから、幕政時代においては幕府や諸藩はその保護育成につとめ、厳格な規則を定めて農民が擅伐し、ひいては耕地を荒廃させることを防いだのである。耕地と平地の雑木林との関係は、このように直接に緊密な関連を持つものであるが、山林にくらべて平地にある森林は重要性がなおざりにされ勝ちであって、太平洋戦争の末期から戦後にかけて、耕地の開発、食糧増産などのために

濫伐した傾向がいちじるしい。ひとたび森林を伐採・火入れ・土地造成などによって破壊すると、低木や下草をはじめシダやコケ類など、哺乳類・鳥類から昆蟲地中の小動物や無数のカビ・バクテリアの類まで、あらゆるものに影響をおよぼすがこれをくり返えしあうこと、ついには土塊が浸食されている。

植 裁 林

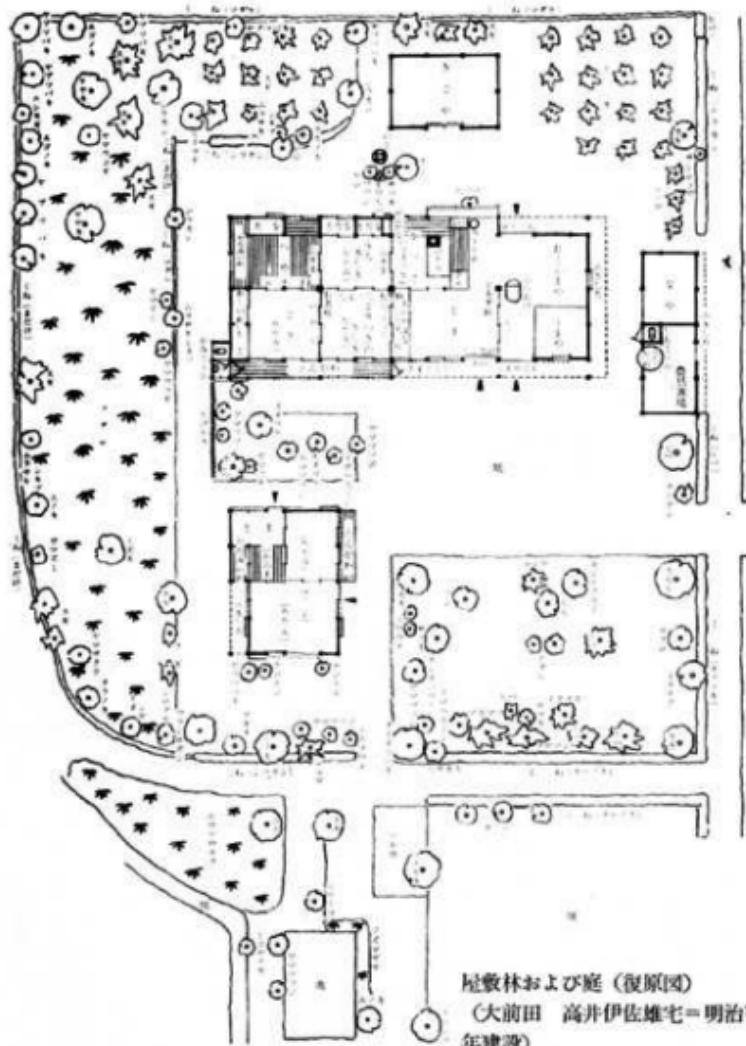
雜木林が薪炭材・堆肥や草肥の材料などの採取のために存続してきたのに対して、松（アカマツ・クロマツ）・杉（スギ）・檜（ヒノキ）などの植栽林は建築用材を切り出すために經營されるものであるが、松林がもっとも広い面積をもっている。

松林に植えられているのはアカマツとクロマツとにわかれ、このあたりでは標高の高い処にアカマツ、低いところにクロマツが比較的多い。松の樹冠はまばらで、林内に日光がじゅうぶんさし込むからヤマツツジ・コウヤボウキ・コアジサイ・ウツギ・コゴメウツギ・サルトリイバラ・モミジイチゴ・オカトランオ・ミツバアケビ・トンボソウ・ホタルブクロ・ミツバツグリ・アキノタムラソウ・ナキリスゲ・ヒカゲスグ・ワレモコウ・シユンラン・スキ・キンラン・ジャノヒゲ・ヤブコウジ・エビネ・フジ・クズ・シシカシラなど陽性の植物がみられるが、松葉は樹脂が多くバクテリアによっては分解されにくく、糸状菌によって分解されるため、土

たり流出したりして、森林を回復するのは困難になる。山林は河川の水を涵養し、旱害や洪水を防ぐが、これと同じように平地の森林は地下水の涵養や地下水位の安定の上に重要な役割りをはたしているのであることを認識する必要がある。

松・檜などの林は密度の高い樹冠に光をさえぎられて林床が暗いこと、酸性が強く厚い腐殖層のために、これにたえてはえている植物の種類は松林よりもさらに限られ、コケ類・地衣類・シダ類など、はなはだ地味なものがその大半をしきっている。

かつては小学校の前の方にも豊かなアカマツの林がひろがっていて、上毛電鉄の電車の中から校舎を見ることができなかつたほどであったし、裏山なども大きなアカマツ・クロマツがすくすくと枝をひろげていたが、太平洋戦争の末期に航空機燃料の松根油の採取や船舶などの用材確保のために切りはらわれ、さらに食料増産のために開墾されて畑などに変わってしまった。



屋敷林および庭（復原図）
(大前田 高井伊佐雄七=明治初年建設)

屋敷林

冬から春先にかけて「空ツ風」が吹く。この風は日によつて強くなったり弱くなったりするが、夜間は弱るのが常である。これはシベリア方面から日本海を吹き渡した風が、上越国境の山々にさきぎられて雪を降らせ、乾燥した冷たい風となつて山と山のすき間をぬつて吹き下るのであるが、千鳥の近くで低気圧が発達した時などは、大きな木の幹がゆれ、枝がゴウゴウと鳴るくらいとなる。「空ツ風」は空気がかわいているうえに風速が大きいから、気温はそれほど低くなくとも寒さを感じさせるし、烟の土をモウモウと巻き上げて張つてくるので、これに応じるために、家は藁屋根の北や西側の軒を低く葺きおろし、屋敷地内に樹林を仕立てている。この樹林に植えられている主な樹種は杉（スギ）・樅（シラカシ）・桜（ケヤキ）・竹（マダケ・モウソウチク）等で、そのほかにヒノキ・サワラ等が混じることもあり、厚い屋敷林をなして「せどの木山」とよばれているが、ヤブツバキ・エノキ・コナラ・クヌギ・クリ・イスシデ・アカシデ・カシワ・ヤマザクラ・ネムノキ・イスザンショウ・サンジヨウ・ヒサカキ・ハリギリ・ミズキ・サリフタギ・ムラサキシキブ・ガマズミ・ニシキギ・アズマザナ・ヤマツフジ・ヤマウコギ・シロダモ等がみられ、その下生えにはドクダミ・ヤヘビイチゴ・ミズヒキ・キンミズヒキ・ヤブタバコ・チヂ

ミザサ・ジヤノヒゲ・シユンラン・エビネ・ヤブラン・ナルコユリ・チゴユリ・ヤブカソウ・ウラシマソウ・マムシグサ・ヤブジラミ・ススピトハギ・アカソ・ヤブマオ・エドクソウ・ヤエムグラ・ツチアケビ・ヤブコウジ・ヒカゲスゲ・ハシゴシダ等があり、フジ・ツルウメモドキ・エビヅル・ノブドウ・ヘタソカズラ・スイカズラ・トコロ・ヤマノイモ・カラスウリ等の蔓が樹木に絡みつき、時には樹上にヤドリギの姿がチラホラする。これらのなかにはこのあたりの潜在自然植生の代表的な構成種が多くふくまれている。

このような屋敷が集まつてると、木が成長し繁つてくるにつれて、「こさ（日蔭）」になる家ができるため、屋敷の間隔はなるべくあけてあった。

ところでこの屋敷林は、普通、防風林であると説明されているが、単なる防風のほかに防塵・防火・防雷等の効果をも備え、さらに気温調節の目的をもつていて、むしろ気象調節林とよぶべきである。江戸時代に武藏野の老農が書いた『百姓伝記』には「屋敷まわりの西北に植え込みをすると、風を防ぐたまりとなり、冬は暖くなる。屋敷の東南に木を植えてはならない。日かけが多くなり、住むのに寒いばかりでなく、日のあたらないのは金がかってよくない」と書かれている。さらにスギ・ケヤキ・シラカシ等は「こさ伐り」の

小枝は燃料になり、秋に落ちる枯葉は燃料と肥料となり、建て前^{（たてまへ）}をするときには用材を切り出すこともでき、タケは養蚕のカゴ等の材料や竹の子を採取したから用益林でもあるが、スギ・ケヤキ・シラカシの場合には、家の古さのシンボルとして、その威容を誇示するところの保存林でもある。し

耕作地の植物

かつてスイスの植物学者チュベリが「日本のように田畠に雑草のない国はない。いかに眼のするどい植物学者でも、そこによけいな草を見つ見することはできないほどである」といつてひどく感心している。実際にはそれほどもなかつたろうが、今ではいろいろの薬剤を散布するなどして、そもそもどう雑草にじめられているようである。

雑草^{（ざく）}というのは、人間にとって必要な特定の作物がよりよく育つように常に手入れをおこなっている田や畠に、侵入し、適応し、半自然的に生育している人間が目的にする以外の植物のことであるが、耕作地でも畠と水田、水田でも秋に水を落す乾田と冬から春にかけてもずっと水がたまっている湿田ではいろいろちがいがみられる。

〔畠の雑草〕 畠でも麦畠・野菜畠・桑畠等によって雑草のはえ方には相違があるが、春にはホトケノザ・ノミノフスマ・ナズナ・ハコベ・ミミナグサ・スズメノテツボウ・ナギナタコウジユ・ヘルシオン・ヒメジヨン・ヒメムカシヨモギ

かし、最近では屋敷林を切り払う傾向があり、機能も防風を主として、カシを植えならべ目隠しを兼ねた大きな刈り込みの生垣^{（せいげん）}（櫛ぐね）や石やブロック材の垣をめぐらす家もみられるようになっている。

・ジシバリ・オニタビラコ・ヤエムグム・オオイヌノフグリ・コナスピ・ザクロソウ・イヌガラシ・ノミノツヅリなど、夏から秋にはハコベ・ノミノフスマ・エノコログサ・アキノエノコログサ・カヤツリグサ・コゴメガヤウリ・ユクサ・イヌタデ・メヒシバ・カラスピシヤク・ヒルガオ・コヒルガオ・スペリヒニ・イスビニ・アオビユ・ムラサキカタバミ・ナズナ・イスビニ・エノキグサ・タワクサ・シロザ・オオニシキソウ・ニシキソウ・コニシキソウ・ヒメミカンソウ・コミカンソウ・コメナモミ・メナモミなど、冬でもハコベ・ノミノフスマ・ホトケノザ・ミミナグサ・タチイヌノフグリ・ヒメジヨンなどが見られる。

〔水田の雑草〕 水田は畠とちがって田植えの時期を境にし、まったくことなった種類の雑草がみられるが、乾田と湿田によって種類や生育の様相は変わってくる。

乾田では春にはスズメノテツボウ・ノミノフスマ・トキワハゼ・スカシタゴボウ・ムツオレグサ・キウネノボタン・ケ

キツネノボタン・ミズハコベ・ムラサキサギゴケ・ゲンゲ・アカツメクサ・シロツメクサ・キツネアザミ・ハコグサ・ツメクサ・コオニタビラコ・タネツケバナ・タガラシ・セリ・サンエタデなど、夏から秋にはイスビエ・キカシグサ・アブノメ・コナギ・ミゾハコベ・ウリカワ・アゼナ・アオウキ・クサ・サンショウモ・タマガヤツリ・ミズガヤツリ・ホタルイ・ヒデリコ・ヨウジタデ・ヒルムシロ・タウコギなど、冬にはスズメノテッポウ・ゲンゲ・タガラシ・タキツケバナ・ノミノフスマなどがみられ、湿田では休閑期にはスズメノテツボウ・ゲンゲ・タネツケバナ・タガラシ・セリ・キツネノボタンなどがみられるが、ずっと水がたまっている湿田ではタガラシ・ムツオレグサ・セリなどが、まばらにイネの古株の間にみられるくらいである。

田のあぜやくろには、普通の道とくらべて土の中の水分がきわめて多いので、ふつうの路傍に見られる草とは種類や生育状態がことなる場合が多いが、毎年ぬりかえるくろにはハコグサ・ゲンゲ・スズメノテッポウ・トキハゼ・サギゴケ・キツネノボタン・アゼナ・アブノメ・クサイ・ヒデリコ・タマガヤツリ・イヌガラシ・ミゾハコベなど一年生のもの、あぜの斜面または上のあまり土を動かさない部分にはヨメナ・スギナ・カラスマダガ・カラスノエンドウ・スズメノエンドウ・ヒメジョオン・ハルジオン・アレンチノギク・タチイヌノブグリ・オオイヌノフグリ・カゼクサ・チカラシバ・ギヨ

ウギシバ・ススキ・エノコログサ・カモジグサ・チガヤ・ヨモギ・アカツメクサ・シロツメクサ・コケオトギリ・ヨメナ・ノコングギク・リュウノウギク・ノアザミ・タンボボ・ノハラアザミ・トネアザミ・ヒガンバナ・ヤブカンゾウ・ノカソウ・イヌタデ・ノミノフスマ・ツユクサ・ノビル・スイバ・ギシギシ・ワレモコウ・オミナエシ・イタドリ・オオバコなど多年生のものが多くみられる。

ところで、雑草は地方によつては「畠にチシバリ」、田にヒルモなどといつて恐れられるほどであり、農家の努力の大半は草取りについやされるということができよう。雑草をとりのぞくにはいろいろな方法があるが、大きくわけて耕作の休閑・作付変更・輪作などによる方法と除草中耕などや薬剤散布による方法となる。このうち、最近では二四一D・PCP・CAT・CMUなど、いろいろな除草剤をもちいる、いわば化学的除草法がさかんになつてゐる。植物社会学的にみた場合、農耕地には作物のほかに雑草が生育するのが自然であり、ドイツのラドマッフルの七年間にわたる研究によつて、ある程度の雑草群落が存続しても、農作物の持続的な生産量を維持するには、大きな障害にならないことが明らかにされた。即効的な化学生物除草剤の使用は、生物社会のバランスをやぶり、かえつて立地の生産力を低下させる危険性も予想されるから、その使用については特に慎重に検討されなければならない。

路傍の植物

道路の中央は裸地になつてゐるが、これにそつて帶状にオバニ・オヒシバ・ミチヤナギ・スズメノカタビラ・ニワホコリ・チカラシバ・コニシキソウ・アカツメクサ・シロツメクサなどが生育している。そして道路の両はしに近づくほど人や車にふまれる回数が少なくなるため、ヨモギ・ハルジオン・ヒメジオン・オオアレチノギク・ヒメムカシヨモギ・カ

川や池・沼の植物

水はどんな生物にとっても欠くことのできないものであるが、過度に水があつてもふつうの生物にとっては、生活をつづけるのは困難となる。これは植物の場合も同であるが、川とか池・沼のようにじゅうぶんに水があるところには、山や野原の植物とはかなりちがつて、水が多くありすぎても生活をつづけていける植物が見られる。

〔川原の植物〕 宮城村において川原を形成しているのは荒砥川と柏川の二つであるが、まだこのあたりでは水の流れは速く、増水したときには大きな破壊力が働くから、中洲や川原は形成されてもきわめてせまく、ほとんど石ころばかりでできている。したがつて河床の植生はきわめて貧弱であつて、オコヤナギ・イヌコリヤナギ・タチヤナギ・ナガバカラヤナギなどの低木やギシギシ・スイバ・イタドリ・ミゾソバ

・モジグサ・チガヤ・エノコログサ・クサイ・オオイスノフグリ・カスマグサ・カラスノエンドウ・スズメノエンドウ・カラツリグサ・ギヨウギシバ・タンボボ・チドメクサ・ノチドメ・ヘビイチゴ・ノハラアザミ・トネアザミ・ノアザミ・ヨメナ・ノコノギクなどのだけの高くなるものが多くみられる。

〔池・沼の植物〕 池沼といつても天然のものではなく、水田灌漑用の貯水池があるだけである。^註 貯水池は水位がいちじるしく上下するだけなく、植物の生育期である夏期に

その変化が生ずる。そして以前は水底であったところも岸辺になるというようなことがくりかえされるから、オナモミ・ギヨウギシバ・キツネノボタン・ショウブ・ミゾソバ・タカラシ・ミズカクシ・セリ・ヘリイ・クロテンツキ・ミクリ・ヨシなど湿生植物を主体とし、オヒルムシロ・フトヒルムシロ・ヒルムシロ・ヒロハノエビソ・エビソ・タスモ・サンショウモなど浮葉あるいは沈水植物がみられる。

〔湿地の植物〕 火山の斜面は厚いローム層でおおわれ、その下層には火山礫層が堆積しているので、水はよくしみとおってゆくから、地下水位が低くて低湿地に乏しいだけでな

く、そのようなところは水田として利用されることが多い。したがって低湿地の植物といつても、既存林落の上層に近いあたりにある湧泉の附近にきわめてわずかな範囲にハンノキ・クヌギを中心とした湿性林が見られるにすぎない。ここにはコムラサキ・イスコリヤナギ・ネコヤナギ・ノイバラなどの低木とアシ・タニソバ・エンコウソウ・カサスグなど他の場所ではみられない草本がみられるが、なに分にも湿性林としては小規模なものでとり立てていうほどのものはない。これよりもやや乾いたところではクリンソウ・サクラソウの生育していることがある。

夏緑広葉樹といふのは、春五、六月ごろに新緑の若葉をつけ、夏は濃い緑の葉でおわれ、秋には赤や黄に紅葉し、冬には落葉する樹木のことであるが、夏緑広葉樹林帶はミズナチーブナク拉斯域は垂直的にみると、下限は常緑広葉樹林帶の上限に、上限は亜高山性針葉樹林帶の下限に接している。

宮城村においては、常緑広葉樹林帶と夏緑広葉樹林帶の移行地点はほぼ谷の出口と一致しているが、亜高山性針葉樹林帶は存在しない。

日本におけるブナの分布域は、北は北海道渡島半島の黒松内低地部から、南は九州大隅半島の高隈山の山頂部まで、北海道・本州・四国・九州と広範囲にわたっていて、夏緑広葉樹林帶の植生は、近代まで自然に近い状態で存続してきたので

あるが、赤城山の南斜面においては、かなり昔から有用材・薪炭材などの採取や、マツを中心とした有用材採取のための植

自 然 林

このあたりの自然林あるいはこれに近い状態の樹林は、高木・亜高木としてはミズナラ・カシワ・クリ・アワブキ・ヤマモミジ・ハウチワカエデ・ヨハウチワカエデ・イタヤカエデ・オオイタヤメイゲツ・ハリギリ・シナノキ・アズキナシ・ホオノキ・コバノトネリコ・シラカバ・トチノキ・ブナ・ヤシヤブシ・ナツブバキ・リコウブ・コシアブラ・クマシデ・アカシデ・アブラチャン・ミズキ・ヤマザクラ・ヤマハシ・ノキ・オオバボダイジユなどの落葉樹に混じってウラジロモミ・コメツガなどの針葉樹も見られ、低木としてはオオカメノキ・ヤマウルシ・サワフタギ・クロモジ・コマユミ・ハナイカダ・ノリウツギ・タニウツギ・ナナカマド・サビバナナ・カマド・ヤマツツジ・トウゴクミツバツツジ・ウラジロヨウラク・アカヤシオ・シロヤシロ・ベニドウダン・ニシキウヅキ・タマアジサイ・コアジサイ・タマイチゴ・シヤクナゲ・シモツケ・ニフトコ・ヘシバミなど、林床はミヤコザサにおわれているところもあるが、チダケサシ・トリアイシヨウマ・コウモリソウ・モミジガサ・ヤグルマソウ・バイケイソウ・ノギラン・ツバメオモト・ツリネソウ・キツリフネ・カベヒキオコシ・ミヤマイラクサ・イタドリ・マルバダケブ

林がおこなわれているから、現状は変形したものとなつてゐる。

キ・ヤマヨモギ・ヨツバヒヨドリ・ノコギリソウ・ヤマトリカブト・ヤマブキシヨウマ・アカシヨウマ・ツルリンドウ・モミジハグマ・カノワバハグマ・キツコウハグマ・イチヤクソウ・ツリガネニンジン・オトコモギ・シオガマギク・フシグロセンノウ・イカリソウ・シシウド・オタカラコウ・ユキザサ・アオヤギソウ・ヤマシナクヤク・サラシナシヨウマ・ヤマホウコ・カワラマツバ・シユロソウ・ホタルブクロ・ソバナ・ウツボグサ・アキノタムラソウ・ナツノタムラソウ・キンラン・ササバギンラン・ワレモコウ・アキノキリンソウ・アキカラマツ・ヤマジノホトトギス・チゴユリ・ナルコユリ・ルイヨウボタン・ヤマリリソウ・センボンヤリ・エビネ・トウヒレン・ガンクビソウ・サワアザミ・クルマアザミ・トネアザミ・リンドウ・オミナエシ・キンミズヒキ・ヒトリシズカ・ヒロハノテンナンシヨウ・キジムシロ・ヤブレガサ・アケボノスミレ・エイザンスミレ・ヤブケマン・オカトラノオなどの草本やジュウモンジシダ・オシダ・ベニシダ・ヘビノネゴザ・ゼンマイ・オニゼンマイ・ヤマドリゼンマイ・シシガシラなどの羊齒類がみられる。このあたりの岩壁はノリウツギ・コメツツジ・ヒメシヤガ・イワタバコ・ダイ

モジソウ・ヒメシャガ・イワチドリ・ミヅデウラボシ・ミヤマノキシノブ・ヒメノキシノブなどがあるが、ときにはク

モノスシダがみられることがある。

植栽林

このあたりに植栽されているのはアカマツ・クロマツ・スギ・カラマツなどが主なものである。松の場合、樹冠はまばらなものであるが、かなり密植されることが多いことや厚い粗

草原

赤城山に見られる草原は森林を伐採したあとでできたいわば人為草原と、主として強風のために森林の発達がさまたげられてきた風衝草原がある。人為草原は櫛石附近に、風衝草原は鍋割山の頂上一帯にひろがっている。

櫛石附近から荒山に向かってかなり広く草原がみられるが、これは草刈り場・森林伐採跡にできたもので、低木なども散在しているが、スキ・アキノキリ・ソウ・イタドリ・ヒヨドリバナ・マツムシソウ・ツリガネニンジン・トダイバ・ワレモコウ・オカトラノオ・キキョウ・オミナエシ・リンゴ・マルハギ・カワラナデシコ・オトコヨモギ・ミヅバ・ツチグリ・ウメバチソウ・キジムシロ・センボンヤリ・コオニユリ・ニウスゲなどがみられる。このあたりは植林をおこなわない限り他のところにみられるような夏緑広葉樹林におわれるはずである。

鍋割山は赤城火山を構成するもののうち、もっとも西側に

育植層のために林床の植物はわりあいに少ない。杉などの場合は樹冠の密度が高いのと厚い育植層のためにやはり林床に見られる種類数は多くない。

かたよってあるためか、冬の季節風が強く吹きこす山頂部は、一面にミヤコザサにおおわれ、レンゲツツジ・シモツケ・マルバメギ・ニシキウツギなどの低木やワレモコウ・ツリガネニンジン・リンドウ・ホソバトリカブトなどの草本がごくわずかに散在しているだけにすぎない。

前段落の東南にある草原は、どうしてできたものか明らかでないが、マツムシソウ・ヤマホウコ・ヤハズウスユキ・ウスニキソウ・ノギラン・ネバリノギラン・オカトラノオ・ヤマリンドウ・カワラマツバ・アズマギク・ノハナシヨウブ・ミズギボウシ・ワレモコウ・シロバナニガナ・ウメバチソウ・ソバナ・ツリガネニンジン・ヤマオダマキ・ナツノタムラソウ・アキノタムラソウ・レイジンソウ・アキノキリンソウ・チダケサシ・コウリンカ・シシウド・アブラガヤ・スキ・アオヤギソウ・シユロソウ・ウツボグサ・コオニユリ・シミズヒキ・タガイソウ・コメガヤ・サラシナショウマ・ジ

ユズスゲ・オタカラコウ・ニッコウキスゲ・ハイケイソウ・ヨツバヒヨドリ・ノコギリソウ・イタドリなどがみられるなかに・ヤマハンノキ・ズミ・シモツケ・ミヤマヤナギ・タマ

ヤナギ・キツネヤナギ・メギ・コゴメウツギ・ニシキウツギ・ニガイチゴ・レンゲツツジなどが散在している。

第五節 宮城村となる

江戸時代には領主の変遷もあったが宮城村地区の各村(現大字)の幕末における石高と領主は次の通りであった。

苗ヶ島村 堀田 振津守 九八九石

馬場村 稲葉 美濃守 三九五

大前田村 小笠原 豊後守 六四二

鼻毛石村 小笠原 豊後守 六五九

柏倉村 稲葉 美濃守 六四二

三夜沢村 神領 五〇

市ノ関村 松平 大和守 四四〇

堀田氏は佐野藩(現栃木県)主で一万六千石、稲葉氏は淀藩(京都府)主で十万二千石であった。小笠原氏は幕府代官であり、松平大和守は前橋藩主であった。明治五年六月に大小区制となり次のような区分となつた。

第一大区	勢多郡	一ヶ町	三十九村	第二小区	女潟村	深津村	教屋村	込替戸村	月田村
第一小区	市ノ関	柏倉村	苗ヶ島村	第三小区	大胡町	河原浜	種越村	上大屋村	茂木村
村	馬場村	室沢村		堀越村	横沢村	滝久保村			

第六大区 戸長は小池文七郎であった。

明治十二年一月には南勢多郡役所が置かれて大小区制は廃止され、鼻毛石村外七カ村聯合ができる聯合戸長に小池文

七郎がなつた。

明治十三年にはこの分離があつた。資料を示す（群馬県議会図書室蔵「名称区域」より）

甲第三百二十七号

南勢多郡

蓋印

馬場村

苗ヶ鳥村

室沢村

右三ヶ村是迄鼻ヶ石村外七ヶ

村聯合ニ候處分離更ニ三ヶ村

聯合額別紙差出候ニ付此段進

達候也

明治十三年六月三十日

南勢多郡長 山形和平園

樹取群馬県令殿

分離額

南勢多郡

馬場村

苗ヶ鳥村

室沢村

今般甲第六拾六七兩号御達ニ

付右村三ヶ村者是迄鼻毛石村
江聯合故居候所里程遠カラス

ト堺中間ニ山林川流等有之若シ雲雨出水等之節ハ戸長役場江
出頭ニモ不圖延其不便不少勝ルニ前三ヶ村者其地形自折立
合維持仕度就而者三ヶ村地景中央ニ付馬場村江戸長役場ヲ設
置仕御用筋差文無之様可仕協議決定仕候ニ付御聞届ケ被成下
度此段奉願候也

明治十三年

六月廿八日

苗ヶ鳥村

東宮 保佐治^一

北爪 初太郎^一

平田 久^一

七^一

六木木 善^一

八^一

六木木 甚五郎^一

利^一

以下八七名

馬場村

井上 菊治郎^一

長岡 弥三郎^一

清吉^一

堤要造^一

吉^一

以下四五名



赤城山遠望(鼻毛石より)

室沢村

石田 六平^⑩石川 丑五郎^⑩新井 勝五郎^⑩青木 与惣作^⑩青木 榎治郎^⑩

以下四一名

用 係

前原 久 弥^⑩六本木 善 三^⑩小池 文七郎^⑩

戸 長

相取群馬県令殿

合

⑩(相取)

常務係^⑩十三年七月二日調 御用掛水野忠愛^⑩

南勢多郡

馬場村

南勢多郡鼻毛石村外七ヶ村は迄聯合之処今般馬場村苗ヶ島村
室沢村ノ三ヶ村ト聯合致度旨出願依テ馬ト審案之処不都合之
慶無之ニ付右案之通御指令相成可然哉此段相伺候也

(刻印) 書面願之趣聞勘候事

明治十三年七月二日 長官

鼻毛石村分四ヶ村聯合戸長 小池 文七郎

馬場村外二ヶ村連合戸長 前原 久 弥

南勢多郡鼻毛石村

小前總代兼伍長

右者今般鼻毛石村外七ヶ村戸長役場分離右三ヶ村聯合戸長役
場設置度旨申出各村故障有無取札ニ付一同協議仕候所差障
等一切無之候依テ証連印仕一札差出申候凡相違無御座候以上

明治十三年六月三十日

同 関都三夜沢村

同 奈良原 睦 麟^⑩同 阿久沢 基七郎^⑩

同都大前田村

阿久沢 長四郎^⑩同 前原 芳 雄^⑩

の二つになったのである。明治十七年八月には馬場村聯合は月田村を加えて四カ村聯合になった。戸長は鼻毛石村はかは小池文七郎、田島義方、馬場村ほかは前原久弥、東宮六郎治であった。

明治二十一年四月には市町村制が発布になった。その合併問題で各村の連合が改めて問われることになった。一つの試案が郡役所で記録されている。宮城村の聯合村のあり方からこの案も意味のあるものだった。

鼻毛石村	七二	一 現今聯合ノ長ナリ	苗ヶ島村	九四	一 東宮ノ下村	三二〇	一 東宮ノ下村スルハ
市ノ関村	五六	一 西宮ノ下村	室沢村	五四	一 東宮ノ下村	三二〇	一 東宮ノ下村スルハ
大前田村	一一五	一 西宮ノ下村	室沢村	五四	一 東宮ノ下村	三二〇	一 東宮ノ下村スルハ
三夜沢村	二四	一 赤城神社ノ西南ニ	月田村	一二一	一 赤城神社ノ西南ニ	月田村	一二一
柏倉村	一一二	ニアルヲ以テナリ	群馬県令第十九号		ニアルヲ以テナリ	群馬県令第十九号	

馬場村 五一

一 現今聯合ノ長ナリ

大前田村

以上合併シテ宮城村ト称ス

かくして宮城村が誕生した。時の県知事中村元雄、南勢多郡長三木泰象、宮城村長東宮六郎治であった。

第六節 地名

小字名を明治十四年の『地理雑件』(小字名調書)により示す。(群馬県議会図書室蔵)

○ 鼻毛石村	南前(古屋敷)、前原、高山、梅皆戸、兜石、中山、
元皆戸(神田)、竹内(実皆戸)、庄司皆戸、鼻石(鳥皆戸)、吉里、池尻(向原)、本郷(中田、中屋敷)、吉田、	長又、六町、鳴山、蛇柳、諏訪、長谷地、島、天神、
嫌田、南皆戸、四塚、中皆戸、一本木、大日、伊勢山	

見取、山田、赤坂、六官、弥源司、大谷地、東半木、西半木、菅広

○ 柏倉村

鎌田、前川原、六万部、房田、安久保、近戸、乙大沢
 (近戸)、新屋敷、甲大沢、奥懸、堀之内(西屋舗)、丸
 山、中原、箱田(境川)、西房(寄居)、不動坂、新屋
 敷、甲新井堰、石田、向田、乙大前、甲大前、乙譲
 訪、甲諏訪(諏訪峯)、庚塙、甲二本木、乙二本木、甲
 洞、免木、乙横山、甲横山、勢多ヶ橋、平皆戸、島崎
 殿皆戸、北皆戸、峯(峯久保)、井戸尻、新井、東田
 乙深山沢、甲深山沢、大久保、乙大駒、甲大駒、丙大
 脇、下石倉、芳見沢、次郎丸、西堀久保、東堀久保、
 中堀久保、落合、中石倉、上石倉、小麦沢、甲下沢
 乙下沢、甲赤石、乙赤石、乙洞々免木、乙新井堰

○ 市之岡村

梅木、十二、高田、上皆戸(嵩)、中皆戸(西原)、下皆
 戸、西原(前山)、住吉、関口(内出)、前田(吉沢)、前
 屋舗)、吉沢、吉ヶ沢、石田、下石田、尾引、堤久保、

下白草、上白草

○ 三夜沢村

西側(嵩)、大嵩、窟、東側、北空池、南空池、神戸
 下小林、下田中(マイハラ、ムツフサ)、西原(正円塙)
 西川、上西川(クボガイト)、石合(アラヤシキ、ダン
 ガイト)、小林(ゴンガイト)、井ノ上(タイガイト)、タ
 ンゾフガイト)、八丁(カンガイト)、ホリマタギ、タケ
 ノハナ、カナバタケ)、田中(ヤセンドウ、ミナクチガ
 イト)、一丁田(大石)、ツバキハラ、杉ノ下(カノイヅ
 カ、ミヤノマイ、ワタド)、大塙、原(ウベイシ、シユ
 ウサンヅカ、サルガイト、ヒラガマイシ)、白山(ハチ
 マン、ヲチアイ、ナカゴ、大石)、山王、片並木、山
 田(イケノウチ、ツルマキ、アクサワ)、梶谷、大通龍
 一ノ渡戸、三本木、湯ノ沢

○ 馬場村

小太郎、西小太郎、新山、北替戸、中平敷、西浦、山
 ノ神、竹ノ花、穴烟(三日堂)、古平敷、東畠、前田、

○ 南替戸、川折、東前原(庚申塚)、西前原、東矢次、八
 丁牧、西替戸、西矢次、南針間、北針間、向針間、西
 山、西原、北原、大矢地
 ○ 大前田村
 二橋、鎌田、堤下、高橋、新地、窪戸、新林、吹上、
 矢次、一丁田、半木、相窪(下内)、中屋敷、

源太皆戸、世良田、稻荷木、下鎌田、久平田、鶴巻
 (内方)、一本堂、鍛冶皆戸、皆戸、天神、龍田、沖田、東川、東、権現、熊沢、
 大足、下リ松、平行田、川、東(南)、竹花(内出)、源
 訪前(谷地)、落合、曲師、空堤、長原、花龜、十一、
 西原、居館、窪、前原、下十二、浮美、三反田、大沢

第七節 人 口

本村の人口動態を明治から現在まで概観すると第3表のようになる。ただし、明治四四年以前は残念ながら資料がなく不明である。また、大正九年以後は、五年毎に実施された国勢調査の結果で正確なものであるが、それ以前は、資料の都合により、農業人口の統計であり、商工業者、労働者が除かれたものである。それ故、実人口より少ない。実人口はこれに二と三百人加えたものと推定される。(大正九年では、農業人口に三八三名を加えたものが実人口である。)

この表に見るよう、本村の人口は、明治から昭和二十五年に

第3表 宮城村の人口

年次別	人口	総数人	男人	女人	農業人口
明治44		4,680	2,405	2,275	
大正3		4,756	2,451	2,305	
〃 6		4,904	2,525	2,379	
〃 9.10.1	5,738	2,882	2,856		国
〃 14.10.1	5,993	2,994	2,999		勢
昭和5.10.1	6,368	3,178	3,190		調
〃 10.10.1	6,548	3,289	3,259		査
〃 15.10.1	6,956	3,483	3,473		
〃 22.10.1	9,010	4,589	4,421		
〃 25.10.1	10,341	5,100	5,241		
〃 30.10.1	9,378	4,754	4,624		
〃 35.10.1	8,772	4,349	4,423		
〃 40.10.1	8,065	4,009	4,056		
〃 45.10.1	7,825				

かけては、年々増加し、昭和二五年には、明治の頃のおよそ二倍となつた。しかし、三〇年以降は、逆に年々減少の傾向をたどつてゐる。この減少面を、出生・死亡の自然増減、転入・転出の社会増減といった二つの面からみたのが、次の第4、第5表である。

つまり、自然増減においては、毎年出生が死亡を上まわつてゐるに対し、社会増減において、転出が転入を上まわつてゐる。これが出生者数の減少とあいまつて本村人口減少の原因となつてゐる。この背景には、日本経済の復興に伴う商工業の発達があげられる。すなわち、農業人口の第二次、第三次産業への吸収が急速にすんだ結果である。

年齢別人口構成

本村において、人口が最大となつた昭和三五年から同四〇年にかけての人口動態を年齢別人口構成の上から見たのが、第1～第4図である。

この四つの表を見て、特に目につくことは、昭和二五年から四年にかけて、七〇歳以上の老年層の増加、二〇歳台の青年層、特に二〇～二四歳までの層の減少、それに、九歳以下の幼年層、特に〇～四歳までの層の著しい減少の三点である。

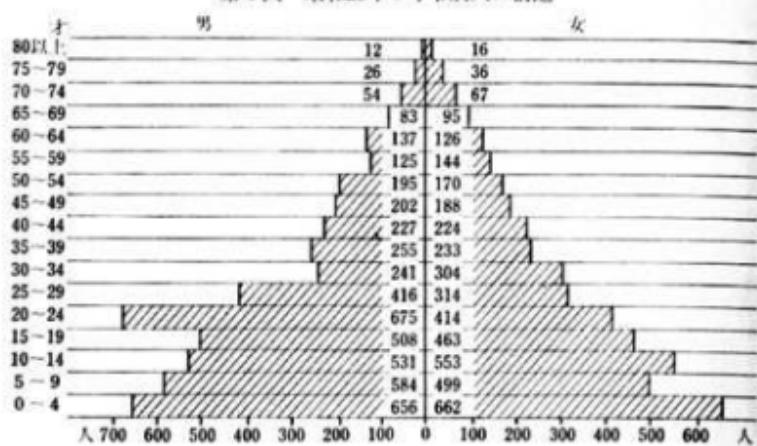
第4表 自然増減

年	昭和35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45
出生	人 140	人 132	人 119	人 107	人 100	人 111	人 77	人 98	人 102	人 97	人 115
死亡	71	73	66	70	59	65	70	67	57	65	68
自然増減	69	59	53	37	41	46	7	31	45	32	47

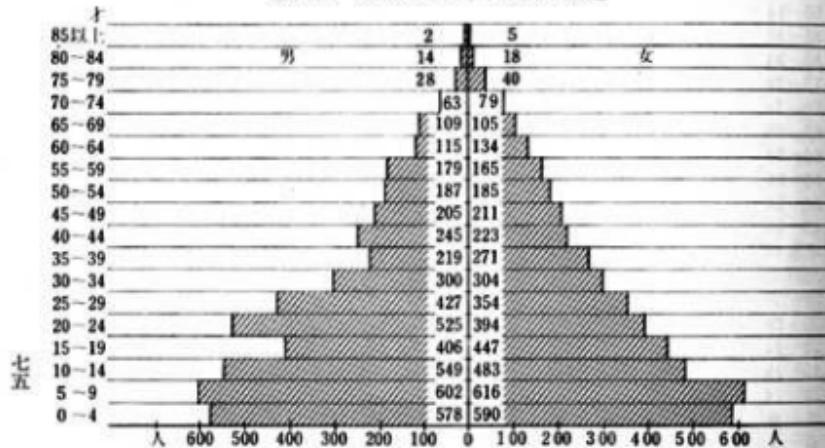
第5表 社会増減 △は減を示す

年	昭和35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45
転入	人 223	人 166	人 275	人 220	人 209	人 265	人 277	人 263	人 234	人 338	人 344
転出	400	363	480	369	487	451	389	333	362	398	410
社会増減	△ 177	△ 197	△ 205	△ 149	△ 278	△ 186	△ 112	△ 70	△ 128	△ 60	△ 66

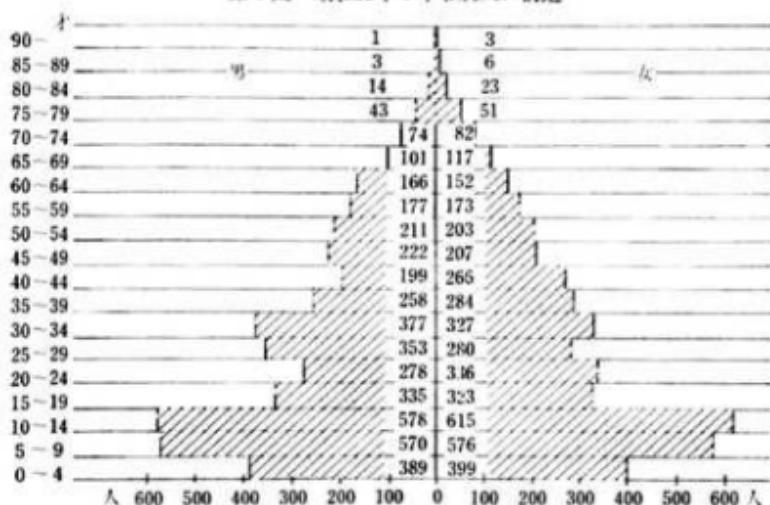
第1図 昭和25年の年令別人口構造



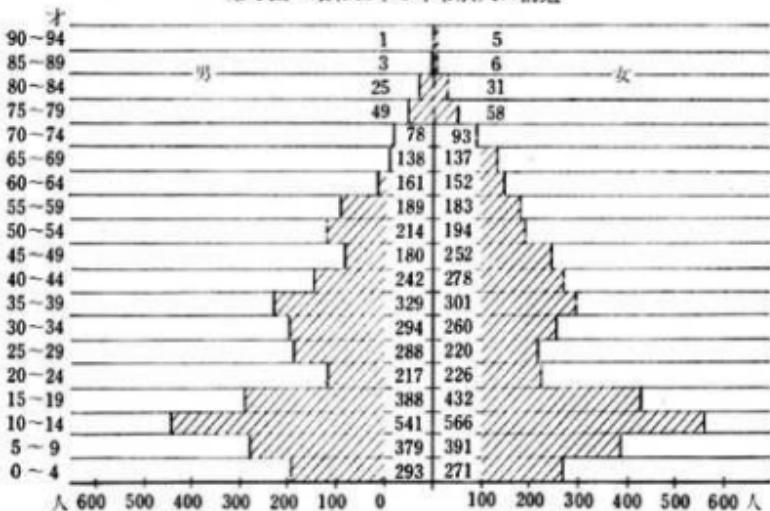
第2図 昭和30年の年令別人口構造



第3図 昭和35年の年令別人口構造



第4図 昭和40年の年令別人口構造



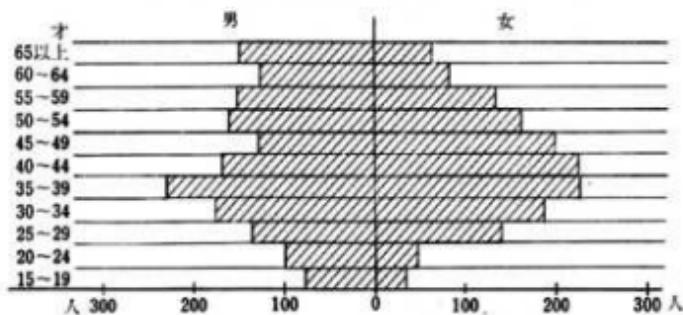
昭和二十五年では、男子の二〇～二四歳までの層が最も高い割合を示していたのに反し、昭和四十においては、四歳以下の層の中で最も低くなってしまっている。

終戦から昭和三十一年頃にかけては、戦争によつて破壊された産業は充分復興せず、第二次、第三次産業における労働者の吸収力は低かった。そのため、農家の二・三男は働き口もなく、潜在失業者として農村に残り、農家の二・三男問題として、大きな社会問題となつた。

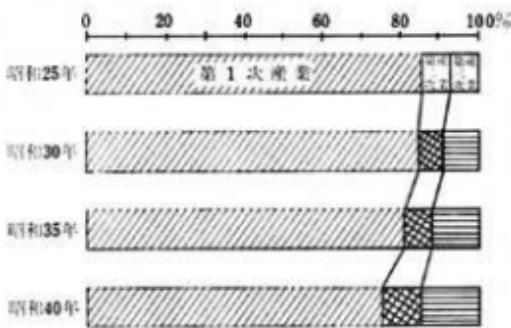
しかし、昭和三十一年以後の経済の高

度成長にともない、第二次、第三次産業での労働力の需要は急速に高まり、農村とあつた労働力は次々に吸収されていった。この結果、先の二・三男問題は急速に解決したが、二・三男のみならず、農業後継者として期待されている長男までも農村から離れていく現象があらわれ、農村経済の先行きがあやぶまれるにいたつた。

第5図 年令別農業就業人口（昭和40年国勢調査）



第6図 産業別就業者の割合



この現象は、本村においても例外ではない。(第5図参照)一〇歳台の青年層の急激な減少と老年層の多いことが注目される。

また、戦後の受胎調節の普及とともに生産率も減少の傾向を示している。

これら幼・少青年層の減少は、今後の本村産業振興の上で大きな問題点として指摘されるところであろう。

産業別人口の割合

本村の産業別(一次・二次・三次)は、第6図にみるとおりである。

昭和二五年から四〇年にかけて、第一次産業（農林漁業）の占める割合が徐々に減少し、逆に、第三次産業（サービス業）の伸びが目につく。

しかし、全体の七〇%強は農林業従事者であり、本村産業の中心が農業にあることを示している。

第6表 農家戸数・專業・兼業農家数

本村経済の中心である農業について、農家戸数ならびに專業・兼業農家といった面からみた数字が第6表である。

この表で特に目につくのは、昭和三〇年代から後の專業農家の減少である。特に、四〇年代に入つてからの減少は著しい。逆に、急増の傾向を示しているのが兼業農家であり、全農家のうち、八四%は何らかの形で兼業をしていることになる。

三〇年代後半から四〇年代にかけて、家庭電化製品、自動車等の耐久消費財の購入が活発となり、これらによる家計支出の急増に対する農業収入の伸び悩みを、兼業による現金収入に求めたもので、消費経済の影響が大きく反映していることを如実に示している。

大字別人口動態

三八年以降の大字別人口動態は第7表にかかげた通りである。

第7表 部落別人口動態
(各年9月末日現在)
(住民登録による)

字名	男女別	昭和38年	40年	42年	44年
鼻毛石	男	894	859	847	825
	女	936	910	907	903
	計	1,830	1,769	1,753	1,728
柏倉	男	1,057	1,029	985	998
	女	1,047	1,012	981	949
	計	2,104	2,041	1,966	1,947
市之関	男	439	444	422	425
	女	478	458	430	422
	計	912	902	852	847
三夜沢	男	101	95	95	93
	女	93	94	91	90
	計	194	189	186	183
苗ヶ島	男	748	738	723	713
	女	771	740	737	726
	計	1,519	1,478	1,460	1,439
馬場	男	300	288	280	274
	女	331	304	292	299
	計	631	592	572	573
大前田	男	555	552	530	523
	女	646	637	598	604
	計	1,201	1,189	1,128	1,127

第八節 村の名字

役場の帳簿で村の世帯主の名字を調べると、二百五十六姓というたくさんの中になる。

宮城村の名字				
苗字	大字			
鼻ヶ石	柏倉			
関市之	沢三夜			
島苗ヶ	馬場			
田大前	計			
一				
二	一	五一二四		
四	二二九	九		
三	四一一二二四九一〇	七	一一七一	

江梅内植上岩入井市板磯井石石石				
苗字	大字			
鼻ガ石	柏倉			
関市之	沢三夜			
島苗ガ	馬場			
田大前	計			
一八				
二四一				
四		二		
一四				
四二四		一四		
一五一				
一一四		六一一		
一五二一五七五七一五六一二四二		二	一	

櫛翁金加春袖女小小小小小岡岡大大大大大大大達
野野羽

沢野子井藤日本屋寺里野沢倉川田崎賀橋野塚谷鳴沢崎藤

第八節
村の名字

三一六二二一二六一

一一二一〇一一三二八〇

一一一

七一一一一二一三二二三一

六一一

二一七

五一四一二一一五一一〇九一三一二一二三三四二九〇一

木小小小五黑栗倉倉倉久久喜木北北木神神川川神鎌蕉
久保保

暮暮保池井崎原林橋重田木楽村村爪鳴辺沢田保崎尾塚木

二二一一四一八一

二一一三三三一

二三三一一

一一一一

一二一一一一九一

八一

一一三三一八

二二一四二一三一二二一一二八一三一一二一一

下清篠品品設志重鹿塩沢佐酒桜斎近小小小小後小小

境水原田川楽田田田藤井井藤田藤沼鰐堀林藤島柴桜

一三 二 一二一 四 一 二 一
 --- 一 四三三 二一一一
 一 二 一 六 三二
 三三 一
 三 一 一一三 一 二
 二 一 三一
 五 一 一 二
 一三四一七一一二三一一三二八四三一三一七五四二二三

高高高高高曾瀬閑閑 住須砂須須鉛杉真新白正下下霜
 閑

沢山橋木垣井川戸本口 谷美川永藤木下藤沢石田山田田

六 六 一 一一 五 一四二 一 一一
 二 四 一 一 一 一 二 一
 三 一 一 一
 一 一 一
 五 二 四 二 三 五
 一
 三 一 一 一 二 二三
 八一七一一三二一一七一五一一四四七一一三一二二八四

東出寺寺手劍
薙坪角常常
使河提
土月塚田田谷谷棚田田田武
宮口沢内島原岡木田味木
屋田越村井口川橋中島口井

一 一 二 一 一 一 一 一
一 一 二 三 二 一
一 一 三 二
九 一 一 一 七 一 一
五 一 一 一
一 一 二 一 一 五 二 一
一 一 二 三 二 四 三 三 八 二 二 三 三 三 一 一 一 一 七 一 三 一

長萩野根根丹西中奈奈中中中永中長中鳥鳥鳥豊都遠
谷 良 井
川原口本岸羽野村原良山谷島沢井野岡川山原居島丸丸山

四 一 一 二 二 一 一 二 一 一
一 一 三 二 二 二 一 一 一
二 一 一 一
三 八 一 四
一 三
二 一 九 一 一 〇
一 五 二 三 一 三 九 一 二 一 二 二 二 三 一 一 一 二 一 一 一

前星吉船伏藤藤福福福深深引広彦広平平伴 春原 羽
林 原

原野館田島原井田島井町沢津田田坂神林田野 山田 鳥

一 四 一 — — 二 一 — — — —

四 二 一 二 九 二 一 — — — —

五 四 九 三 — —

五 一 四 三 一 二 一 一 四 一 — —

二 一 一 一 — —

七 一 一 四 一

七 二 四 五 一 二 一 二 一 四 八 ○ 九 四 一 一 五 四 一 二 二 三 一

桃百本茂林宮宮宮三三葉 松松松松松松松松町真増
峯 隅

井瀬山木野原田下沢宅橋輪 山本村永田島下倉井田田子

二 一 六 一 九 二 一 一 二 一 四 三 一 一 — — ○ —

一 一 一 五 一 一 三 七 — — —

二 — — — — — — —

一 一 六 一 — — —

一 ○ 二 一 一 一

三 二 二 九 一 一 九 三 五 一 一 一 二 二 八 三 一 一 一 三 三 一 一

横矢山山山山山柳家茂森
坂島本根田下崎口沢内合田村

一一二一二三一一
一三二一
一一
一一
一一
一一
一一
一一
一一

二一二一二五二四一三一一二二

名字の合計	渡涌六米吉吉吉吉横横横機 本辺井木内野田沢川山沢塚田
一一〇	四一一〇二一
九二	二一七
四三	七
二三	一
七五	四
二二八	一
五八	二
	二四一一四三一一一一

(昭和四十四年十月現在)

名字の発生は古代にまでさかのぼる。開墾、譲渡などで所有した田を名田（みょうでん）とよんだ。その名田は自分の勢力範囲の土地である。その土地の名を、同族同志の区別のために一つの符号として呼ぶようになった。例えば新田義貞の祖である義重は源氏であるから、源義重であるが、義重が上野国新田莊の莊官になると、土地の名の新田を名字とした。その子孫も各地に名田を持つと、その名田の土地の名をそれぞれ名字としている。世良田の世良田氏、綿打の綿打氏、里見の里見氏がその例である。このように土地の名を氏の名に変えた。

江戸時代には名字の使用制限がなされた。武士、郷士、神官、画家など限られた者のほかは名字があつても名乗ることは許さなかった。庶民が名字を用いることができる者は、幕府に、あるいは大名などに功勞があったとき、その

恩賞として、名字や帶刀が許されて使用できたわけである。名字をもつことで權威や身分的差別をつけていたのである。しかし、各地の墓石などを調べると名字が江戸時代の者にもついている例がある。別に名字、帶刀を許されていない家である。このことは、公的には使用できなかつたが、私的には使用していたということの実証になる。

四民平等を打ち出した明治新政府は、明治三年九月十日、太政官布告を出して、庶民に氏（名字）を名乗ること認めた。

「自今平民苗字被^ニ差許^ニ候事、付リ右様被^ニ仰出^ニ候上ハ、向後諸証文其外都面苗字相印取引可^レ致候。」
このようにしてすべての者が平等に名乗れるようになった。

- (1) 今までのを用いるもの
- (2) 自分の好きなものを用いるもの
- (3) 禁止されていた字などに改めるもの
- (4) 新しく主家、旧家の名字をもらうもの

などといろいろなことがあり、名字の歴史の上に大きな意味をもつた。

村の名字を數的に調べてみると、一姓百三十戸というのが一番多い。それは北爪姓である。次いで、大崎姓が九十戸。前原姓が七十四戸。阿久沢姓が七十戸などが戸数の多い名字である。

数の少ない方では、一姓一戸が百十姓、これは村の名字の四三%にあたる。一姓二戸は四十二姓、これは一六%。一姓三戸が三十二姓で八%である。一姓一戸から三戸まででは村の名字の六七%にあたる。一姓の戸数が少ないものが多いことがわかる。

☆宮城村の戸数の多い名字

☆大字ごとの名字の数

順位	名	字	戸数(戸)
17	深	小	一三〇
17	神	神	九〇
16	町	町	七四
14	長	長	七〇
14	吉	吉	四八
12	星	星	四六
12	高井	高井	二九
11	深	深	二七
9	宮	宮	二七
9	六	六	二七
8	阿	阿	二五
7	前	前	二四
6	大	大	二四
5	久	久	二三
4	本	本	二二
3	木	木	二二
2	村	村	二〇
1	原	原	一〇

一つの名字が二十戸以上は村に十八姓ある。多い順からまとると上の表のようになる。

名字の分布は大字ごとでちがいがある。大字の面積の大小、地理的、社会的、経済的な諸条件が影響を及ぼしているのである。

大字の中の名字をみると、大字に集中している名字がある。大字を代表するような名字である。鼻毛石の北爪姓、柏倉の大崎姓、苗ヶ島の前原姓などがその例である。

柏倉の松村、阿久沢、六本木なども一つの大字に集中して多い姓である。

數は少ないが、鼻毛石の町田、吉田。柏倉の深津、樺沢。市之関の小池、小堀、栗原。苗ヶ島の石橋、鶴岡、東宮。馬場の井上、堤、小林、鹿田、田村。大前田の宮田、神尾、高井、後藤、下田、萩原、中村。などは一つの大字に集まっている名字である。

また、数の多い名字でも、全大字にもれなくあるものとなると、六本木のただ一姓のみである。一番数の多い北爪姓は三夜沢ではなく。大崎姓は柏倉に集中してあと市之内毛石の二大字に十軒と少ない散らばり方である。前原姓についても同じことがいえる。一方、少ないが比較的多くの大字にわたっているものなどもある。

名字はそれぞれ、その派生地をもつてゐる。数多い名字の中にはよその土地からやつて来たものも相当数ある。そ

柏	ケ	石	一一〇姓
市	之	関	九二タ
三	夜	沢	四三タ
苗	ヶ	島	二三タ
馬	ケ	島	七五タ
大	前	田	二八タ
前	田		五八タ

☆「大字の中でも多い名字」()内は戸数

大字 順位	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
鼻ヶ石	柏倉	北爪	町田	吉田						
市之側	板池	崎80	松村	阿久沢34						
三夜沢	橋(4)	阿久沢29	井(3)	高深清						
苗ヶ島	北爪	北爪	石井(3)	水津(9)						
馬場	桜井(3)	齊藤(3)	常栗原(3)	北深						
大前田	高井(3)	橋(4)	味(3)	津引						
宮	北林(3)	鹿岡(3)	高田(9)	北田(9)						
田(2)	野田(3)	鶴東(9)	宮(9)	中澤(9)	六本木(7)	宮田(9)				
神	後藤(3)	高田(9)	村(9)	星(5)	星(5)	星(5)				
尾崎	田(3)	下田(9)	宮(9)	澤(9)	澤(9)	澤(9)				
提	高岡(3)	田(9)	吉原(3)	吉澤(8)	六本木(7)	六本木(7)				
長	星(3)	田(9)	阿久沢(8)	阿久沢(8)	中澤(9)	中澤(9)				
高	常(3)	田(9)	井(9)	金子(7)	金子(7)	金子(7)				
井(3)	栗原(3)	田(9)	谷川(7)	谷川(7)	天川(8)	天川(8)				
前	原(3)	田(9)	中村(9)	中村(9)						
原(3)	橋(4)	田(9)								
上(2)	阿久沢(8)									
北村										
塩田										
曾川										
長谷川										

の土着のようすが、古い新しいはあるが、入村してくる経過、理由など幾つかの例で調べてみると

- (1) 職人として村に来た人……………足立、谷口、寺沢、広神。
- (2) 商店を経営するために村に来た人……………北村、塩田、曾川、長谷川。

(3) 公務員として来村した人（駐在、看守、局長）：大島、春日、久保木、彦坂、下界。

- (4) その他、個々の事例が多いが

・寺の住職 志田

・開業医

・戦争疎開

小野寺 達山

など村の名字がふえてきた理由が考えられる。

宮城村は大胡城が活躍した中世にはその支配をうけたようである。大胡領とよばれた。江戸時代にもその呼び方はつづき、大胡東領大胡西領とよばれていた。宮城村は東領にはいる。その土地を開いた人々のことを草分けとよぶ。その土地で最も古い名字と考えられる。前橋市江木町の町田藤江氏の所蔵している、「当国西領之内近村曆之印置帳」と題のついた横帳のもので、慶長年号が記されている。その記述の最後ははっきりしていないが、記述のようすから元禄年間を下らないと考えられている。(丸山知良稿「続群馬の苗字」所載)

その中に宮城村に關係する草分けの人々が書かれている。

○柏倉村

大崎隼人 深津修理

其外 六本木 阿久沢兵庫 北爪 松村

次に 大崎の末弟 合七人

後藤、高橋、是ハ市ノ閔ニ住ス

○苗ヶ島

前原 阿久沢 北爪 長岡

当国花輪ヨリ来ル 東宮修理大夫の末弟同苗金作

其外 星野 石橋

○鼻毛石

富田より来 吉田三之丞

柏倉より来 北爪卯兵衛

草分 引田。

この記録は、全村にわたっていなかったが、古くからの名字が繁栄しているのは前のいくつかの表をみても、これらの名字がはいつてることでわかる。

名字には、それぞれ由緒が伝わっている。どの名字にも、それがあると考えられるが、ここでは、朝日新聞前橋支局出版の「群馬の苗字」から抜き出して、その由緒をみたいと思う。同書に掲載されているもの一

柏倉の阿久沢、大崎

市之関の阿久沢

三夜の奈良原、真隅田

苗ヶ島の前原、上野

大前田の中村

その他、東宮、北爪

柏倉の阿久沢

毎年四月初辰の日と、十二月初寅の日に、城南村二之宮赤城神社の神輿（みこし）が、宮城村三夜沢の赤城神社に登る。神輿は途中大胡と柏倉で休むが、その柏倉において奉仕するのが、この阿久沢イフケ（現在二十五軒）である。松並木の下方に、字腰掛けという土地があり、その林中にわらの仮宮を作り、そこに神輿をすえて休む。阿久沢はその時、茶を出し茶菓子を用意して二の宮から来た人を接待する。いつごろから始まつたか不明だが、自家用車で神輿渡御がある現在でも変わらない。阿久沢は、市之関、苗ヶ島、大前田等宮城村内に多い。紋章には洲浜（すはま）を用いる。

柏倉の大崎

元禄七年（約二七〇年前）に判決の下った赤城山馬草場の訴訟は長く語り伝えられている。この判決の因縁を当時中心になつた宮城村の三軒で一年交代で保管して来ている。柏倉の大崎、鼻毛石の北爪、苗ヶ島の東宮でお絵図まわしという。この大崎家は重郎を襲名して來た有力な名主であった。赤城神社所蔵の中世文書の中に上杉氏の家臣北条丹後守高広の永禄九年（約四百年前）書状に大崎次郎左衛門の名が出てる。柏倉を主に宮城村内に八十八軒ある。元宮城村助役の大崎公平氏もイッケである。ほだい寺は村内の天台宗東昌寺。家紋は三ツ柏。上野丑之助氏教示。

市之関の阿久沢

勢多郡黒保山村宿禰に城という部落がある。ここは戦国時代に城があり、城主は阿久沢能登守と称していた。宮城村市之関の阿久沢はもと六本木といったが、戦国時代にこの城主阿久沢能登守の娘を名字持参で嫁にもらい受けた。これより阿久沢を称するようになつたと伝えている。現在でも馬に乗って嫁入りした時の馬具がある。本家は半兵衛を襲名して代々名主を勤めており、前橋藩資料に名字帶刀御免の記録がある。明治以後もいっけで村長になつた者が何人もおり、前村長阿久沢俊夫氏もこの一族である。家紋はすはま。分家は十数軒ある。（丸山知良）

三夜沢の奈良原

由緒の深い神社の神官の家系は、仕えまつる神社と同じくらい古い場合がある。勢多郡宮城村三夜沢の赤城神社は、延喜式内大社で赤城山信仰の中心地。東の宮、西の宮の二社あり、明治以降両社は統一されている。その東の宮の神官が奈良原氏、同家に所蔵されている南北朝時代以来の年代記によつても、神社といつ結びついたかわからないくらい古い。家伝では、安閑天皇の子孫である下野国造奈良別命の子孫多氣麻呂、倍彦の兄弟が赤城神社の斎主にな

つたとある。奈良原の家系は長いが、同族は多くない。大胡神社の神官は一族。（郡丸十九一）

三夜沢の真隅田（ますだ）

勢多郡宮城村三夜沢の赤城神社の歴史をみると、東と西の宮と二社あった。いつからか東西両社が三夜沢に同居するようになり、明治にはいって完全な一社となつた。奉仕する神官も二社に分かれて、東は奈良原家、西は真隅田と杉下の両家があつた。古代に奈良別の子孫多氣比古が奈良原家、倍比古が真隅田家の先祖となつたと伝えられている。真隅田はもともと増田とも書いている。屋敷神の地鎮（じじん）さまは承久二年の銘をもつ古さ。墓地も六百年と考へられる石塔がある。明治初年に帰農したが、神社に近い西側に住んでいる。家紋五七の桐。（丸山知良）

苗ヶ島の下の前原

勢多郡宮城村苗ヶ島の前原氏は、江戸時代初期に山岳仏教を信仰して勢多郡東村から移住したと伝えられている。苗ヶ島には古くから前原姓が居るので区別して下（しも）の前原氏とよばれてきた。佐野藩主堀田摶津守の領有時期に名主取締役を勤めて、名字帶刀御免となつた。堀田侯の領内巡視には本陣となつており、殿様拌領の品として絵巻物、馬具や殿様直筆のコイの絵などを残している。本家の当主は前原盤根（いわね）氏で、四代にわたり宮城村長を勤めるというめずらしい存在。家紋は鳥の葉。分家は苗ヶ島の内に十数軒ある。上野丑之助氏教示。（丸山知良）

苗ヶ島の上野

江戸時代後期に上野南漢という儒学者がいた。勢多郡宮城村苗ヶ島において世間的活動をさけて静かに村人に儒学を教えていた。その学識は深山幽谷に咲くランのように自然と世間に知られたと伝えられる。この上野家は現在五軒。先祖は二百年以前に北爪家から新里村に養子にゆき上野姓となつたが、実子の弟が生まれ、江戸へ出て合羽商を営みしだいに隆盛となつた。諸大名と商取引が行なわれるころ弟が離ることになり、郷里に帰つて農業を始めた。文化、

文政期には二代にわたって名主を勤めている。南漢はこの分家。紋は抱きおもだか。当主丑之助氏は宮城村村長。

（丸山知良）

大前田の中村

勢多郡宮城村大前田に中村姓が七軒ある。中村家は大前田七屋敷とよばれる家の一つ。先祖は室町時代後期に新田郡の世良田（尾島町）からこの地に移り住んだ中村伝兵衛尉と称する武士が帰農したという。これが中村家の初代にあたる。江戸時代には代々名主の家柄で村政に参加し、明治期にも中村伝吉氏が戸長をつとめた。その子伝平氏と宮城村役場につとめ収入役、あるいは村委会員として活躍した。当主は中村庄寿氏で二十二代目にあたり、宮城村委会長。紋は丸に根毬。^{ねづち} 元日はそばを食べる。禁忌作物はきび。先祖祭りを春彼岸に行う。斎藤辰男氏資料。

（丸山知良）

宮城村の東宮

戦時中東宮大佐の名で知られた東宮（とうみや）姓は宮城村苗島を中心として多い。この遠祖は奈良時代以前にさかのぼる。東国経営のためにはるばる毛野國に下った崇神天皇の第一皇子豐城入彦命の子孫が上毛野氏、下毛野氏と称し、いまの群馬、栃木の国造として君臨したが、その下毛野国造の子孫が東宮氏だったというから話は大きい。ある時代に、下野国から勢多郡花輪村に移住した。花輪には東宮神社と刻んだが石があるという。そこからさらに苗ヶ島に移ったそうだ。一説には、三夜沢赤城神社の東の宮をあずかっていたので東宮とつけられたともいう。（萩原進）

勢多郡の北爪

赤城山南ろく地方には北爪姓は多い。家伝では、南北朝時代のすえ、新田氏の残党を取締るために、京都御所の衛士だった北爪助八が邑楽郡に下り、これが北爪氏の祖となつて、中毛地帯に広まつたという。赤城山南ろくでは、そ

れが三派となつた。宮城、大胡方面はその祖を典膳といい、柏川、新里方面の北爪は大藏からで、富士見、前橋では甚内の子孫と伝える。いずれも小田原北条の勢力下に戦国を終つて帰農したという（北爪節草氏資料）。また武田の家臣だったと伝える家もある。家紋は矢ちがいの下に十六菊で珍しい紋であるが、これを共通にしている。

（都九十九一）

第九節 集落

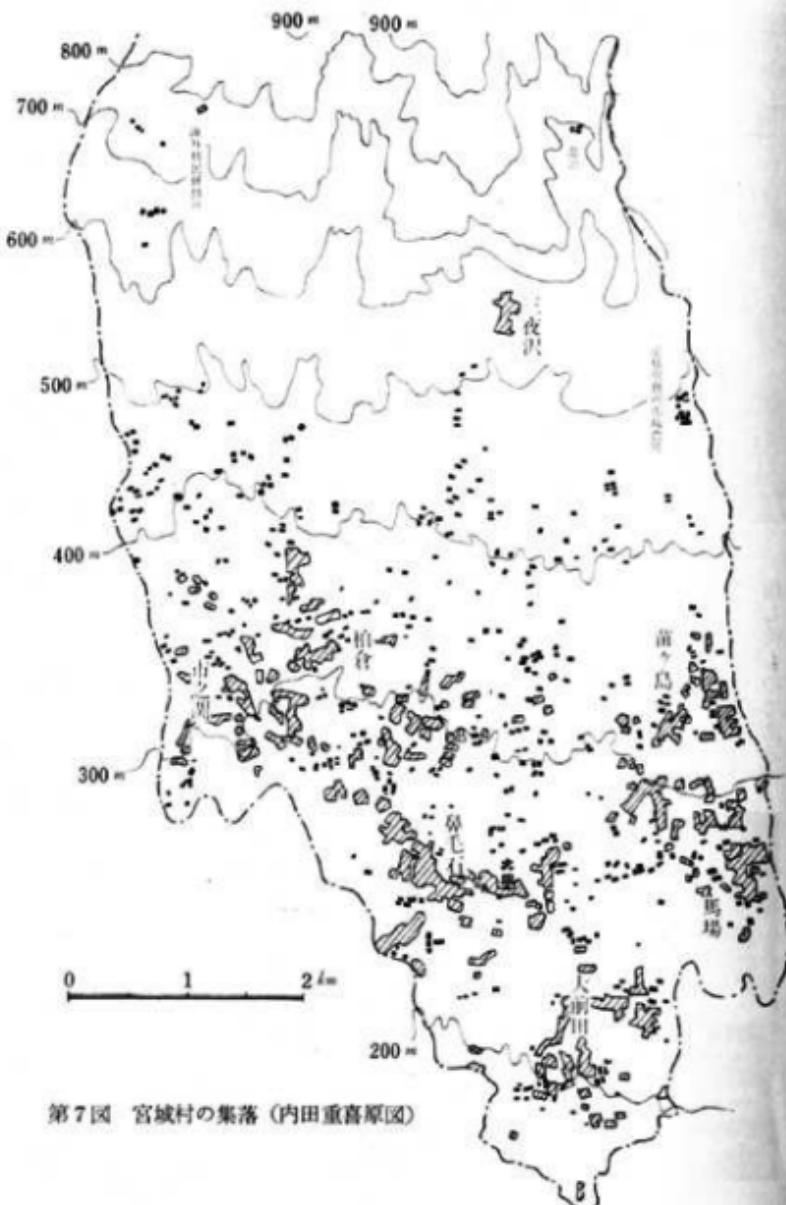
一、集落の分布

赤城火山の南斜面に展開する宮城村の集落の分布は、第七図の通りである。大部分の集落は標高四〇〇メートル以下の緩傾斜地に分布する。鼻毛石・馬場・大前田付近には集村の形態がみられるが、全体として、小村落の散在が著しい。高度をますにつれて、村落が点在する傾向にある。

戦後の開拓による入植者の大部分は、標高四〇〇メートルと五〇〇メートル付近に居住している。しかし、赤芝では、標高七〇〇メートル付近に入植している。

集落の立地は、地形と木とによる制約が著しい。地表面には火山灰が覆い、その下方には火山礫の堆積が厚いので、地下水の浸透度が大きく、地下水位が低い。そこで、輻射谷に沿つた水利の便利なところに集落が立地する動向にある。

三夜沢は赤城神社の門前に発達した集落で標高約五五〇メートルの高位置にあるが、現在は農業を中心とする集落



第7図 宮城村の集落（内田重喜原図）



(航空写真) 集落

の色彩が濃厚である。

湯之沢（標高約九〇〇メートル）、忠治（標高約七〇〇メートル）などの赤城温泉は、荒砥川の上流に面する傾斜地に展開する温泉集落である。

また、海外移民研修所、農電研究所、前橋刑務所赤城農場などは、本村居住地の高位部にある施設である。

宮城村における民家の構造上、特色あるものは、今和次郎氏の名づけられた「赤城型民家」である。屋根の前面に「切り落し窓」をつけて、中二階をつくり、そこを蚕室に利用したものである。

赤城型の民家（鼻毛石、町田基太郎氏宅）
(撮影 昭45.2)

その分布は、少なくなっている。

二、宮城村における集落の研究史

赤城火山の南斜面の集落について、早くから小川琢治博士、辻村太郎博士などによつて、その特異性が述べられている。

小川琢治博士は「大胡國幅」にあらわれた村落について「孤立莊宅より叢集村落に転化する漸移型を示す一種の散布村落である。」とされ、「洪澗地における模式的な集落である。」と指摘されている。（人文地理学研究、六三—六四頁、一九二八年）

辻村太郎博士は「この地方の集落は火山斜面に発達する代表的な小村落の事例である。」とされ、特異な村落景観を指摘されている。（文化景觀の形態學、地理學評論、六卷七号、一九三〇年）

さらに、矢鶴仁吉博士は小川・辻村両博士が指摘されたことを、宮城村に視点をしおって実証的に研究を進められた。以下、矢鶴仁吉博士の論文を、同博士のご許可の下、掲載させていただく。（赤城山南斜面の村落景觀、社会地理二五号、一九五〇年）

三、地割形態の考察（矢鶴仁吉博士による）

宮城村の縮尺三〇〇〇分の一による地籍図は所謂「番地界図」(Cadastralmap, Kadaster Karre) であつて、土地台帳の付図である「切り図」をもととしてつくられたものである。これは地番と土地の区劃とを示すが、これのみでは土地利用の態容を知ることはできない。そこで筆者は該地籍図（大字別七枚）につき各葉の一筆毎に土地台帳（五

十六冊）を照合して、畠地・水田・宅地・山林・原野・墓地・寺社等に分類し、色刷によって記入した。これによつて始めて本地域に於ける土地利用の実態を把握する一つの根拠が得られた。しかし實際には土地台帳に記載されたものと現状と相違するものがあると考えられるので、更に同村の農地委員会事務局の最近の実態調査の結果を参照し、なおその他現地に於ける野外調査の観察を基として補正した。地割の形態は比較的長期にわたって余り変化しないものであるが、その変化や地目の転換はかかる方法により概ね正確に把握することができよう。



第8図 赤城山麓の地割形態（大前田）（矢島博士による）

大前田（矢島博士による）によれば、赤城山麓の地割形態は、主として以下のように分類される。すなはち、
1. 原野の地割形態で最もはつきりと目につくのは高度の差が一筆当りの区割の大きさによくあらわれていることである。山麓線に近い原野の部分は開拓の時期が古く集落の密度が大であり、土地利用の形態もきわめて集約化されていることを反映して一般に地割は細分化の傾向が顯著である。斜面の高度を増すに従

つていて。殊に山林の場合にこの傾向は著しい。

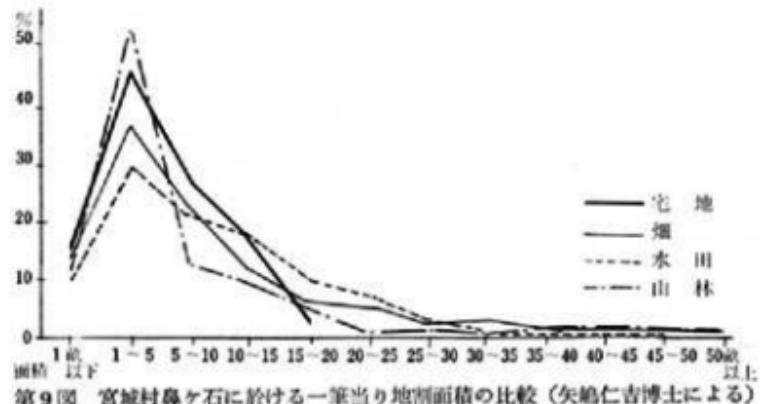
地割の形態に地形の制約が最も明瞭に反映しているのは水田の場合である。

この地域の水田はいずれも上述の輻射谷に沿って開かれたもので、その用水は山頂部の「小沼」より涵養される柏川その他の水系に依存している。しかし、これだけでは田用水として不足するので、斜面の全地域にわたって人工的の貯水池の分布が著しい。なおこの福野の用水使用については用水組合の慣行が古来より固く守られ、田植期の「水送り」の行事は最も重要な行事となっている。

水田の地割は火山の原形面を深く刻んだ輻射谷に沿って行なわれたもので、険しい谷壁や河床に向って傾斜する土地を集約的に利用している。その内比較的に谷幅の広いところは河床に向って階段状に区切られ、前面に向って弯曲した地割形態を示すことは辻村博士によって指摘された山腹の水田の階段耕作の場合と軌を一にしている。一般に本地域の水田の分布と形態とは輻射谷の発達に影響されている。

最近しばしば起った洪水のために荒砥川・柏川その他斜面の輻射谷が豪雨に伴って土砂を押し流し、土地の流失あるいは埋没による地目の変換などの行なわれたのは水田にもっとも多い。荒砥川の流域はその最も顕著な例を示している。

畠地は火山の斜面を開拓したもので、水田に比し一筆当たりの面積も大きく、その形も整っている。特に山頂に近くなるにつれて開拓年代も新しく、山麓付近の集約化された土地利用の形態と著しい対照をなしている。山麓付近では、土地はほとんど耕地化され、山林の大部分は屋敷跡であって、農耕用の堆肥として落葉の補給源は古くより山頂部に広く分布する山林に求めている。そこで、この地域ではこの入会地に関する「株場慣行」が古くより行なわれていた。



第9図 宮城村鼻ヶ石に於ける一筆当たり地割面積の比較（矢崎仁吉博士による）

第九図は、本地域のほぼ中心をなす宮城村鼻ヶ石（標高二四〇～三〇〇メートル付近）における土地利用一筆当たりの地割面積の比率を示したものである。

四、宅地の密集度（矢崎仁吉博士による）

従来集落の形態や大きさ及び密集の度合を考察する場合には主として地形にあらわれた幾何学的の形態と単位面積内に示された民家の戸数とを根拠として行なわれていた。

この方法もたしかに一つの方法であるが、筆者は前述の地籍図を用いて「宅地の密集度」を指標として集落の大きさを考察した。即ち小川博士の指摘された「孤立莊宅より叢集村落への漸移型」を示す本地域の集落は「宅地の密集度よりみていかなる実相を示すものであるか」という点を明白にすることが研究の出発点である。

そこで、全地域にわたって大字毎に地籍図により一ブロック毎の宅地の筆数を求め、これをもつて集落の密集度を示すものと仮定した。その結果は次の表に示す通りである。

この作業では相接する宅地又は道路・用水路をへだてて連続する宅地集団を宅地ブロックとした。これによると全体の五三・五%は所謂「孤立莊宅」である。

宮城村の大字別宅地の密集度（1949年8月矢嶋仁吉博士調査）

大字名	宅地数	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11 以上
柏	58	25	8	9	3	4	2	0	0	0	0	0
苗	47	19	11	7	1	1	0	0	0	2	0	1
鼻	28	16	8	9	3	1	1	1	0	0	0	1
市	40	3	5	7	1	4	0	0	0	0	0	1
大	38	10	7	5	0	0	1	0	3	0	0	1
三	4	2	0	0	0	0	1	0	0	0	0	2
馬	18	3	6	0	1	0	0	1	0	0	0	0
計		233	78	45	37	11	10	6	3	0	2	7
比率 %		53.5	18.0	10.4	8.5	2.5	2.3	1.3	0.7	0	0.4	1.6

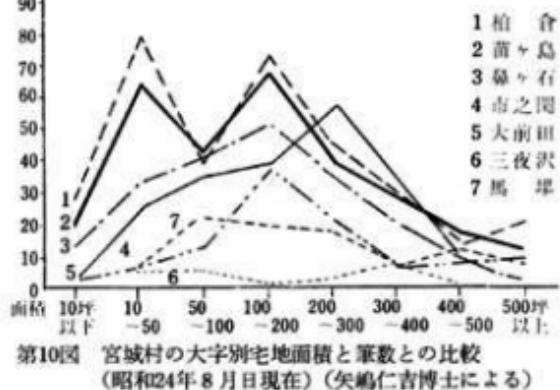
この表に示す如く、一ブロックに十筆以上の宅地の接続する所は一・六%に過ぎず、その大半が散在する小村落であることが知られる。山麓地域の大前田付近が二～八戸の密集した村落をなすものが多いに対し、高位置にある柏倉・苗ヶ島・馬場・市之関等の過半が孤立せる宅地に点在していることは地形的な制約が多い火山の斜面における集落分布の特質といえよう。

五、宅地面積と民家の建坪（矢嶋仁吉博士による）

第十図は本地域の全戸につき、その宅地面積を一筆毎に調査し、面積別に筆数を示したものである。火山の斜面及び裾野は普通の平地の村落にくらべて肥沃度が小さいため、宅地面積をなるべく少なくし、できるだけ多くの耕地を保持しようとする傾向が見られる。山麓線に近い大前田部落のみが宅地の規模が大きく、二〇〇～三〇〇坪を保有するものが多いのに比し、他は概ねそれ以下で山頂に近い柏倉・苗ヶ島部落は一〇～五〇坪及び一〇〇～二〇〇坪に多くの筆数がみられる。

その他全地域を通じて三〇〇坪をこえる宅地をもつものは少ない。

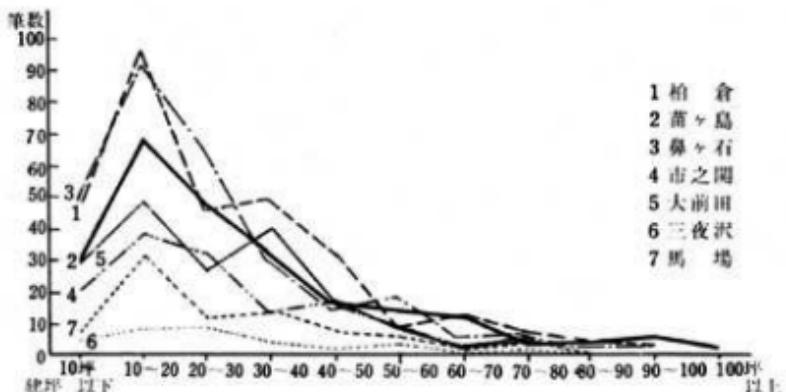
これは、西川治理学士（単位聚落の比較研究、新地理三卷四号）の研究された秦野盆地及び東京西部の村落や筆者（矢嶋仁吉博士、西武藏野における農村



第10図 宮城村の大字別宅地面積と戸数との比較
(昭和24年8月現在) (矢嶋仁吉博士による)

の聚落構成（要旨）、地理学評論十九卷六号の調査した西武藏野の農業聚落の場合とくらべて著しい対照である。このことは赤城山の斜面及び裾野に見る共通的現象で、既報（矢島博士、赤城山南麓の村落構成、地理学評論二十一卷三号）の芳賀村勝沢の検地帳を通じて観察した赤城山麓の近世の村落構成にもあらわれている。

第十一図は民家の主体をなす母家の建坪と戸数との関係を示したものである。全般的に母屋の建坪は五〇坪以下に集中している。特に一〇~二〇坪が最も多いことは、零細化された裾野の聚落機構の特質といえよう。畠地の多くが火山斜面の原形面を利用して畜力の利用度が少ないとため、民家構成の要素としての畜舎その他の付属家屋の少ないことも指摘される。



第11図 宮城村大字別母屋建坪の比較 (矢嶋仁吉博士による)

農家は平均して一町歩以上の農地を保有しているが、水田が少なく、その大半は肥沃度の少ない畑作を主とするものである。

なお、この斜面において顯著なことは同姓あるいは同族集団を単位とする私有墓地の分布の著しいことである。現在、土地台帳に記載された私有墓地だけでも三六〇カ所に及び、同姓以外のものを同一墓地に葬らしめぬ旧慣が固く守られてゐる。概ね一畝以下の小さい墓地であるが、大部分は徳川中期以降のもので、これによつても斜面の開拓の新しいことが推定できる。

これは武藏野や相模野などの新田集落において、各戸が自家の墓地をその家の地続きの所にもつとの類似している。また小川博士が指摘されたような一部落の同姓意識が強く、排他的な村落共同体意識の潜在する一つの具現とも考えられる。

六、防風林の分布（矢嶋仁吉博士による）

火山の裾野における村落景を特色づけるものとして防風林

宮城村の防風林配置（1949年8月矢嶋仁吉博士調査）

字名 配 置	大前田	鼻ヶ石	馬場	柏倉	市之岡	三夜沢	苗ヶ島	調査数
無し	% 44.0	% 49.7	% 57.1	% 69.6	% 59.0	% 23.7	% 70.0	戸 60.5
北	22.9	20.1	19.7	8.7	24.5	14.3	9.3	152
西	15.1	15.1	6.1	5.2	4.9	38.1	6.4	90
南	1.9	2.1	4.9	1.7	0	0	1.2	18
東	9.4	5.8	6.1	4.9	2.9	9.5	4.3	53
北	3.6	5.8	6.1	4.9	4.9	4.8	0.7	53
南	2.5	0	0	2.3	0	4.8	0.6	10
東	0.6	0.7	0	2.4	0.9	4.8	0.6	13
西	0	0.7	0	0.3	0.9	0	1.2	5
北	0	0	0	0	2.0	0	0	2
東	0	0	0	0.6	0	0	0	2
調査総数	戸 155	戸 139	戸 81	戸 344	戸 102	戸 21	戸 162	戸 1,004

がある。八ヶ岳の裾野における防風林については三沢勝衡氏の詳細な研究（八ヶ岳山麓における景観型、地理学評論五卷九、十号）があるが、本地域においても防風林の分布はその地域的性格をよく示している。筆者（矢崎仁吉博士）は前述の地籍図を用いて、そこにあらわれた宅地周縁の山林について調査した。調査戸数は一、〇〇四戸であり、その結果は前頁の表に示す通りである。本地域の民家はほとんどそのすべてが山頂部を背にして南面するものである。母屋を中心として東西南北のいずれの方向に屋敷森が存在するかを示したものである。なお、この外、屋敷森としてではなく防風垣や単なる立木或は人工的の柵などによって防風にあてているものがあるが、本稿においては所謂「防風林」のみに限定した。前の表に示すように、母屋の北側及び西側に山林を配置したものが最も多い。

これは本地域において初冬より翌年春までに卓越する北西風及び「赤城風」という北風に対する備えである。

民家の配置がほとんどこの屋敷森を背にして南面しているのも本地域の卓越風の然らしめたものであり、裾野の村落を特色づけるものといえよう。

貴重な論文の掲載をお許しくださった矢崎仁吉博士に厚くお礼申し上げます。（内田重善）



第7 防風林に囲まれた民家（箱田）（内田撮影 昭45.2）

第十節 民 家

生活様式の現代化はわたしたちの生活の中に幅広く、深くはいってきている。

それは、食生活の上に、衣類関係に、住居の上に、生産方法に、ものごとの考え方の中にと多種多様に影響を及ぼしている。それは、生活の向上のために必要なこと、大切なことかも知れない。

生活の現代化につれて、古いものが消えていく場合が多い。いろいろな場面でそれが見られる。生活の向上、生活の合理化等のためとはい、伝統をもつ古い文化財が由緒ある古いものが、一つ、二つと消えていくことは惜しまれることであり、きびしいことである。

古い建物も、そんな運命を受けている一つである。これは、日本の国全体の傾向である。

わたしたちの住まいをはじめ、日本の建築物は、木を主体とした建物が多かった。そのため耐用年数におのずと限界があった。

伊勢神宮などの古名社が式年遷宮をしたのも上代の朝廷の都が大和の地をいくつも移り変わったのも、木造建築物のもの耐用年数の限界が一つの要素的なものではなかつただろうか。

さらに、加えて天災、人災がその命を縮める。だから、古い建物の数は少ない。

村の建物で古いものは数が少ない。江戸時代初期といわれる民家が最も古いものと考えられている。しかし、時代が下がるが、三夜沢赤城神社の本殿は、県下でも有数の神明造りの本殿である。また、柏倉の諏訪神社の東の神楽殿なども貴重な文化財である。

江戸時代の初期にさか上がるといわれる民家は、耐用年数、幾度か村を襲った天災などに耐えて古い姿をよく残して今日にいたっている。しかし、最近の社会的、経済的な面の変化。生活様式の変化などにより、住居の建てかえなどが多くなり、古いものが急速に失われている。貴重な文化財として保護、保存を広い立場から考えていかねばなるまい。

古い民家といわれているのは

- 1 大字柏倉六〇四、阿久沢秀夫氏宅
- 2 大字柏倉六二六、樺沢幾喜氏宅
- 3 大字鼻毛石六〇、北爪政則氏宅

の三軒である。特に阿久沢家の遺構は県下でも古い時期の民家の遺構といわれている。

村のある赤城南麓地方の民家では、「赤城型民家」と呼ばれる独自な様式をもつ民家が知られている。村の各地に見ることができたが、最近一つ、二つと姿を消しているようである。

この赤城型民家というものは、屋根の正面の平入りの中央部を切り落とした形式の民家のことで、名称は赤城山麓地方に多く見られると考えられてつけられたが、その後の調査で、形には多少のちがいがあるが、県下各地にも点在していることが確認されている。

屋根の平入りを一部切り落したこの民家は、そのことによってできた中二階を、養蚕時に使用しているところから、養蚕経営のために工夫された、庶民の生活の知恵の所産であろうといわれている。



柏倉 六本木庄平家

養蚕技術の進歩、農業経営の進歩で養蚕經營が変化している現在は、先人の生活の知恵の所産も不必要になる場合が生ずる。赤城型民家の消滅は一面には建築上の理由、菅葺屋根の材料のなくなつた理由などとともに、經營上の理由も合わせ考えられる。

本村に残された古い民家については、昭和四十三年に、県立前橋工業高等学校、建築史研究班の生徒の手で調査され、調査報告のレポートにまとめられている。それにより概略ふれてみたい。

この調査は「獨得な赤城型民家の様式を見極め、昔から、どのように型態が変化して来たのか、特に屋根形態の変化に注意し」赤城山麓の市町村の古い民家二十三戸を調査し、それを資料として「どうして赤城型民家と呼ばれるような独自の様式が生まれたのであろうか」という本源的なことまで調査を通して考えてみた。ものである。

その結果「これらの古民家を、その時代の特徴をよく示しているものを、細部形式について分類し、様式を編成すると、次の三つのグループに分類できる。

一、古い形式を示すグループの民家。

二、中間的な形式を示すグループの民家。

三、新しい形式を示すグループの民家。

また、屋根形式の変遷という項目を設け、研究をまとめている。

本村の遺構はこのレポートの中に四例上げられている。

一の分類に、阿久沢秀夫氏と桜沢幾喜氏宅の二例が上げられている。この分類に、苗ヶ島五五〇、星野栄一氏宅と北爪政則氏宅の二例、合わせて四例が出ている。いずれも、旧家であり、名門といわれる家柄である。江戸時代の古文書などを見ると、名主とか、村役人をつとめている。

また、北爪家の場合には、代々与市右衛門と称し、剣道の名門として、神道流荒木派一伝流の奥義を伝え、その盛時には門人三百余人に及んだといわれ、現主は二十代目といわれている。また、阿久沢家には、江戸時代の末に学問、文学を愛した人を出し和歌などの遺作が残されている。各家の遺構の説明は、前工生のレポートをもとに以下述べていく。

一、古い形式を示すグループの民家

このグループの遺構はすべて、広間型の平面形式を示している。この広間型には、列柱式広間型と大黒式広間型があるが、調査したものでは、約半々ぐらいであった。そして、古い遺構ほど閉鎖的であるという点では、県西部の古民家と同様である。

中でも、阿久沢秀夫宅（柏倉六〇四）は入口近くに「袖すり柱」が存在し、土間部分が床上部分に比べてかなり広く古い民家の様式をよく残している。袖すり柱は建立された当時は、技術が未熟のため、土間荷重の一部を負担しようとして設けられたものだが、入口近くゆえ、よく袖をするので「袖すり柱」と当家は呼んだものである。また、この民家が古いことは、出入口の外に、表座敷と奥座敷の南面に、わずかながら明らかに取りがあるだけで、他はすべて土壁で囲まれていたり、柱がすべて手斧（ちょうな）仕上げであることでわかる。当家の建立年代は、約三五〇年から四百年くらい経っているものと思われる。



柏倉 阿久沢秀夫家

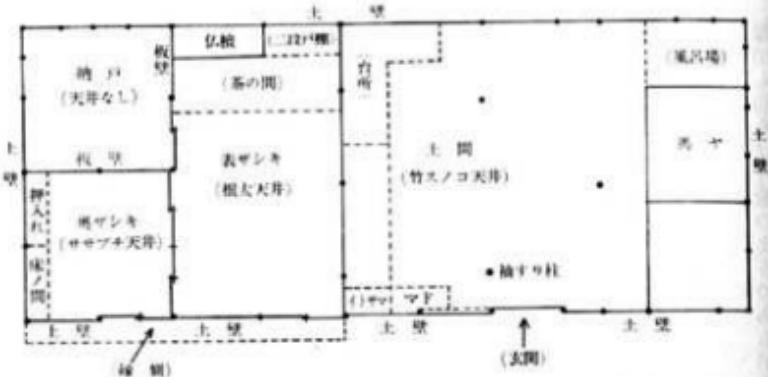


図1 阿久沢秀夫宅平面図（前橋工高建築史研究班原図）

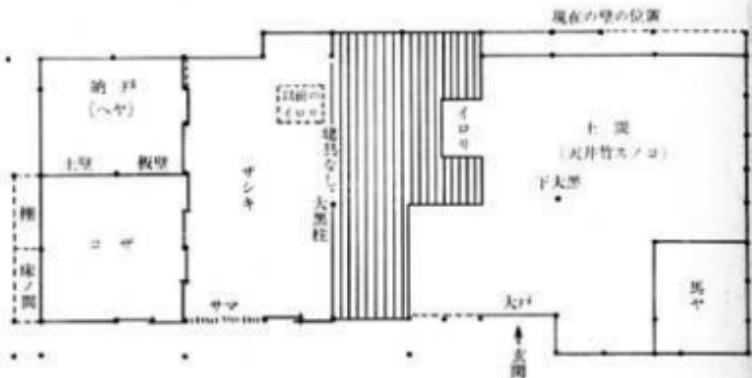


図2 棚沢幾喜宅平面図（前橋工高建築史研究班原図）

阿久沢秀夫宅より少し新しくなるのが、棚沢幾喜宅（柏倉六二六）である。この型になると、座敷南面の土壁が「サマ」になり、座敷土間境の柱数が減少し、大黒柱の性格がはつきりしているものと思われる。

この形式の民家は時代が下がるといつそう開放的になる、座敷の「ザマ」が建具に変わり、奥りは南面全部が開放となり、それとともに土間南側座敷方面の土壁が「サマ」となり、したがって土間が大部明るくなる。そして北側にも出入口が設けられるようになった。しかし、奥

り、ヘヤ境の半分が土壁であり、古い形式のなごりをとどめている。

時代が下がると開放的性格は増し、奥り、ヘヤ境はすべて開放となり、茶の間（座敷）兩面と茶の間、奥り境に、「差し鶴居」^{さしわし}がはいり、中間の柱が抜かれるようになる。「差し鶴居」とは、鶴居と梁を兼ねる背の高い鶴居で、「差物」「指物」ともいう。

そのほか、土間南西の「サマ」などが拡大されてくる。このような民家が二百五十年から三百年ぐらいたつていて、一七世紀末から一八世紀初期にかけての形式と考えられる。

また、部屋の数などは、家の格式によつて多少ちがつていいようである。

二、中間的な形式を示すグループの民家

一八世紀の中ごろから一九世紀中ごろにかけての民家形式である。

このグループの遺構は「喧嘩型」や「不整形四間取型」が一般的形式であり、広間に「小座敷」が設けられた形式である。

なぜ広間に小座敷が設けられたのであらうか。広間は、ただ広いだけで、わりあい使いづらい不便さがあつた。そこで広間の北側に小座敷を設け、使用の便を考えたのであらう。しかし、小座敷、ヘヤ境は土壁であつた。おそらく小座敷は物置みたいなものとして使用したものと考える。

また、この時期になると縁側や床の間が設けられるようになる。床の間の場所は家によりことなつた場所の場合がある。また、床の間の外に押入れがつくなどの遺構もみられる。縁側も初めは外縁のようであるがやがて内縁のものになつてくる。

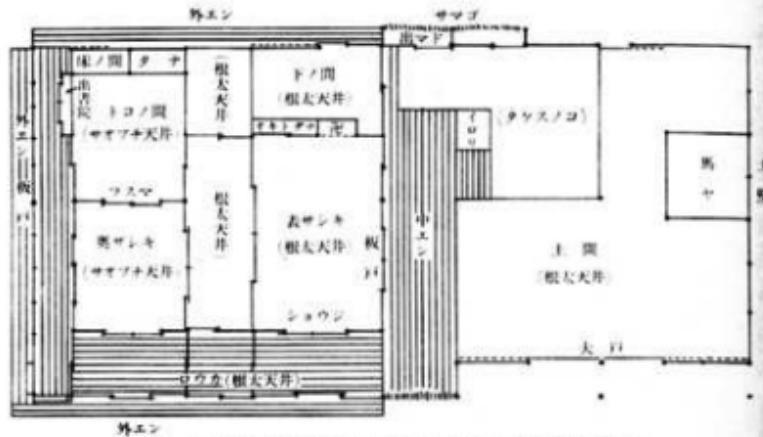


図3 星野栄一宅平面図（前橋工高建築史研究班原図）

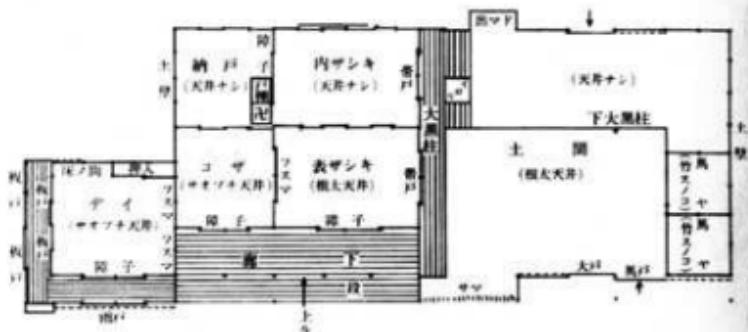


図4 北爪政則宅平面図（前橋工高建築史研究班原図）

星野栄一宅（苗ヶ島五〇）
では一間幅の廊下があり、その
南面に外縁がある。表座敷側廊
下の南面は「式台」が付いてい
る。

式台とは、上層階級の人があ
たときの上がりふちのことであ
る。表座敷側に付けられたの
は、家人が客にあいさつするた
めであると考えられる。また、
土間に張り出して中縁も設けら
れている。天井は土間や廊下ま
でも根太天井がはられており、
床の間を奥座敷は棹縁天井にな
っている。もし仮に中央部分の
部屋を取り除き、左右の部屋を
合わせると、喰違い四間取型と
なりやはりこの期の民家と考え
えられる。

られる。また、星野家の場合は開口部の多いことも特徴の一つである。

北爪正則宅（鼻毛石六〇）では、デイを除いた平面形式が、整形四間取型（田字型）に似た不整形を示している。このことは、当家がこの地方において一時代進んでいたことを示している。デイは西に出張った形になつてゐるが来客用の部屋であったと考えられる。また式台は、コザの方にも伸びている。

北爪家は代々剣道を教えていた当地方の名門であり上層階級の民家の例と考えられる。このように上層階級と一般階級との民家の間に時代の差を感じる場合も見受けられる。

三、新しい形式を示すグループの民家

一九世紀中ごろ以降の民家形式である。いわゆる「整形四間取型」（田字型）が主流をなしてゐる。しかし、中に
は喰違四間型を示すものもあるが、喰違部分の幅が三尺くらいで少なくなつてゐる。

この期のものは部屋境のすべてが建具で仕切れ、開放性が最大限に考慮されている。しかも、どの部屋でも天井
がつけられるようになつた。このころになると養蚕の影響で小屋裏利用にせまられ、南面の屋根を切り落して採光す
るようになる。これが特に赤城南面の地に見られる「赤城型民家」とよばれてゐるものである。

この期の造構では小座敷が、前の時期の場合とは違い、仏壇や戸棚、食卓がおかれ、座敷と関連しつつ生活の主要
な位置を占めているようである。

四、赤城南麓地方の屋根形態の変遷

第一回のような平家建ての民家は二階建ての民家より古いことは常識である。その中でも古いと思われるの

が第一図の民家である。その理由は

- 1、棟が低い。
- 2、軒が低い。

3、家屋内が暗い。

4、雨戸が柱と柱の間でいつれか一方に自分の幅だけしか動かない。

などである。この形態は江戸時代初期のものである。

阿久沢秀夫宅、樺沢幾喜宅などはこれに属する遺構である。

第五図の遺構から第六図の一般形の赤城型になるまでには二つの形態の遺構があげられている。また、なかには切り落しが図のようなものより小さい場合も見られるが一応赤城型と統一してよいと考える。

このような赤城型は江戸時代中期から明治初期までの形態であると考える。

星野栄一宅、北爪政則宅などがこれに属する遺構である。

この形態からさらに二つの形態を経て窓二階とよばれる、一階の平面と二階の平面の同じ形態が生まれてくる。惣二階型と名付けているが、これは明治末期以降と考えている。(『群馬県内の古民家の形態について』県立前橋工業高等学校建築史研究会)

右の前橋工高生のレポートを宮城村関係遺構を中心にして要旨をまとめた。

なお、星野家は、新しく住居を建てかえるため、とりこわされてしまい、今はもう見られなくなってしまった。時



第5図 (前橋工高建築史研究班原図)



第6図 (同上)

代の流れかも知れないが惜しいことだと思う。

昭和の今日、村には、新しい建物が次々と生まれている。村役場、小学校の校舎、体育館などとつぎつぎとできる。新しいものもすばらしいと思う。新しいもののすばらしさとともに、わたしたちの先人が生活の中で生み出しきた古きよきものも大切に残し、後の世に伝えていきたいと思う。

初まいりに三夜沢にのぼった。寒空に嚴然と立つ赤城神社の御本殿を下から仰ぐと、神明造りの白木の造りの素朴な美しさが、力強さが心を洗ってくれる。

わたしたちは古いものも大切にしていきたいものだと思う。

四五、一、二五（堀口英二）

第二章 赤城神社をめぐる村

尾崎喜左雄

緒

第一節 自然の神

第二節 新田^{〔こうた〕}の地から見た赤城山

一 石田川式土器出土地と大古墳の分布

二 「まつり」—祀・祭

三 「まつり」の発展

四 古墳文化と水と「まつり」

第三節 赤城神と上毛野君

一 地域の神と集團の神

二 葦族の神と支配者の神

三 上毛野君と「新田」の地

四 赤城山南麓地帯と上毛野君

第四節 上野国の赤城神

一 二之宮町の地と赤城神社の鎮座

二 官社赤城神社

三 神仏習合

第五節 仏教化された赤城神

一 二大明神と三所明神

二 「赤木巣焼」

三 赤城山の世良田

四 赤城塔の分布

五 「神道集」の赤城神

六 三夜沢赤城神社の「年代記」

七 上野国の神社の情勢

八 三夜沢赤城神社の鎮座

第九節 三夜沢での赤城神社

一 赤城大明神への復興

二 「年代記」ひるい読み

三 松並木の寄進

四 赤城明神神位勅許の問題

五 大洞の赤城神社との関係

六 三夜沢赤城神社の神仏分離

七 東西両宮の合併

第八節 昭和年代の赤城神社昇格運動

緒

赤城神社は、古くから赤城山南麓地帯に住む人々の生活の中心の軸であった、と思われる。しかし、この人々の生活の中心も、「時」のうつり変りによって、歴史的な変化を重ねてきている。現在の姿がいつの時代にさかのぼっても同じであるということはできない。私は以前、勢多郡誌（昭和三十二年刊）に、赤城神社について記し、最近は前橋市史（昭和四十六年刊）にも稿を改めて載せている。勢多郡誌ではおもに宮城村三夜沢の赤城神社を中心としたものであり、前橋市では前橋市二之宮町の赤城神社について述べている。この両神社は、赤城南麓一帯から群馬県外にまでわたっている多数の赤城神社の分社の中心であると見たからである。中心が二社であるとすることは私の心の謎であつて、それを歴史的にときほぐしてみることが、赤城神社を研究する緒口となつていている。

この二社以外にも一つ謎があつた。それは三夜沢の赤城神社に、もとは東方に鎮座していたのが移ってきたという伝説があることと、柏川流域の月田（柏川村）に近戸神社があることが、問題を与えていた。この問題はようやく昭和四十年になって、柏川の上流の標高七〇〇mの地域に、宇通遺跡とよんでいる山嶽寺院跡とも言えるものを調査し、はじめて解釈ができ出したのである。このことは調査がまだ完了しないために、断定することはできないが、謎としが大凡のところまで至つていると考えてよからう。

このように古来続いてきた一神社であつても、種々変化があるのであって、現状のみで往古の姿と認めるることは誤りである。その一例として、赤城神社の祭神をあげてみると、現在、三夜沢の赤城神社では赤城神、大己貴命、豊城

入彦命となつてゐるが、昭和十九年の官幣中社内定の時は赤城神であり、それ以前は大己貴、豊城入彦である。年代記によると明治四年正月には祀神十柱に定められたとある。十柱の神名は明らかではない。しかし、明治初年に作成せられた群馬県の神社明細帳には、大己貴、豊城入彦両神があげられており、「^一宮赤城神社は大己貴一神で、旧勢多郡のうち上川瀬、南橋、北橋、横野、敷島、富士見、芳賀の諸村の赤城神社の祭神は豊城入彦、桂賀、木瀬、荒砥、新里、黒保根、東諸村のは大己貴であり、大胡町、柏川村のは大己貴、豊城入彦である。伊勢崎市から新田郡にかけては大穴牟遲神と記して一神としているのが多い。したがって赤城山西南麓地帯は豊城入彦であり、南麓の平坦部から新田郡及び東麓部にかけては大己貴（大穴牟遲）ということになる。同じ赤城神社でも祭神が区々である。且つ、古代にあつては六国史にあらわれているのは赤城神で、赤城沼（又は石）神が一箇所にのみ記されている。中世では小沼・大沼の二神と鎌倉時代の末に覚満（かくまん）というものが祀られ、一所から三所明神となつてゐる。どれも、赤城神社の祭神なのである。

神社の起原といつても特別な証拠があるわけではないのであるから、赤城神社の起りについても推定してみるだけのことなのである。比較的はつきりしているのは中世以降であつて、記録も少しあるし、遺跡や遺物もあるが、それ以前のことは「六国史」や「延喜式」や「上野国交替実録帳」というものなどに散見しているだけで、赤城神や赤城神社の名は見えていても、それが何処でどうあつたかは皆目わからない。赤城山頂に近い字通遺跡を調査しても、赤城神社であるという記録はないので、諸条件から考えあわせて、間違いないだろうと推定しているだけである。しかし、諸条件が割合いにととのつたならば、まずあたらずとも遠からずと考えていいのではなかろうか。したがつて、推定の対象によりきりで、諸条件のあまりととのつていないものは、信用度が低いということになる。これから記すものにも、信用できるものとその度合の低いものが混在している。新資料の発見と考察を深めることに

よって、更に完全に近いものに発展させねばならない。

したがって、宮城村大字三夜沢鎮座の赤城神社を解説するためには、その神社においてのみ資料を求めたところで、從来の資料をこねまわすにすぎず、解説に多少の発展はあっても、多くは旧説を踏襲するだけで終るのであるから、村誌に他村のことを書くのは余事のようであるが、できるだけ広い視野で説明してみよう。ただし、すでに『勢多郡郡』や『前橋市史』に記したことについては、必要に応じ略述するつもりであるが、両書をも総合、参照して頂きたい。

第一節 自然の神

神社というものは人々が神を知つてこれを祀るためにできたものである。人々が神の存在を知つてこれを祀ろうとしたことから祭祀がはじまり、やがて神社ができきたのである。神の存在を知つて祀ったことは縄文時代にすでにあったのであるから、神の存在ははやくから知つていたのであろうが、それが赤城神社にどう受けつがれているかはわからない。かりに赤城神社は赤城山を神と信じて祀つたとするならば、赤城山は少なくとも縄文時代頃から美しい山の姿であったと思われるから、すでにその頃に赤城神の起源があったと見ることもできようが、どうも縄文時代の人々が山を祀つたという証拠はまだ見出されていない。縄文時代後期頃からの土偶どぐを見ると、生産に関係していた形が多く、山や川や、風、雨、雷というような自然現象を神格化したものとは思えない。生産といつても、農業生産ではなく、直接に子を産むことに対する驚きであったかも知れない。

赤城山腹から山麓地帯にかけては古くからの遺跡が多数発見されている。相沢忠洋君の発見及びその研究による旧

石器時代の所謂岩宿文化の遺跡の大部分は、その南麓から東南麓にわたる地域であり、宮城村大字苗ヶ島の樹形遺跡もその一である。すでに、人々はその頃にこの地に住んでいたのであり、数万年以前と言われている（後章相沢忠洋
樹形遺跡参照）。大胡町大字茂木の三谷遺跡も岩宿文化に属している。その他、柏川村、新里村、笠懸村、大間々町などにかけて多数発見され、相沢君は一応その編年を大成したのである。縄文文化においても、宮城村大字市ノ関に市ノ関遺跡が発見され、縄文文化前期の住居跡で、それも拡張されていることがわかった（後章市ノ関遺跡参照）。隣村柏川村の大字室沢にも大林、大平の二遺跡が調査された。やはり同じ頃の住居跡である。どれも標高三〇〇メートル余りのところに位置している。これらの住居跡では、祭祀を行なっていた様子はまだ認められてない。

ところが赤城山西南麓の北橘村大字小室の敷石住居跡では、その構造から見て、普通の住居ではなかったような点が認められ、或は祭祀に關係があるのではないかと考えられている。その敷石住居跡は縄文文化後期の頃のもので、標高四〇〇メートルあたりであるが、比較的利根川には近い、このような遺跡が最近高崎市若田町にも発見されており、また、また松井田市入山では敷石ではないが、これに類する遺跡が調査されている。嘗て利根郡水上町で調査した乾田遺跡も同様なものであろう。その他、住居の中で祭壇のようなものがあつたり、特殊な石製品が一定の間隔を以て、意味ありげに配置されているようなものもある。しかし、どれも住居内の発見で、屋外での祭祀の場はまだ発見されていない。

弥生文化でも、神をどう祀つていたかはつきりさせたいと思うのであるが、朱（丹）塗の土器は祭祀用のものといわれているだけで、神を何と言つていてか、どういう風に祀つたかはまだわかつていない。群馬郡倉淵村水沼の弥生遺跡の住居跡の一隅の火を焚いた痕跡のあるところから、左右相対して、小さな脚台付の甕型土器が二箇出された。この土器は朱（丹）塗ではなく、弥生土器の中の樽式土器といわれるもので、甕型が多く、雜器として使われた。

とされ、灰褐色の焼き上りに、波状の櫛目文がついているものである。火を囲んで、弥生人が酒をくみかわしていたようにも見えるが、それにしては土器が小さすぎる。或は火の神に捧げたものではなかろうか。赤城山の西南麓の赤城村大字樽（樽式土器の最初の発見地）からも出土している。

宮城村大字市ノ関の西方、大胡町大字金丸からは樽式土器よりも古い型の弥生土器が出土している。住居跡が発掘調査されていないのではつきりしない。宮城村の中央を流れている荒砥川下流の前橋市荒口町字前原（旧荒砥村）からも同じような弥生土器が出ており、この方からは朱（丹）塗の土器が発見されている。しかし、多くの他の土器と混っているので、特に神を祀ったものとして考るわけにはいかない。吾妻郡中之条町大字上沢渡の有笠山の弥生洞窟遺跡（古い型の樽式土器使用）からは、住居跡から数段高い洞窟の奥の岩場の上に、小型な土器が一箇、置き忘れられたようになつて発見された。神に何か捧げたと見られよう。すると、神を祀ったと見てもよさそうであるが、縄文文化のような土偶は見出されていない。直接的な恐怖によるものではなくて、観念的な神が考え出されはじめたものではなかろうか。

自然現象の中でも雷を神としたことは、雷鳴や電光が、更に落雷での死傷や火災などが、恐怖であることから始っているとすれば、農業生産を営む頃からとも言えず、もっと古代にさかのぼるかも知れない。雷と同じように扱われた現象として考えられるのは、火山噴火や洪水などもあげられる。これらについては想像はどのようにもできるが、実際の遺跡が見出されていない。自然現象を神としてどの程度考えていたかは皆目わからないのである。弥生文化が発展してその後の文化に続いていると言わわれているので、文献にあらわれている神を意味する古い言葉も、その頃からものではないかと思う。

古典から知り得られる神を意味する言葉には、「ち」と「み」とがある。『古事記』や『日本書紀』や『風土記』など

の伝説から推定してみると、雷電、深淵などは「いかつち」「みつち」などと「ち」という言葉でその神格をあらわし、その本体には「蛇」をあてている。「ち」で表現したものに、このほかに「ぬつち—野椎(野或は沼つち)」「しおつち—塩土(潮つち)」などがある。蛇に対する直接的な恐怖と、蛇に關係があると見た自然現象への恐怖とを結びつけて、「ち」と表現したものであろう。「かぐつち—迦具つち」「みかつち—甕つち」は火、甕の神秘力に対する驚威によるものであろうが、やはり、蛇に關係せしめられている。

『古事記』に「石土毗古神(いわつちびこのかみ)」というのが出でている。この神は『日本書紀』に「倭文神建葉樹命(しどりのかみたけはつちのみこと)」と同類の言葉で、「いわつち—石つち」「はつち—葉つち」であつて、前述の例と同様に、石や葉を神格化したものであろう。「みかつち」の「みか」は甕みかで、その中で酒が醸成するのと、その酒に酔うこととの神秘力を具えたものとして、神と見たものであろう。葉も風にさやぐ姿や音に、動的な神秘を感じたものであろう。しかし、石はそのような神秘感は与えない。むしろ巨石の威圧感に神秘性を認めたものであろうか。

「み」という神をあらわす言葉については、「やまつみ—山祇」「わたつみ—海神」などの例がある。この「み」の内容は、「ち」の直接的な恐怖ではなく、知的な思考によつて畏敬ひけいをあらわしたものとなつてゐるようである。この語も後には「蛇」に関係せしめられてはいるが、「ち」から「み」への発展は、恐怖から畏敬に変化したものであろう。あえて漢字をあててみると、「ち」は「魑魅」であり、「み」は「神祇」であろう。「かみ」という言葉は「み」の発展はあるが、『古事記』に「火之迦具土神」を「火之爐かづか甕みか古神」とも謂うとあるので、その「爐—かが」という語に影響があるのでなかろうか。火の神は人々の生活に最も關係深いので、そう考えてみたのである。

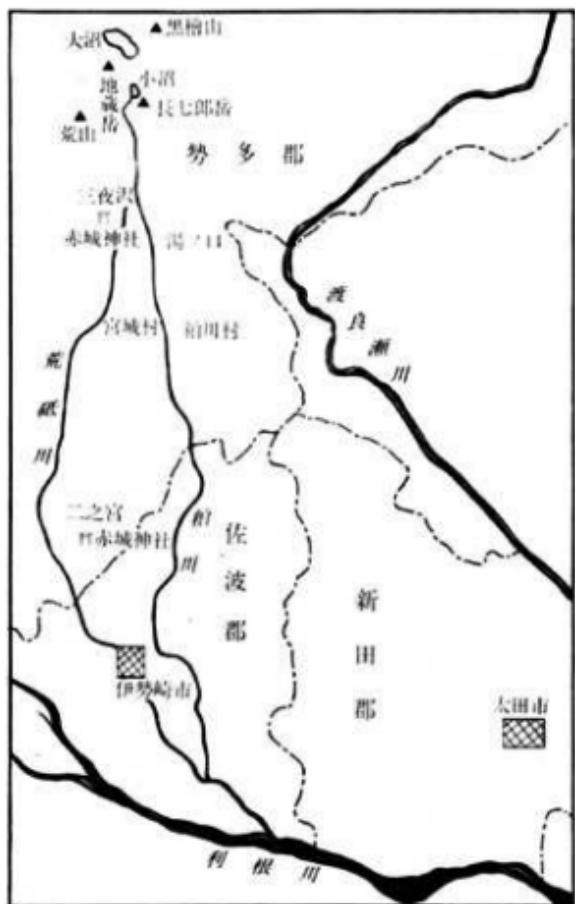
群馬県における巨石崇拜と見られる遺跡は土師器を使用した頃のものである。土師器は群馬県では四世紀の始め頃

から使用されていたようであるが、巨石の根もとから出土するのは六世紀頃のもので、中には石製模造品も伴っている。川を祀ったと見られるものも、山を祀ったと考えられるものも、大体、この六世紀頃からの土師器を出してい。『魏志倭人伝』には、倭國には神を祀る習慣があったと見られるように記してあるが、それは三世紀の頃で、その頃は、この地帯は弥生文化の末期にあたる。『宋書夷辰伝』の倭国王武の上表文には、「東、毛人を征すること五十五国」とあって、この地方は五世紀（宋の順帝の昇明二年—西暦四七八年）には毛人國のうちに数えられていたものである。けれども、群馬県の地には四世紀後半にはすでに大古墳が造られており、五世紀には古墳文化が盛行していた。祭祀も一段と発展していくことであろう。

第二節 新田の地から見た赤城山

一 石田川式土器出土地と大古墳の分布

土師器や古墳はその地の居住者が造ったものである。群馬県では、前橋市後閑町の天神山古墳や、同市朝倉町の朝倉第Ⅱ号古墳は、四世紀後半にはすでに造られていたものであり、それより以前に土師器の最古の型である石田川式土器が存在していた。この土器が使用されている期間に、浅間山が噴火し、その噴出、降下、堆積の浮石層の上下からこの土器が発見されている。その浮石層は樽式土器使用の住居跡を腕底型に埋めて、厚さ約一〇センチの層となつており、また、その層が平らに堆積している直上に、右の両古墳が築かれていたのである。



太田市から赤城山へかけての地域

し、その代りに脚台付甕型土器がある。甕は蒸し器であるから米を蒸して食したものであろうが、脚台付甕型土器は米を煮たものと考えられる。蒸した強飯ではなくて「かゆ」である。「かゆ」という文字は粥及び糀であるが、粥は米を甕にいれた形、糀はその甕を湯をわかす鬲の上にのせた形である。したがつて粥は「かゆ」、糀は強飯を指すことになろう。ところが樽式土器には甕があつて、群馬郡倉淵村の水沼遺跡や高崎市の劍崎遺跡から出土しているのであ

石田川式土器は四世紀前半には存在していたと見られる。実は浅間山の噴火がいつであるかはつきりしないので、土師器や古墳の形式上の編年から追いあげて、弥生土器の推定年代でとめてみると、四世紀前半に置くことが妥当と思われる。この石田川式土器の組合せには、甕が見出されていない。無かつたものと考えざるを得ない。しか

る。

石田川式土器は群馬県では平坦部のみに分布している。それに反して樽式土器は山間部に多く、石田川式土器の分佈圏内からはほとんど出土していない。石田川式土器が特に多く分布しているのは川の合流点付近で、その地域には遊水池がある。遊水池は春に増水し、秋に減水し、その増減による自然灌漑が推定される。初期稻作の適地と考えられよう。樽式土器が山間部の寒冷地で、稻作不適地と見られる地に出土するとの対照的である。それであるのに、樽式土器には櫛が伴い、石田川式土器にはそれが欠けている。櫛は石田川系の土器を除いて、それ以後の土師器にはずっと伴出しているものである。

この石田川式土器の分布圏内には、古い大古墳の分布、或は密集地にあたっている。中には石田川式土器使用住居跡が埋没した上に、古い大古墳が造られている例さえあった。その古い大古墳の最も密集していたところは、太田市であり、もとの新田郡の東南部一帯である。そのほか、伊勢崎市の北部、前橋市の東南部、高崎市の東南部等である。これらのうち、太田市高林の朝子塚古墳は前橋天神山古墳につぐ古い前方後円墳であり、同市内ヶ島の天神山古墳は東日本最大のもので、五世紀頃のものと考えられている。

古墳文化が入ってきて、群馬県では急激に大古墳が造られたと見られるのであるから、これを從来からの居住者が為しとげたとしたならば、そこには古墳文化を受け容れる準備ができていたのであろうし、強大な社会集団があり、これを統率する大豪族が居つたことになろう。しかし、古墳文化以前は、石田川式の土師器の文化がはじまっていたとは言え、それが強大な富を蓄えるまでにいたついたかどうかは知ることができない。よしんばそうであったとしても、石田川式土器文化の前は、群馬県の平坦部は弥生人によつて利用されていたようには見えない。むしろ、縄文人が点々といたくらいで、その大部分は河川や湖沼や荒地などがつづいていたように思われる。そこへ石田川式土器

をもつた人々が入って開拓したものであろう。

石田川式土器文化や古墳文化は、近畿地方から移ってきて、この地で大発展したものと考えられる。この人々がまず定着して、遊水地の周囲に大量の耕作をはじめた。弥生人よりも耕作技術が進んでいたものであろう。群馬県で実際に耕作をはじめたと見られるのはこの人々である。この石田川式土器文化を追うように、古墳文化が入って、巨大な古墳を造り出した。もっとも、石田川式土器使用の人々も、墳丘のない小形の石塔を地下に造っていた。高崎市倉賀野町の大応寺古墳、太田市牛沢の小谷場小古墳のように、死屍一体を置いて石を寄せ組みにしたもの、骨にして集めて容れたと思われるような小さなものであるが、その石塔の造り方は丁重で、周囲は白色粘土できれいに包んであった。地層から見ても、石田川式土器分布の地層面から掘り下げて造られている。それ故、古墳文化は石田川式土器文化と一緒に来たものとも言えるであろう。やがて巨大な古墳の築造がはじまるのである。

人々が土地に定着し、村落を形成するようになると、同族の集団はやがて共通の崇拜の対象をもつたことである。ことに農業にとっては灌漑用の水の多少が生活を左右する。雷電・降雨が時に順う時は豊作であり、同時に落雷の被害は恐怖である。「いかづち」がまず崇拜の対象になったものではあるまい。また、近畿地方からの移住者を統率して豪族が移ってきたものであるならば、故地の神をもつてきたものもあるであろう。『日本書紀』には、天孫が高天原から神靈みわらわを受けてきたとあり、このような現象を反映したものと見ることができよう。更に、移住者は従来の居住者たちのまつていた神を祀ったことも考えられよう。しかし、いずれにしても、群馬県で発見されている祭祀遺跡は六世紀頃以降のもので、五世紀には東国最大の古墳ができるてもその頃の神を祀った遺跡はまだ見当らない。恐らく雷雲の起る尖峯が、固定した位置において當時崇拜の対象となり、水源として山が崇拜されるようになつたのであろう。

一一 「まつり」—祀・祭

「まつり」という言葉にあてられた漢字が二種ある。その一是「祀」という文字で、神をまつることを意味し、その二是「祭」という文字で、死者をまつることを意味している。それが大陸文化の受容にあたり、単純な日本の言葉では、複雑に分化した中国の習慣・思想をあらわす文字には対応できず、混乱して使用されてきている。

(1) 祀

『日本書紀』の崇神天皇の条（以下崇神紀という、他もこれに従う）に、大彦と彦國・葦とを遣わして山城の埴安彦を討つ時に、「忌荒を以て和珥の武錆坂の上に鎮坐う」とある。「鎮坐」という言葉が使つてあり、これは荒を直接祀つたもので、荒の威力で外敵を防ごうとしたものである。すなわち、「みかづち」を祀つたもので、即物的な「ち」の祀である。『古事記』にも、「針間の氷川のさきに忌荒をすえて、針間を道の口と為して、吉備国をことむけやわしたまひき」とあって、吉備国を平定したことなどを記している。共に記事ののっている卷の時代にあつたことと、いう訳ではなく、伝えられていた習慣を利用して記事をつくつたものであろうが、少なくとも、「ち」を祀つた例証として考えられよう。これが『播磨風土記』になると、その斐坂の条に、「昔丹波と播磨との国を境する時、大荒を此の坂の上に埋めて、以て国境と為す、故に斐坂と曰う」とあり、更にこの坂を境にして、「自今以後、更に此の界を入れることを得ず」と禁制的な話も加えられてるので、境界の意味ばかりでなく、從来の防禦の意味も含まれている。

『神代紀』下の巻に、「天津神籬及び天津磐境を起し樹つ」ということが見えている。神籬と磐境とは神を祀るためのものである。神籬にはこのほかに、磯堅城神籬と熊神籬というのがある。磯堅城神籬は大和磯城地方に伝えられた

神難と考えられるし、熊神難は出石地方のものである。また、熊神難は出石族の祖天日槍が新羅から持参したものと伝えられている。これらに對して、所謂天孫民族と考えた人々に伝えられたものを天津神難と称し、高天原から授けられてきたものとしたのである。天津神難と熊神難とは他から持つて来たものという意識で扱われている。それら三者の間では多少の差があったものと考えられるが、いずれも、各形式が成立していたのである。

天津神難

『神武紀』に、「丹生の川上の五百箇の真坂樹をねこじにして、以て諸神を祭いたまう」とあって、樹を根ごとこぎとつてきて、神を祀ったことが見えている。これは樹を植え立てて、それを中心に神を祀ったことを示しており、当初は樹が神の本体であると考えたものであろうが、この文面では樹をたてて諸神をまつたのであり、木と神とは分離して考えられているようである。

木の神は、『古事記』には「久々能智—くくのち」、『日本書紀』には「木祖句句迺馳—くくのち」とある。「木々のち」から変化したもので、「の」が助辞として使つてある。「くく」と言葉が重複していることと、「の」が用いてあることから見て、「はつち」や「ぬつち」よりも後に成立した言葉である。はじめは木を「ち」として祀つたものである。しかし、木を立てて神を祀ることは、木と神とが分離して考えられてきたのであり、木を祀ることから一步発展したことを示すものである。

木を祀ることと、木を立てて神を祀ることは、神という考え方が変化してきているのであって、この変化に「ち」から「み」への変化があつたと認められよう。この後者の場合は、木は神の憑物と見られるのであり、これを「よりまし」と言つてゐる。こういう考え方から発展して、樹に和幣をかけ、上枝に玉を、下枝に劍をかけて、人の形を表し、神を象徴したものを作りあげたと考えられる。やがてこれに鏡が加えられた。天津神難とは樹に白和幣、

青和幣をかけ、上枝に玉、中枝に鏡、下枝に劍をかけたものを指しているのである。

神を植え立てるためには、まず、場が求められたであろう。とくに神を祀るために清浄な場所が選定されたであろうし、場所を定めるためには、一定の範囲を占める必要が起り、その境界を区切り、更に清浄を保つために防備を施したものであろう。地を占めるためにはその地域を標示して、他の人の侵入することを禁じたものである。『万葉集』には「標結ふ—しめゆう」という言葉が出ている。草を結びまわして、その内を占有し、且つ侵入を禁じたことを意味している。このために張りめぐらした罠を「しめなわ」と称したものであろう。『古事記』の「尻久米罠（しりくめなわ）」を以て、その御後方にひきわたし、ここより内へな帰りいりましそ」とか、『日本書紀』の「端出之罠（しりくめなわ）」をひきわたし」とかの解釈は妥当とは考えられない。すなわち、清浄な場所を区切るためには、まず、「しめなわ」が張りめぐらされたものであろう。

土地を区切るために、線引きをし、石のある地帯では石を並べることが行なわれ易い。『日本書紀』に言う「磐境」とはこの類であろう。清浄の場を石を並べて区切つたものである。その形については説明したものがない。天津神籬の附属性的なものとして扱われていたものらしく、その名称から想像するにすぎない。福岡県の高良神社境内に神籬石と称する石廻い状の遺跡がある。この石廻いの中に神を祀ったとして起つた名称であろう。したがって神籬石は磐境であるという説もある。しかし、福岡県地方には、山頂を中心にして山腹に巨石、大石をめぐらした遺跡があり、城跡とされている。怡土城跡のようにはつきりしたものもある。

群馬県甘楽郡妙義町大字菅原には「川後石」という小字名があり、「こうごいし」とよび、現在天満宮が鎮座している。菅原、天満宮という名称は「天神」に関係したものであり、川後石を神籬石の宛字とすれば、「天神」は「天つ神」の転訛と考えられる。現存の「尾張国内神名帳」、「三河国神名帳」、「駿河国神名帳」には、神名の表示に「天神」

を附けたものが多く、「美濃國神名帳」、「播磨國內神名帳」にも見える。そのうちで、「駿河國神名帳」では天神と地祇とを区別して記載してある。この例からは「天神」は「天の神」を意味していることが明らかである。これからすれば、妙義町の菅原では、もと「天つ神」を祀っていたもので、これを祀る場として、「神籠石」があったことになろう。

この神と石の配列との組合せから、天津神籠及び天津磐境というものは考えられたもので、この神を祀る一形式が天皇の一族に伝えられていたものである。

磐境とは別に「いわくら」というものがあった。『古事記』には「天之石位」とあり、『日本書紀』には「天磐座」とある。神座を意味しているが、それは岩石であったとしている。これにあたるとされているのが、祭祀遺跡に見られる巨石である。群馬県でも、勢多宮城村赤城山中の櫛石^{くじいし}、桐生市広沢町賀茂神社飛地境内の平たい巨石、甘楽郡妙義町妙義神社境内の影向岩^{おうこういわ}などはこの例であろう。はじめは巨石そのものを「石つち」と考えたものであろうが、石から分離した神を意識するようになって、神の座として見たものであろう。これには「ひもろぎ」を立てるることはできない。巨石そのものが憑物^{よどもの}となっているのである。

熊神籠

熊神籠^{くまじゆら}というのは出石地方に伝えられたと紀記には記している。新羅の王子天日槍^{あひのりご}がもつてきただと伝えていて、明らかに天津神籠とは区別されている。熊神籠も神を祀るに使用されていたことは、天津神籠と同様であるが、異つていいのは、この神籠と一緒に伝えられ、神を祀るに使用された神宝がまずあげられる。『日本書紀』では、「羽太玉一箇、足高玉一箇、鶴鹿鹿赤玉一箇、出石刀一口、出石棒^ほ一枝、日鏡一面」と「熊神籠一具」併せて七物であり、その一説には「大刀」が加わって八種となっている。但馬国では神物としていた。このうち、「出石刀」が最も重要なものとされている。しかし、玉が三箇であり、刀、杵、鏡各一であることに注意されよう。

『古事記』では、「天の日矛^{アマノヒタツ}が持ち渡り来つる物は、玉津宝と云いて、珠^{トモル}二貫^{スル}、また、なみふる比礼^{ハマリ}、なみきる比礼^{ハマリ}、かぜふる比礼^{ハマリ}、かぜきる比礼^{ハマリ}、また、奥津鏡^{オツミヅカガラ}、辺津鏡^{ヘツミヅカガラ}、あわせて八種なり、八前^{ハシマサ}の大神也」とある。これは珠二連、比礼四種、鏡二面の八種である。玉と比礼と鏡とのとりあわせで、海に關係した名称をとっている。『日本書紀』の記事とはかなりの差がある。

出石の神宝に似たものに、「先代旧事本紀」の天瑞寶十種^{アマツシラヨシノタカラ}というのがある。藏都鏡一、辺都鏡一、八握劍一、死反玉一、足玉一、道反玉一、蛇比禮一、蜂比禮一、品物比禮一である。鏡二、劍一、玉四、比禮三となる。この神宝は、熊速日命^{カミツキヒルミコト}が天神御祖^{アメニシヌシ}から授けられたもので、大和の物部氏の伝承にのつていてある。『古事記』の出雲神話といわれる部分にも、蛇比禮、蜂比禮、貝公比禮が見えている。これらの神宝は玉と比禮とが特に目立つ。鏡が主体となつてゐるわけではなく、まして、鏡と劍と玉との三種から成立してゐるものではなく、八種乃至十種である。数が多く整理されていない。これらの神宝を以て神を祀るということになれば、台の上に置きならべたものであろうか。出石の熊神靈ではどう祀つたものであろう。櫛を立てないものとしたならば、巨石の上に置き並べたとも考えられよう。したがつて、これらの祀の形態は磐座によつたものではあるまいか。

磯堅城神籬

『崇神紀』に「是れより先、天照大神、倭大國魂^{アマツタツシマヒコ}」はしらの神を、並に天皇の大殿^{ミヤ}の内に祭る。然れども其の神の勢を畏れて、共に住みたまふに安からず、故れ天照大神を以て、豊原人姫命^{ヒメコト}に託まつりて、倭の笠穂邑^{カスホノヒカド}に祭りたまふ、仍て磯堅城神籬を立つ」とあって、磯堅城神籬は此の条に出でてゐるだけである。どのような形をしていたかはわからぬ。崇神天皇の都が大和の磯城^{シマシタ}にあつたので、その地方に伝えられていた神籬の一形式であつただろうと見るのみである。ただ、天照大神を祀（祭）るのに天津神籬を用いなかつたことは疑問である。

(2) 祭

「先代旧事本紀」の天神本紀の巻に「天神御祖詔して、天璽瑞宝十種を授けて謂う、瓢箪鏡一、辺都鏡一、八握劍一、生玉一、死反玉一、足玉一、道反玉一、蛇比礼一、蜂比礼一、品物比礼一是なり、天神御祖教えて詔して曰く、若し痛き處あらば、この十くさの宝をして、一二三四五六七八九十と謂いてふるへ、ゆらゆらとふるへ、かくの如く為さば死人も反生^{かきよみ}なん。是れ則ち謂うところの布壇^{ふだん}の言の本なり」とある。これは十種の神宝を振れば「死人反生」するということで、甦生を期待したもので、石上神宮に伝えられた神楽の「布壇の言」のはじめであると述べている。つまり、死に際してとった甦生への期待の動作が宗教的に形式化されたものである。これを「みたまぶり」と称している。「みたまぶり」とは魂をゆりうごかして、生にもどすという意味である。

「いきかえり」については、「仁德紀」に、菟道稚郎子が死んだ時に、兄の大鷦鷯尊^(仁德天皇)が難波からかけつけ、泣き叫んで髪をみだし、屍にまたがって、三度呼んだところ、死後三日目でありながら、「乃ち時に応えて活きたまい、自ら起て居ます」とある。生き返りを期待して、大声をあげて呼び、死屍をゆすぶり、また、死屍をとりまいているものも、大声で呼び、自分の体をはげしくゆすぶることもあったであろう。近親の死に際して、みもだえして泣き、その名を呼ぶことは今も変りない「神代紀」にも伊弉諾尊の死に際し、伊弉諾尊が「則ち頭邊に匍匐^{ふあく}い、脚邊に匍匐^{ふあく}いて、哭泣流涕^{なきだるまづ}たまう」とある。これらの記事は、一般に行われていたことであろうし、それによつて生き反つたとした例に、両紀にかけたものであろう。

この「反生」の期待と古墳の埋葬法からみると、古くは靈肉不分離と考えられていたと見られる。生は「動」の態容であり、死は「静」であった。動態から静態に移るのが死であり、静態になったものを動態にもどすのが反生である。もつとも、「死」という哲学上の考え方ではなくて、「まさかる」、「うす」という即物的な表現であり、「死」自体を

意味していない。それ故「死」はその中国の音「し」そのまで読まれている。「死」という意識がなくて、生けるまであり、これが埋葬後にも持ち越されて、墳墓の前で行なわれ、儀式化したものと考えられる。それがすでに七世紀には「みたまぶり」神事として伝えられていた。いつ成立したかわからないが、すでに神事になっていたのだから、かなり早くから存在していたものであろう。

『神代紀』の天稚彦の死の条に、「すなわち喪屋を造りて殯す」とある。「殯」という文字は死者を寢する意であり、死者をもてなすのである。そのやり方は、持頬頭者、持帶者、春女、戸者、哭者、造縫者、穴人者等を定めて仕事を分担して行なうのである。儀式として成立しているものである。その中で、戸者というのがあるが、「死人に代りるものくらう人」、「死衣を着て弔を受ける人」、「死者を祭る者」などの解釈があるが、いずれにしても死者の代りをするものであろう。死者を祭る一形式である。この形式は「殯」という文字の意味をあらわしているのであり、「殯」の文字の伝来に伴つて来たものと考えられる。「もがり」は死に際して多くの人々が集ることを意味しているのであるまいか。

「葬」という文字の訓は「はぶる」である。「葬」は丁寧にはうむる意味の文字であるが、「はぶる」は放棄する意味の言葉である。「葬」の翻訳に「はぶる」を併せたが、その後は「葬」の漢字の意味にのみ使われている。「殯」も漢字の意味に解釈され、大陸風の儀式がとりいれられ、それを「もがり」と称していたものであろう。身分のあるものは住居から離れて喪屋を造り、殯の場をととのえ、儀式を行なつたものである。この際、反生を期待する動作が行な化され、殯にとりいれられて儀式化された。「みたまぶり」はこうして「もがり」の一行事となつたと考えられる。

「殯」とはその発生が異った意味をもつていて、

三 「まつり」の発展

「まつり」には、漢字の示すところでは祀と祭があり、両者を「まつり」の一言で表現しているので、「日本書紀」編集の頃には、その混乱が起っている。また、人の知恵の発展により、神の性格も発展する。したがって、「まつり」の内容も変ってくる。

『古事記』の天岩屋の条は、最も発展していた「まつり」を資料にして記述されたものであろう。それには祀の形式である天津神籬と祭の形式である「みたまふり」とがはいっている。天照大神に神と人との両性格を認めていたのであり、高天原の神々の最高神と皇室の祖先という両面を備えていることを示している。そのような考究方が起った後の記述である。ことに『古事記』のこの記述のうちに、天照大神の質問に答えて、天宇受命が「汝命に益りて貴き神坐すが故によろこびえらぐ」と述べ、鏡をさし出して、天照大神に見せたとある。神籬は神の憑物という考究から、神を人の姿に象徴したものに発展させ、更に鏡をかけて主祭者の顔をうつし、主祭者の「おや」を再現したものと見たのではなかろうか。この考え方は後世の松山鏡の説話に遺されているのであり、神籬の中枝に鏡をかけた所以も解し得られよう。このような意識によって、「汝命に益りて貴き神坐す」と、鏡を見せているのである。

また、同書には、「天宇受命天香山の天の日影をたすきにかけて、天の真折をかづらとして、天香山のささばを手草に結い天の石屋戸に汗氣伏せて踏みとどろこし」とあって、天宇受命が天石屋戸の前におけを伏せて、その上にのり足ぶみして音を立てて踊った様子を記している。天宇受命は媛女君の祖であり、媛女君は『先代旧事本紀』の天孫本紀によると、鎮祭の神樂をつかさどっていた家である。その神樂というのは同書の天神本紀と併せみると所謂「みたまふり」であり、反生を期待しているものである。

前述の「みたまふり」についての「布瓈の言」はすなわち「一二三四五六七八九十」ととなえて、十種の神宝をふるのであるが、このことは「先代旧事本紀」に出ており、その天神本紀と天孫本紀との二個所で解説が異っている。天神本紀では「死人反生」であり、天孫本紀では寿祚の祈請で、鎮魂の祭となっている。前者では「みたまふり」であり、後者では「みたましすめ」である。中国から「鎮花祭」の風習が伝わり、「みたまふり」に併せられて、遂に鎮魂となつたものであろう。且つ「みたまふり」神事は神樂と称するようになつた。「神樂」は神樂しみ給うものであり、仏前に見える伎楽と同じように考えられたものである。中国の文字及び風習が伝わり、それに併せて解説され、本来の意味を失つたものである。

古墳のうち古いものは、どれも堅穴式の内部構造をもつてゐるもので、大体、晋尺の尋を単位として設計されているようである。したがつて中国大陆の文化の影響を受けていることは言うまでもない。古墳というものは中国で発展していた。厚葬という手厚い、豪華な埋葬法によつたもので、死者を町重に扱つてゐる。漢では儒教を国政の指針として採用した。儒教の中心理念は「孝」である。したがつて、父母すなわち親の埋葬には厚葬を以つてあつたのである。古墳は「孝」の心を表現したものと見られよう。わが国では親の死に際しては生き反りが期待され、「みたまふり」が行なわれてきた。古墳が受け容れられると、その墓前においても行なわれるようになったと思われる。天岩戸前の記述は横穴式古墳の墓前で行なつた「祭」にヒントを得たものではなかろうか。すなわち墓前祭であろう。

群馬県で最も古い様相を備えている前橋市の天神山古墳と朝倉Ⅱ号古墳とは、墳頂面にぐるりと石田川式土器の壺が置き並べられていた。この壺或は甕を周囲に置き並べることは、「みかつち」の威力によつて外敵を防ぐことにあり、兼て埋葬場所をしめることがある。古墳に利用されたのである。奈良県桜井市の茶臼山古墳にも配列されていて、この壺の配列から埴輪円筒が発展したとされている。しかし、更に検討すれば、埴輪円筒は苔柴の束ねたのを象

微したもので、更からの変化とは思えない。蒼柴の東の上に甕をのせた形が朝顔型埴輪である。太田市の朝子塚古墳の墳頂には、埴輪円筒列とは離れて、埴輪円筒の上に石田川式土器をかたどった埴輪壺をのせて配置されていた。朝顔型埴輪の成立過程を示している。

渋川市東町古墳では、低い台状の方墳の墳丘の上下の周間に、四隅及びその各一边の中央に朝顔型埴輪一個宛を置き、それを親柱のようにして円筒埴輪が配列してあった。この配列状態は『古事記』の八俣遠呂知の条に出ている「垣を作り廻し、その垣に八つの門を作り、門毎に八つの佐受岐^{さけい}を結い、その佐受岐ごとに酒船^{さけふね}を置いて、船ごとにその八垣折りの酒を盛^{じょ}」^{シム}った状態と酷似している。埴輪円筒列は死屍を守るために、死屍安置の場所を区切るために置かれたもので、死屍を守るのには垣根も効果はあるが当初は要の威力によつたものであり、或は一般には柴垣が用いられていたものであろう。すなわち、壺の配列は物理的な垣根と観念的な壺の威力とで死屍を守つたものである。この埴輪円筒の配列は、主体部をぐるりととり巻くことに特殊性が見出せる。神籠石と、主体部をめぐり守るという発想については一致するものであろう。

四 古墳文化と水と「まつり」

太田市の金山の南方一帯は古くは低湿地であり、その周辺から南方の内陸砂丘台地にかけて、古い大古墳が多数連なっていた。東方に東国^{ひがしこく}の巨大な天神山古墳と、隣接する女体山古墳、西南の朝子塚^{あさこづか}古墳、西の別所茶臼山古墳は現存する著名なものであり、太田市東矢島、西矢島、高林にかけて、かつては數十基の大古墳が存在していた。これらの大古墳は戦時中中島飛行機製作所の拡張工事などによって大半消滅した。これらの古墳はほとんどが堅穴式古墳で、大体が五世紀以前のものと考えられている。この低湿地の周辺からはまた石田川式土器及びその系統の土器が出

土している。堅穴式の大古墳と石田川式土器との関連が考えられ、まず石田川式土器の文化の定着があり、この低湿地の農業への利用により、古墳文化の基礎が築かれたものであろう。

その地帯からは北方にまともに赤城山を仰ぐことができる。現在でも赤城山南面の東半に降った雨はこの地帯を湿しているわけであり、赤城山頂にかかる雷雲はたちまちこの地帯への降雨の源となる。古代においてもほぼ同様な現象であったのである。

赤城山はもと「くろほ」と言った。「万葉集」卷十四に、「^{上毛野久路}保の嶺くねのくずはがた、かなしけ兒らにいやさかりくも」とあって、「くろほ」の山といったのである。榛名山は「いかほ」と言った。「ほ」は「峯」である。「くろほ」は「黒峯」であろう。雷雲の起る峯を意味する。「上野国神名帳」の勢多郡の条の筆頭に、「於神明神」というのがあげられている。「おかみ」明神と訓まれるのであって、これは「くらおかみ」明神の略であり、雷雲を神格化して言ったのである。「いかほ」は巣峯（いかほ）であり、雷峯であろう。榛名山の最高峯相馬岳は雷雲の起る峯であり、尖峯であり、ここから起る雷は東南方向に流れ、旧国府地帯から旧那波郡（前橋市から伊勢崎市方面）に被害を与えていた。この峯は別名を「黒髮山」と言つた。雷雲を神格化した「くらおかみ」から転じて、「くろかみ」となったものである。



太田市金山から見た赤城山

「くろほ」という名称は、赤城山頂の黒檜岳に伝えられている。黒檜岳はその東北部に位置していて、大沼にのみ、最も雄大な峯である。ただし、山に近い南麓では他の峯にさえぎられて見えないが、旧佐位郡から旧新田郡（伊勢崎市から太田市）にいたると、赤城山の上に、特に高く望み得られ、夏には日毎に雷雲の発生するのが見られる。特に渡良瀬川流域からでは、この峯のみが一きわ高く聳え立っていて、赤城山を代表しているようである。雷雲の発生した時は、この峯自体が雷の本体のように思えるであろう。この渡良瀬川流域には雷に関連する神社が特に多く分布している。現代でもこの峯の雷は著名なものである。それ故、佐位、新田両郡地帯では赤城山を「くろほ」と称し、雷と山とを祀ったものであろう。

この古墳文化は水を求めて掘がつていったようである。勿論、古墳文化の基礎になる埴作りの伝播、言い換えれば埴作りに必要な灌漑用水を求めての掘がりになるであろう。太田市の西北の寺井の地から西に向って一直線に、小金井、上野井、市野井、平井などの地名が並んでいる。この地名は大間々扇状地の伏流水の湧出する湧水池によつたもので、この湧水が灌漑用水に利用されたことも考えられる。その附近には、遊水池周辺の諸大古墳よりやや遅れて造られた大古墳があり、鳥山の鶴山古墳などが著名である。この湧水池の水は、その地帯の南で集まつて石田川となつてゐるが、この石田川が利根川に合流する附近に石田川式土器が発見されたのであり、石田川の流路は赤城山頂の小沼から出ている柏川の旧流路にあたつてゐる。

右の湧水池の東西線の西端は伊勢崎市であるが、その北に隣接して、また、西へ一直線に井の地名がならんでいる。東から田部井、波志江（又は駒井）、鍛土井、筑井である。その線に沿うて、伊勢崎市の丸塚山古墳、御伊勢山古墳、前橋市の今井神社境内古墳などが並んでゐる。いずれも竪穴式の大古墳で、五世紀終りから六世紀前半頃までの築造である。

これらの二線の井の地名の南方にも堅穴式の大古墳は多少分布しているが、北方には僅かに赤堀村大字今井の茶臼山古墳のみがある。しかし、前掲諸古墳よりは小型ではあるが、それらに匹敵するのは次の横穴式古墳である。前者の線の東端には新田町二ツ山古墳、西端には佐波郡東村の下谷A号古墳があり、更に北には藏塚本町の西山古墳がある。西山古墳は新田郡での前方後円墳の最北の一であるが、古墳の分布もこの辺で終る。その西方一帯は地下水の低い大間々扇状地で耕田には不適の地である。後者の線の北は早川、柏川の流れを廻り、赤城山南麓地帯になるのであって、柏川の流域に洞山古墳、轟山古墳があり、更に上流に鏡手塚古墳がある。

藏塚の西山古墳は初期の横穴式石室をもつていて、この石室と同じ頃のものとして、赤堀村大字五日牛の洞山古墳同大字今井の轟山古墳、新里村大字鶴ヶ谷の天神山古墳、柏川村大字月田の鏡手塚古墳、前橋市勝沼町のオブ塚古墳などがあげられる。西山古墳が新田郡の古墳分布の北限に近いのと同じように、天神山、鏡手塚、オブ塚の各古墳は赤城山麓の前方後円墳としては北限であって、標高二〇〇メートル前後の地に東西に一線に並んでいる。これらの横穴式古墳はみな高麗尺を使用して設計されているものであって、六世紀後半以降のものである。そのうちの鏡手塚古墳ははつきりと榛名山の一峯二ツ岳の爆裂以前のものであり、その爆裂は西暦六〇〇年頃と推定されている。

西山古墳、洞山古墳、轟山古墳の所在地付近は、まだ平坦地の続きで、河水を利用して稻作を営なんだと思われるが、天神山、鏡手塚、オブ塚所在の位置では、当然流下する水を利用せざるを得ない地形である。段々に田圃を作り、次々に水を流下して灌漑したものである。耕田人口の増加につれて、水を求めて、河川に沿うて山腹に及んだと見べきである。

『崇神紀』、『垂仁紀』には河内、大和の国をはじめ、その他の地に多くの池溝を掘らしたとあり、『景行紀』、『応神紀』にも見えていた。これらの記事については、それらの天皇の代に造られたということは、その天皇の実在性と

か、時代の信憑性とかに疑問が多いのであるが、このような池が高い所に造られて、それから流下水を灌漑に使用するということは、その築造について、「応神紀」の韓人池のように外來人の力に負っているという伝承があることからしても、大陸文化の影響によつているものであることが考えられる。

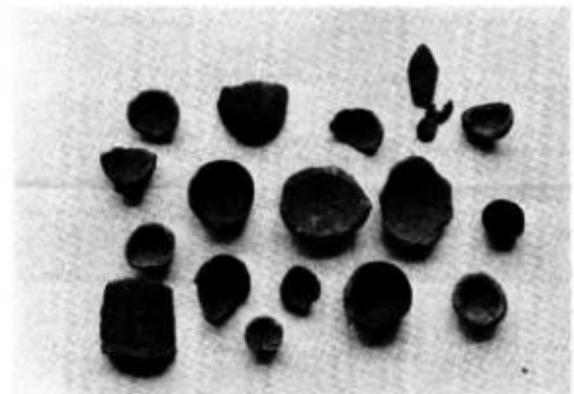
このような池の当初の形は「畠池」と称せられ、緩斜面の三方に土堤を築いて造つたものだそうである。次いで谷をせきとめて造つた現在のダム式のものである。共に高氷に造られ、水を流下せしめて、段々に田圃を作つて、容易に目的が達せられる。ことに赤城南麓の中央を流れ下る柏川の水を利用することは、その川の扇状地帯を全面的に耕田とすることが可能である。柏川は赤城山頂の小沼を水源とするもので、現在でも水旱のない川である。柏川の上流域の赤城山中腹の扇状地は、このようにして開田され、六世紀後半には鏡手塚などの横穴式の前方後円墳がその沿岸の中央部に築造されたのである。なお、石田川式土器は赤堀村及び前橋市どまりで、宮城村には発見されていない。標高二〇〇メートル前後以上の出土の土器は六世紀中頃以降のもののみである。横穴式古墳の早い頃のものがはじめてであり、土師器も石田川式土器は赤堀村、前橋市の旧荒砥村まで、宮城村には発見されていない。標高二〇〇メートル前後以上の土器の出土は六世紀中頃以降のもののみである。

柏川の旧流路の岸辺と考えられる柏川村大字中村からは、一箇所から大量の土器が献供の形で出土した。祭祀遺跡と推定されるもので、柏川の流れに臨んでるので、川の神を祀つたものと見られる。土器はいずれも六世紀頃のものである。その流路跡の上流の右岸にあたる地には現在近戸神社が鎮座し、その背後の左岸の台地には、その流路跡に沿うて、鏡手塚古墳を中心、長峯古墳、西塚、丸塚、薬師塚、壇塚等四〇基ほどの古墳が連つており、大字月田の北を斜めに横切つて、柏川を越えて、西北の宮城村大字馬場から苗ヶ島にまで到つてゐる。これらの古墳は六

世紀後半から七世紀までのものが多々、宮城村地区のものは七世紀後半のものと見られ、その白山古墳は八世紀初めのものと考えられる。白山古墳からは、和銅開珎が出土しており、藤手大刀その他の出土品と併せて、この古墳は八世紀前半には使用されていたものである。



標 石



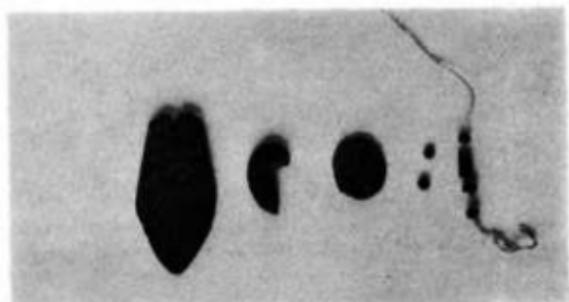
標石出土の土器

大字三夜沢の北方の尾根の頂には標石という祭祀遺跡がある。標高八七

七・九メートルの地で荒山の尖峯を近くに仰ぐところであると同時に、南方遙に秩父連山の上に富士山の頂部を望み得る。

ここには数個の巨石が散在しているが、その最大のものを標石と称し、その根方からは土師器、手捏り（たくじり）、石製模造品等が出土している。

土師器は前掲中村の遺跡出土のものと同様式であり、石製模造品は所謂剣型、円板型（鏡型）、小玉型のもので、滑石



櫛石出土の石製模造品



湯の沢から見た櫛石所在地附近

の粗製品である。この石製模造品の類は堅穴式古墳から出土しており、六世紀前半頃のものと思われる。このように、宮城村では土師器は六世纪中頃、古墳は七世纪頃に入ってきたものである。種作もその頃定着してきたものであろう。したがって神を祀ることもその頃の習慣で行なわれたとするのが妥当である。

櫛石は種作のための祀神の遺跡とは意味が異っているよう思える。土師器は種作と共に分布していると見られるのである、櫛石で神を祀ったことは事実であり、種作を主とした人々が祀ったことも否定できないが、柏川村大字中村の祭祀跡には、祀る対象の石などは見当らず、川辺と思われるところに土師器が並べてあり、川そのものを対象としたと見られる。水を求めるための祀りであろう。或は他の神を祀るための準備としての大忌神を祀ったとも考えられるが、他の神というのがはつきりしない。むしろ、即物的に川の神を祀ったと見る方がよからう。

同じ土器を使用した頃に蔽塚の西山古墳の所在する丘陵裾部の低台地では、流れを隔てて耕田地帯に臨む台地の凸角で、神を祀った跡が発見されている。土器のはかに子持勾玉が出土しているので、祭祀遺跡であると考えられ、現在はそのところに三島神社が鎮座している。三島神社の祭神は大山積神おおやまづかのかみであり、この神名をとったのは後代のことであらうが、そこから北方に赤城山を望む絶好の場所であり、これは赤城山の雷雲すなわち山そのものまでも含めた神を祀ったところと考えられよう。

この子持勾玉や石製模造品類は、柄につけた玉、鏡、劍から変死してきたものであらうが、玉、鏡、劍は柄につけ、神を人の姿に象徴したものであり、それを真似たとしても、石製模造品類は棒げものになつていて、幣物と称するものに変化している。一箇所から数多く出土するので、多くの人々が捧げたものとして考えられている。まつりに参加した人が多数であることで、特定人である首長一人ではないようにも思われる。しかし、教を重ねることが古代人の習慣であったとも言えるのであって、「日本書紀」にも八十平愛やそひらわいなど同一物を数多く用いたことが見えており、中村の遺跡にもその傾向がうかがえる。神を祀るための神室にも、同類を重ねて八種、十種にしたものがあり、玉、鏡、劍の三種で三箇という例は、出石、出雲、大和の地方では特例である。それ故に天津神籬、磯堅城神籬、熊神籬などの区別があつたものと見える。中でも一連の玉、一振の劍を棒につけることは、人間を模しているものであり、八種、十種の神宝は咒術の用具のそのまま伝えられたものであり、三種の神宝ははるかに洗練され、撰抜されたもので、神を人間的に表現する哲学を経たものである。鏡を三種の神宝に取りいれた発想も素朴なものであつたであらう。このとりいれについては人間的に象徴した段階よりも更に発展して、「おやー祖」の意味が加わってからのことと考えられる。

櫛石でのまつりは右の段階を経ない前の姿を伝えたものである。「石つち」のままではないであらう。巨石が神の

座として考えられてきたからのことであろう。つまり、石から離れた神の存在を考えてからのことである。八種乃至十種の神宝も比札の咒力や鏡の神祕力を、即物的から物を離れて考え出してきたものであって、神宝を神を祀る道具として取扱うようになってからのことである。巨石の上には碑は立てられないのであり、巨石の位置に面向いて、そこでまつりを行うのであり、神宝幣物ではなく、巨石を飾るものとして取扱われるようになってきたのである。このようにして祀られるようになった巨石を「磐座」^{いわくら}と称したものではあるまいか。神座と考えだしたものである。神に対する考え方かなり進歩してきたことを示している。

樅石はこの頃祀られただけで、その後祀られた形跡はない。現在、赤城神社の神跡として考えられているが、江戸時代の末頭までは注意された様子はない。復古神道が起つてみると磐座と見られたが、赤城神社の発生をここにかけた人はなかつたようである。その名称も古代の土器、滑石製模造品が出たので、宝物を納める唐櫃からとったものであろう。標高六〇〇メートルの地形変換線までは、土師器使用の人々が住んでいたので、その人々の首長がまつりの場を此処に求めたものであつて、磐座を以てまつりを行なう習慣をもつていたのである。

第三節 赤城神と上毛野君

一 地域の神と集団の神

前節では灌漑用水を主体として農業の神を考えたのであるが、そのうちの雷神にしても火神にしても、同時に恐怖から起つた神であったことも考えられる。しかし、これらの自然現象はその影響する地域に限られるものであつて、

地域々々によつて必ずしも一定していしたものではない。但し『続日本紀』の天平九年八月の条に、その諸国に在つて、能く風雨を起し、国家のため嘗て有る神未だ幣帛に預らざるは、ことごとく供幣の例に入れよとあるので、この能く風雨を起しといふのは農業に關係することを意味しており、それぞれの土地についたすなわちその地の住人がまつる神である。言うまでもなく、その地の住人とは農業に従事していたものであり、農業集団ではあるが、とくに地域性が強いので地域の神と考える。

『出雲風土記』の出雲郡の条には、「阿我多社」と「縣社」とが都合三社見えている。「あがた」というのは、「吾が田」という解釈をとるならば、個人所有の田ということになり、属的に地域の広さを示す最小の単位と見られよう。「あがたのやしろ」はその地域の社であり、そこに祀られている神は地域の神である。『常陸風土記』の行方郡の条には、「郡の東の國社は此れを縣神と号う」とあって、同じような地域の神と考えるものを見せていく。「くにつやしろ」というのは、「國社」と文字をあててゐるが、その「くに」という言葉は「あま」または「あめ」に対するもので、「天神地祇」という熟語から区別が起つたと考えられ、高天原からの神に対し土着の人々が從来から祀つていた神を指し、したがつて、「くに」とは地域を意味する。後世の國家とか律令制の國とかなどとは異つた意味である。但し、天神と地祇との区別は律令制にあってもはつきりしていない。例をあげてあるが、紀記の伝承とは合っていないものがあり、混乱している。強力な氏族の祀る神を天神としたからである。

これに対して農業以外の生産に従事した集団がある。特殊な職業であり、言わば手工業的な生産に従事したもので、生活のために土地を耕作したこともあつたであろうが、主に文化的な生産に従事していた。文化の発展により生活が複雑になり、特殊な生産が自給自足の体制から專業として分化独立していく。また、外来人により新文化の生産が伝來して、新職業が起つて来る。これらの人々は各職業によつて集団化したものと見られる。それらの集団を各職

業名を冠して「とも」とよび、「伴」又は「部」の文字をあてている。但し、「とも」の発生がどのくらい古い時代にさかのぼれるかははつきりしない。最も古い「とも」考えられる「物部」でも、「もののべ」とよんでおり、この言い方は「とも」に「部」という文字を宛て、これを「べ」とよみ、「もの」と「べ」とを「の」でつないでいる。せいぜいさかのぼって五世紀頃まではなかろうか。

この物部が祀っていた神は大和の石上神宮で、かつては經津主神を祭神としていたが、「ふつのみたまのつるぎ」を祀ったものとされている。物部というのは武器ことに刀劍を製作し、保管する職業に従事していた集団で、したがつて劍を祀っていたものである。この部族は早く群馬県にも来ており、「物部明神」を祀ったものであるが、その部族が分派して、石上部、磯部などが出て来ると、「布瑞明神」とか、「抜鉢明神」とかいう名称も起ってきた。いずれも、石上神宮をもとに祀られた神である。また、群馬県には土師部の祀った土師神社、倭文部の祀った倭文神社がある。みな職業集団が祀った神であり、その職業に従事する集団の性格を示しているもので、これを集団の神とするのである。

地域の神はその地域から出た支配者が祀るようになり、集団の神は同一職業集団の統率者が祀っている。「延喜式神名帳」に見える「吉備津彦神社」というのは、吉備の首長が祀っていた神の社であり、土地の支配者が祀っていた神である。同書に「宗我坐宗我郡比古神社」とか、「往古馬坐伊古麻郡比古神社」などはこの例である。また、「神代紀」にある「阿雲連らがいつきまつる神」というのは後者の例と見られる。

宗我坐宗我郡比古神社などが地域の神であるということについて、更に説明を加えて見よう。「延喜式神明帳」には、このほか当麻郡比古神社とか、許世郡比古命神社とかが載っている。この両者を見ると、後者には「命」という文字が加わっている。この「命」というのは『日本書紀』によると敬称であって、神名の本体ではない。『日本書

紀」は歴史書として編修されているので、人名は勿論神名にも「みこと」という敬称をつけ、天皇及びその尊属には「尊」、その他には「命」という文字を用いている。『古事記』では『日本書紀』と同一人名には「命」を用い、神名には「神」をついている。したがって、「命」も「神」も共通して用いられていて、「神」も敬称と見られ、神名の本体ではない。

同書に鴨都波八重事代主命神社^{（なづはやまとわじゆうじだぬめいじんじゃ）}というのがあり、この「八重事代命」というのは、『古事記』の「八重事代主神」、『日本書紀』の「事代主神」と同神である。これからすると「鴨都波八重事代主神社」となる。「事代主」が神名であり、それに敬称をつけて、「神社」をついたものと見られよう。それならば当麻都比古神社は神名に直接「神社」をつけたものであろうか。しかし、紀記共に神名には「神」の敬称をついている。『神名帳』が作られた当初の頃には、紀記と同様に、神名に「神」をつけるのが習慣であったのであろう。

当麻都比古神社は右によつて「当麻都比古神」の「社」であろう。往馬坐伊古麻都比古神社も、宗我坐宗我都比古神社も、往馬や宗我の地に鎮座する伊古麻都比古神、宗我都比古神の社ということになる。しかし、この「伊古麻」とか、「宗我」というのは地名である。同様に「当麻」も「許世」も地名である。伊古麻都比古や宗我都比古は地名と比古とを「つ」でつなげた言葉であつて、『日本書紀』の菟狹津彦、阿蘇津彦と同様な名称であり、後者がその地の首長であるように、地名と「ひこ」とを「つ」でつないだ名称は、その地の首長と見られる。吉備津彦も磯城津彦も同様であろうが、『日本書紀』では個人名としている。

「地名・つ・ひこ」がその地の首長を意味することは、その地の首長が代々その名称でよばれていたもので、個人名ではあり得ない。よしんば個人名として取扱われたにしても、実在人が神に祀られた例はない。事代主といふのは大国主、大物主、一言主などともに特定の神名と見られるが、伊古麻都比古、当麻都比古、宗我都比古、許世都比

古はそれ 자체は神名ではない。では神々には特定の神名があったものであろうか。「延喜式神名帳」には飛鳥坐神社、甘櫻坐神社^{かみゆずかみ}という表現のものがいくつもあり、往馬坐伊古麻都比古神社、宗我坐宗我都比古神社に比べて、神名の本体らしいものを全く欠いた名称である。これら飛鳥坐神、甘櫻坐神の社であることは言うまでもないが、志貴御縣坐神社と高市御縣神社との間で「坐」の有無によって差異があるわけではなかろう。したがって、平群神社は平群神の社であろう。

平群神社と併せて、平群坐紀氏神社^{へいぐんさつきわらわ}を注目する必要がある。平群坐紀氏神社は平群神社ではない。平群坐神社と単に表現できるのはむしろ平群神社であって、平群坐紀氏神社ではない。その上、紀氏神は神名ではなく、紀氏が祀っている神という意味である。「阿曇連らがいつきまつる神」と同類である。してみると、往馬坐伊古麻都比古神社、宗我坐宗我都比古神社は平群坐紀氏神社と同類として認められるであろう。つまり、往馬や宗我に鎮座する神で、往馬や宗我の首長が祀っていた神の社ということになろう。

このように、地域の神はその地の豪族に祀られるようになるのであるが、宗我坐宗我都比古神社はその地の豪族と見られる蘇我種目、馬子、蝦夷などの系統の蘇我氏と直接関係あつたか否かについては明らかではない。蘇我氏に直接祀られた神ではなく、むしろ、宗我都比古とよばれたかつての「そが」の地の支配者が祀っていたもので、武内宿祢の子孫といつてゐる蘇我氏は、宗我都比古という豪族が衰退した後に、「そが」の地に入つて支配し、その地名をとつて呼称としたものであろう。蘇我氏の祀った神社は明らかではなく、「皇極紀」によると、蘇我蝦夷は葛城の高宮の地に祖廟を建てたとある。蘇我氏が祖廟を建てたということは、まだ、祖先神という観念が成立していなかつたと見られるのであり、或は「そが」の地の神とは無縁のものであったことを示すものであろう。蘇我氏と同族と言わされている平群、巨勢の両氏も、平群神社、許世都比古命神社とは関係なかつたものであろう。ことに、許世都比古命

神社の許世都比古と巨勢氏とは無縁のものと見ねばならない。平群坐平群氏神社とか、巨勢坐巨勢氏神社とかなどの名は見えていない。みな、「神名帳」成立当時には存在していた氏族である。

宗我坐宗我都比古神社は、宗我都比古が祀っていた神の社である。吉備津彦神社も同様に考えられる。吉備津彦といふのは吉備地方を支配していた首長を意味する名である。その首長が祀っていた神の社を指す。吉備津彦が個人名として「日本書紀」にとりあげられているので、吉備津彦を祀った「神社」と解されるに到つた。吉備津彦には「命」をつけて呼ばれる事はあっても、「神」をつけた用例は見ない。宗我坐宗我都比古神社という表現は神社名の最も古い型の一つであろう。宗我の地を支配していた豪族が祀っていたものであり、吉備津彦神社もその例であり、肥後国阿蘇郡の項の「國造神社」^{くにのえやつじんじゃ}は端的にその意味をあらわしているのであり、國造が祀った神の社である。

一 豪族の神と支配者の神

「あがたのかみ」を祀っている地域集團がいくつか統一されると、統一者が祀っている神と、統一された個々の集團の神とは、同じ「あがたのかみ」でありながら区別されるようになる。統一者によつて祀られるからである。まづ、「あがたのかみ」には、他の「あがたのかみ」との区別が必要となつてくるので、地名が起つて、それが冠せられることは考えられよう。『出雲風土記』の条に、波多郷は波多都美命が天降つたところ、来島郷は伎自麻都美命が居つたところとあるが、「はたつみ」は「はたの神」、「きじまつみ」は「きじまの神」であり、地名をつけた地域の神である。

『延喜式神名帳』に「鴨都波八重事代主命神社」とあるが、別に『先代旧事本紀』に「鴨都味齒八重事代主命神社」とも伝えられている。「かもつはやえことしろぬし」よりも「かもつみはやえことしろぬし」の方が穏当と思わ

れる。「かもつみ」は「鴨（地名）の神」であり、その神の名は「八重事代主」というのであって、「鴨都味」と「八重事代主」の間の「波」、「歯」は「てにをは」の「は」であり、祝詞の文句がそのまま社名となつたものであろう。「宗我坐宗我都比古神社」とはその名の発生がおのずから異なる。

「鴨都波八重事代主命神社」というのは、「かもつみ」を祀つていたものが、具体的な神の名が必要とされる傾向になつて、八重事代主命と名づけられたものであろう。神の名が必要となつたのは、その神を祀るもののが豪族として他の豪族との交渉上起るものであろう。大和の葛城地方には、葛木坐一言主神社、鴨都波八重事代主命神社、当麻都比古神社があげられる。葛木、鴨、当麻は地名であつて、右の社はそれぞれの神が祀られているのであるが、それらの地はその広さが異つており、葛城は「延喜式」の葛上郡^{くわのうぐん}、葛下郡^{くわのしぐん}、忍海郡^{しのみぐん}にわたつており、また、葛上郡に巨勢山口^{こぜのやまぐち}神社、高市郡に巨勢山坐石椋孫^{こぜのやまにわいのくに}孫神社、許世都比古命神社があるので、巨勢にもかかっていたようである。鴨や当麻、巨勢は葛城の中にある地域を指したものであろうが、「かもつみ」、「たいまつひこのかみ」、「こせつひこのみことのかみ」と比較すると、「八重事代主命」の名はそれらのものよりも後に成立したものと見られる。葛木坐一言主神社の「一言主」は「事代主」と发生について関係があるのでなかろうか。この「一言主」、「事代主」という神名は単に地域の名の神ではあきたらなくなつて、その神を祀るものがつけたものであろう。それが返つて、「こせつひこの」が祀つていた神というのを、「こせつひこの」という神という意味に変化せしめたものと考えられる。

葛城の地方を例にあげて見たが、歴史が古くから知られている地域では、神を祀るもののが興亡^{こうおう}、交替があり、小地域に分れたり、それらを統合したりして、多くの変遷を経てきたものであり、その間に祀られた神の社が遺つてきたものである。これらは一度に発生して、それが長く並行して存続してきたものではない。神社のあり方は祀るもののが勢力によって左右されるものである。社勢はこれを祀る豪族の権勢によって変化する。鴨都波八重事代主命神社は一

地域の神から豪族によって祀られた神となつたものであろう。更に葛木坐一言主神社は葛城全城に勢力をもつた豪族によつて祀られたものではなかろうか。

ところで、『日本書紀』には、天皇が神宝をとりあげて、支配権を回収したことを記している。『崇神紀』の出雲の服属、『垂仁紀』の出石の服属などである。神宝は祭祀を行うのに必要なものである。出雲では神宝がとりあげられたことによつて祭祀が行なわれず、民衆が動搖した。祭祀が行なわれないことは、支配を行うことができないことに直結する。統一者である豪族は、祭祀を行ない、神意をうかがつて支配したのである。豪族の神であつても地域の神の発展にはかならない。

『崇神紀』の大和の大神神社を大田根子に祀らしめられたのも、神宝の件には触れてはいないが、神の嫡統といわれる大田根子を探し出して、祭祀を復活せしめたので、疫病がやみ、国内が鎮ったとあり、これも支配権をとりあげたことにより、祭祀が絶え、動搖が起つたので、旧支配者の子孫に祭祀を復活せしめたことになる。すなわち、支配者は祭祀権と宗主権をもつており、それが合したもののが支配権であったということになろう。天皇は支配権をとりあげたが、祭祀のみは復活せしめて、平定を計つたものである。『景行紀』の周芳の安磨の神夏穂姬、『仲哀紀』の幽県主の祖熊鷹、筑紫の伊穂縣主の祖五十速手などの降伏の様子は、いずれも神宝を提出しているのであり、その神宝提出は降伏をあらわしたもので支配権をさし出したことを示している。

これは神宝が支配権の象徴とされてからできた物語である。それらの天皇の時代にすでにあつたというわけではあるまいが、支配権を回収するために、一度はその象徴である神宝をとりあげ、これを返還して、從来の地位を認めて、その地域の支配を継続せしめたことを意味している。勿論、こうして天皇は總支配権を握つたのである。この形は『神祇令』及び『延喜式』にあらわれており、令制下の各氏族の氏神祭に遺つていて。

つまり、統一者は地域ごとの支配者を統一することによって、その統一された支配者の祭祀権を回収したのである。そのはじめは一家の祀る神がその一家の発展に伴い、同族集団の神となつたものもあるし、地域集団の神となつたものもある。他からの侵入者の神が地域に持ち込まれたものもあるし、在来の神を併せ祀ったものもある。集団意識が強固になると、同族集団の祀る神も、地域集団の祀る神も、集団の神としての意識が高まってゆく。それが国司によつて祀られ、更に国家の祀りを供幣によつて表現されるに至るのである。

三 豪族上毛野君と「新田」の地

赤城神も土地の豪族が祀つたものにちがいない。上野国随一の赤城神を祀つた豪族ということになると、上野国すなわち上毛野国、上毛野地方の支配者という意味の姓（かばね）をもつ上毛野君という豪族にあてざるを得ない。

上毛野君といふのは、天武天皇十三年甲申（六八四）に制定の八色の姓のうちの第二の朝臣を賜つたもので、その一族は天平勝宝元年（七四九）には勢多郡の郡司（少領）であったことが知られている。上毛野君の祖先は崇神天皇の皇子豊城命であり、その孫彦狭島王の子御諸別王が東國を平定し、その子孫が東国に繁栄していると、「日本書紀」には伝えている。また、荒田別といふのも上毛野君の祖としてあげられ、その子に竹葉瀬、田道という兄弟があつたことも見える。これらは仁德天皇代までの事となつており、その後、安閑天皇代の上毛野君小熊までは上毛野君については全く記されていない。小熊になつてはじめて上毛野君小熊と記してあるのであって、仁德天皇代以前の人名の上には、上毛野君の始祖、遠祖、祖と附記してある。取扱い方が全く違つてゐる。

上毛野君といふのは、「先代旧事本紀」の中の国造本紀の下毛野国造の条によると、もと毛野国が上下に分れたと記してある。それが後に大宝律令の制定にあたつて、上野、下野となつたものである。恐らく和銅六年五月甲子の

条に郡郷名に好字を用いることに定められそれを二字にすることになっていたように、それ以前に国名も二字にされたと考えられる。すると「毛」がぬけたのであり、「毛」は「毛人—えみし」に用いられて、好字ではないと考えられていた結果であろう。そこで「毛野」というのは毛人の住している地方の意味であったのである。「常陸風土記」によると、常陸国の西南の境あたりに「毛野河」というのが流れているとある。「毛野」の名がつけられているのであって、毛野の地方を流れていたものであろう。また、同書には筑波国をもと「紀國」と称したとある。毛野河はまた紀国の境を流れていたことになる。「毛」と「紀」との間には関係が考えられるのではないか。

「毛野河」は毛野地方を流れているので名づけられたものであろう。この場合の毛野地方は下毛野国を流れる河に当るのであって、現在の鬼怒川であろう。鬼怒川の流域から西方碓氷嶺までは下毛野、上毛野両国の地であって、すなわち、「毛野国」である。「毛野河」が「鬼怒川」であるならば、「け」と「き」の音の混同ということから出たものであろう。関東平野の利根川以東の地では、現在でも「け」と「き」の発音上の区別がはつきりしない。五十音図の「い」列と「え」列の区別が明瞭でない。この地域の土俗の発音の訛りが、大和地方の或は大和地方からきた記録者の耳にどう受けとられたかを考えてみる必要がある。

上毛野君という氏族の伝承に、まず、豊城命は上毛野君、下毛野君の始祖とされている。豊城命の母は『古事記』では木国造荒河刀弁^{ハラカタヒメ}の女、「日本書紀」では紀伊国荒河戸畔^{ハラカタハタモ}の女となっている。いずれにしても「き」の国出身の女性の子ということである。下毛野国造は『国造本紀』に豊城命の四世の孫である奈良別が定陽されたがあるので、下毛野君が奈良別から始まっていると考えると、豊城命の孫が彦狭島王、彦狭島王の子が御諸別王であるとされているので、御諸別王の次の世代となる。この御諸別王は景行天皇の御代に東国に下つて、東国の經營と、蝦夷の平定とにあたり、その子孫は東国に繁栄していると『日本書紀』には特筆してある。その御諸別王という名は、崇神天皇の都が

磯城瑞辭宮^{しきのすいしのくに}であり、その磯城地方の崇敬の中心である大神^{おおみわ}神社の鎮座地が御諸山であって、この山名に關係があるようと思える。磯城の名は葛城と共に「き」に關係ある地方とも言われている。

これらのことからすると、豐城命の名も赤城神の名も、「き」に關係づけて作られたものであろうと考えられる。つまり、「き」を語幹として、豊、赤の美称を冠せたものにはかならない。これに類するものとしては、天城山、高木神などがあげられる。天城山は伊豆国賀茂郡にある山名で、賀茂という名は葛城地方の「かも」から出たものである。高木神は神話に高天原で天照大神と共に最高神として活躍しており、大和平野南部地方の氏族に關係ある神と考えられている。しかし、いずれも「き」を語幹にして、美称を冠したもので、その美称は六世紀から七世紀にかけての天皇の所謂和風の諱号といわれる名に特に著しく用いられている。その頃は系図作製及び史書編修の事業がはじめて行なわれてきた時であって、上毛野君及び下毛野君も祖名、崇敬神名を求めて、「き」に豊、赤を附して成立せしめたものであろう。してみると、その頃上毛野君一族は「き」との關係を深く意識していたものであろう。

上毛野君を直接人名に冠せて、史上にあらわれた最初の人物は安閑天皇元年(五三四)上毛野君小熊である。小熊は武藏国造笠原直の使主^{使主}及び小杵^{小杵}両人の国造争奪に捲き込まれて敗北した。笠原直は『倭名類聚録』の武藏国埼玉郡笠原郷の地に居たものと考えられ、現在の鴻巣駅の東方数軒の地である。武藏国は宝龜二年(七七一)に東山道から東海道に転属した。律令政治の当初はその国府は笠原郷附近に置かれたものではなかろうか。それ故、東山道に属したものであろう。鴻巣の地名も千葉県市川市の国府台(鴻之台)、神奈川県小田原市の国府津の地名に見られるよう、国府の洲であったと見られる。その地は荒川に近く、また、利根川の偏流或は分流による中洲を想像させる地である。やがて、武藏国府は府中市の地に移り、したがって、相模国府(旧海老名村)に近いので、東海道に属さしめられたものと考えられる。笠原の地は群馬県の堅穴式の大古墳の密集地である太田市に近く、『続日本紀』に東山道から

は新田駅で分れて邑楽郡衙及び五箇駅を経て武藏国府に到るとあるので、笠原と太田との関係が特に注目される。

上毛野君はこの笠原直家の内訌に關係して失敗するまでは、太田市附近に居住していたものではなかろうか。その頃までは或は「毛野君」であったかも知れない。太田市及びその附近で横穴式の大古墳はその西方隅に二ツ山古墳の一基が存在するのみで、その他の大古墳はほとんど五世紀頃の堅穴式古墳のみと見られている。その上、上毛野君の祖といわれる荒田別の名は新田の地名から考えられたものと見られる。『倭名類聚鈔』の新田郡の郷名に新田郷というのがあるが、他の郷名は現存の地名からほぼその位置が推定できるのにもかかわらず、新田郷はある地名が見当らない。ところが、古代の終り頃から「世良田」という地名が文書にあらわれており、その地には堅穴式と見られる大古墳も存在している。「世良田」の「世」は「あらた」の「安」の草体に似ている。「新田」は「あらた」と訓まれていたものであろう。その地名から「荒田別」の名が考えられたものではなかろうか。

また、「仁徳紀」にある荒田別の子竹葉瀬(たけはせ)は、太田市の大字名高林に關係あるようにも見える。御諸別の父彦狹島は狹島(さしま)が語幹であるので、鬼怒川の右岸の猿島の地に關係づけられそうでもある。祖先の名を求めるることは、祖という意識と系団を作るという要求とによって、次第にできあがっていくのであり、最初に荒田別が求められ、次に豊城ができたのではなかろうか。「別」というのは、『景行紀』では天皇の王子を諸國に分封して別名としたように記してある。しかし、「別」と「分」とは共に「わけ」と訓んでいるが、分別して考へなければならない。「分」は幹から枝を指して言うのであり、「別」は幹を二つに割いた場合に相互を言う言葉である。したがって、「分」は天皇の家から分家したもの、「別」は日本の國が統一された後から、日本國を一体と見た場合、統一前の個々独立の氏族を指したものであろう。つまり、「分」とは血族的であり、「別」とは非血族的で別個の存在であったことを示す文字と考えられる。この「別」には地名が冠せられている。その地名の土地を支配していた首長を指したものであ

ろう。

群馬県では新火山が多く、西の県境の浅間山は活火山であり、噴出物を噴火のたび毎に東方の地帯に堆積させてい。榛名山もその一峯二ヶ岳は七世紀の初頭に爆裂したことが推定されてきている。この二ヶ岳の爆裂には多量の浮石を噴出して、その東北方地帯に厚く堆積させているが、同時に浮石質で紡錘状の石を噴出し、これが利根川に流され、その沿岸に漂着して、この石で横穴式石室の壁を積みあげているものが非常に多い。この石の使用範囲は利根川の流れを中心にして、左右の沿岸一〇〇メートル以内に多く、遠くとも一キロメートルを越えるものは稀である。埼玉県の本庄、熊谷、鴻巣、千葉県の野田あたりにまで及んでいて、下流は小形で、上流にのぼるにしたがって大形のものがあり、渋川市より上流には認められない。

この石で造った横穴式古墳の石室が、境町、新田町、尾島町などの現在の利根川の流れから離れた土地に東西にわたくつ帶状に発見されている。その帶状の地帯を西北に延張すると、現在の桃木川の流域になり、その両岸の崖上には同種の石室が密集して渋川市附近まで連なっている。利根川は此の地帯を西北から東南へかけて袈裟がけに流れたことがあり、その際、この石を運んだものと推定される。境町、新田町、尾島町では利根川が流れたと考えられる地帯は、丁度、東武電鉄伊勢崎線の左右沿線で、最近まで、幅広い長い水田地帯になつておつたのであり、まだ、その痕跡は充分認められる。この二ヶ岳の爆裂は七世紀初頭であり、一時、その爆裂に伴う洪水により、この地帯に利根川の流れが通つたものにちがいない。水が減ると共に、その地帯の開田がはじまつたのではなかろうか。すなわち、「あらた」の出現になつたのである。

その地帯は殊に広大な水田地帯となり、「あらた」とよばれ、七世紀終りには「新田郷」の設置となり、郡名も「新田」をつけるようになつた。その水田地帯の両岸の低台地には七世紀の古墳が夥しく存在していた。新田郡隨一の穀

倉地帯になっていたものであろう。しかし、この新田郡に最初に郡司になったものの名がはっきりしていない。ようやく、八世紀の中頃の天平勝宝四年（七五一）の銘のある正倉院の屏風の袋布に、「上野国新田郡攝少領无位池田市部足人」という名が見える。その頃に池田市部足人が郡司の候補者にされていて、郡司の仕事を執行していた。大化改新以前からの豪族が恐らく居らなくなつて、無位で、市部という身分の余り高くなつた人が郡司に任命されているのである。後には、十二世紀の中頃に新田義重によって新田庄というのができるが、その中心は世良田であり、「太平記」には富有の地であると記している土地である。

上毛野君小熊が等原直の家の内訌に因縁して破れてからは、それを六世紀前半のこととする、それ以後は太田市を含めた新田郡の地には横穴式の大古墳が存在していない。太田市の西北方新田町の東北部に二ツ山古墳がわずか二基存在するのみである。上毛野君の大豪族の墳墓としてはふさわしくない。ところが、現前橋市の東端大室地域には横穴式の巨大な古墳が三基も連つており、附近には大小の古墳が無数に存在していた。他にはこのような地帯はない。六世紀後半からの上毛野国の政治、文化の中心はこの地域と考えられる。その上、八世紀中頃の天平勝宝元年（七四九）には勢多郡の郡司として上毛野朝臣足人の名が見えていた。大室地域は旧勢多郡の中心であり、赤城山南麓地帯の中心であった。なお、柏川にも近い。その柏川は、江戸時代の地図では東武伊勢崎線の沿線を通って尾島の東で利根川に合しているのであり、大室の東方と、世良田の東北には共に柏川の旧流路を隔てて「柏川」という地名が残っている。上毛野君は太田市から前橋市東部に移動したものではなかろうか。

太田市も含めた旧新田郡には古名社がはつきりしない。「延喜式神名帳」に記載されている上野国の神社は十二社、六国史に記されているもので、神名帳に漏れているもの六社である。その郡別の数は、「延喜式」の郡名によると、片岡郡一、甘楽郡五、群馬郡四、吾妻郡一、利根郡一、勢多郡一、山田郡二、那波郡二、佐位郡一である。碓氷、多胡、綠

野、新田、邑楽の五郡には存在していないよう見える。これらは八世紀の初頭に摺って神名帳に登録されたものではなく、また、「続日本紀」に記載されているものでもない。九、十世紀にわたってその名があらわれているものである。それ故、必ずしも七世紀以前の神社の存在、これを祀る豪族の権勢のあり方を示すものとは言えない。けれども、八、九世紀頃に国司を通じて朝廷との交渉の厚かった豪族の祀る神であったことには誤りなかろう。

碓氷郡の豪族石上龍君^{いのしたのりゆき}君^{くん}或はその部族の物部は、甘楽郡の抜鉢神との関係が考えられている。これは国史現在社である。多胡郡の外来人は式内の大社貫前神社を祀ったものであろうが、多胡郡には別に韓級^{かんき}（辛科）神社を祀っている。『上野國神名帳』にあり、また多胡郡總鎮守といわれている。緑野郡には土師神社があり、同帳の緑野郡の頁の筆頭にあげられている。土師郡の部族が祀ったものである。邑樂郡には同帳に長柄^{ながね}神社がある。これも長柄の部族の祀ったものであろう。これらは式内社でもなく、国史現在社でもないが、それぞれの部族によつて祀られていたものである。新田郡にも同帳に生階^{いのへ}（生品）神社が記載されているが、中世に新田義貞が同社の境内で鎌倉幕府討伐の旗挙げをしたと、『太平記』に見えているのみで、その社伝もはつきりしていない。新田郡には強力な豪族なり、国司を通じて朝廷と関係づけるような神社もなかつたようである。

六世紀頃ではまだ「社」の形態をとついたとは言えない。恐らく、祀神の場は神龜による斎場が設けられたものである。この斎場は多くは一時的のものであり、中にはすでに常設の斎場を定め、神庫を附設したものがあつたとも考えられる。新田郡では、古墳群地帯の北辺にあたる蘇塚本町の三島神社境内に、その頃の祭祀遺跡が発見されることを知るだけである。金山の頂なども想像されるであろうが、この山の尾根の頂には各所に古墳が存在し、新田神社、高山神社、大島八幡宮の鎮座地は皆古墳であり、古墳が嘗て存在していた。北金井の御嶽神社の位置も古墳である。したがつて、そのようなところに祀神の跡があり得よう筈がない。

上毛野君が住んでいたところはまだわかつてはいない。古い大古墳があるところは、朝子塚が高林、茶臼山が別所、天神山及び女体山が内ヶ島、その他大古墳の集中していたのが東矢島である。それらの近くであろうといふだけで、確固とした遺跡をおさえているわけではなく、また、そのような場所をおさえることは不可能に近い。これらの場所は低湿地帯の周辺であり、高林、矢島にかけては内陸砂丘地である。これらの地内に上毛野君の当初の住所を求めるることは妥当であろう。これらの地から早くも五世紀の終りには西北方へと発展しているのであり、鳥山の鶴山古墳、伊勢崎市豊城町の丸塚山古墳などによつて知ることができよう。

六世紀後半と推定される横穴式古墳は、赤城山南麓地帯の標高二〇〇メートル前後の地に、東から勢多郡新里村の天神山古墳、同柏川村月田の鏡手塚古墳、前橋市勝沢町のオブ塚古墳が一線を画しており、それより高い地には前方後円墳は存在しない。同様な形のものは佐波郡赤堀村今井の轟山古墳、同村五目牛の洞山古墳で、この二者は柏川の流れに近く、鏡手塚古墳はその上流にある。柏川の下流から轟山古墳の近くまではほぼ平坦で、轟山、洞山は平坦地に残された独立した小丘である。鏡手塚古墳は七世紀初頭と推定している榛名山の一峯二ツ岳の爆裂以前の構築である。したがつて同一傾向の古墳は同じ頃のものと考えているのである。これらのものからやや離れて、前橋市の東端の大室地帯の横穴式の三大古墳が造られているのである。前二子、中二子、後二子の古墳と称されているが、前二子は六世紀終り、後二子は七世紀前半と考えられ、中二子は未調査であるが、大体その中間のものと見られよう。

四 赤城南麓地帯と上毛野君

赤城山南麓地帯の中央部である前橋市東端の東大室町の前二子古墳からは、四神付飾土器と名づけられている須恵器の器台が出土している。明治十一年三月、村民の手によって発掘され、その出土品の書上げの書類が現存してい

四神付飾土器



る。また、林武画伯の父林斐臣氏（当時前橋中学校教師）の紹介であろう。画伯の話であるが、アーネスト・サトーが来村、詳細な記録をとり、それを本国イギリスの○○○○という雑誌に掲載しており、右の書上げに合致している。但し、その多くは後に盗難にあって、四神付飾土器その他数点が残存しているのみである。

この四神付飾土器は俗に朝鮮土器といわれ、その装

飾付きのものは新羅系とみられていた。しかし、四神は高句麗の古墳の壁画にあるのであり、最近まで日本に来ていたものと考えられていた。この考えは数年前九州地方で壁画が発見されたことが伝えられ、本年四月には奈良県の飛鳥の地の高松塚古墳で発見され、改変されねばならない。前者は伝聞いただけではつきりしないが、後者は新聞紙上で大体的に報道された。発見者の言では七世紀終り乃至八世紀のものと述べられている。その頃のものとしては、奈良市西京町の薬師寺金堂の中尊の台座の装飾に用いられている。それより一世紀以上も前に、群馬県では前二子古墳からその飾付けの土器が出ているのである。

四神付飾土器というのは、器台の下方の台の四方に、青竜（東）、朱雀（南）、白虎（西）、玄武（北）の四神を象り土でひねった小さな動物が配置されているのである。四神は陰陽五行説から起つてゐる。漢民族を黄として中央に置き、青、朱、白、黒を四方に配して、竜、雀（鳥、鳥）、虎、龟で表し、この四神が四方から漢民族を守護すると

いう思想である。これが古墳の石室の壁に画かれて、埋葬された人を守るために用いられた。更に土器に移されて、死屍と共に副葬して、その意識があらわしたものである。この思想或は四神付飾土器は外来人によって六世紀中頃に上毛野君に伝えられたものであろう。横穴式石室の古い形は巨石大石を用い、直線で方形に構成され、高麗尺が使用されている。恐らく高句麗古墳の影響ではなかろうか。また、六世紀終りから七世紀前半の所謂飛鳥文化の主体となつてゐるものは高句麗系である。

更に次のことが考へられる。この大室の地の西に大屋の地があり、その西南の平坦部には荒子、荒口という地名がある。荒子は「あらこ」、荒口は「あらく」である。共に新屋を意味するもので、大屋から分派したものである。そ

の西を南流する荒砥川の

「あらと」も「新戸」では

なかろうか。荒口の南に

二之宮の地があり、そこ

に赤城神社が鎮座してい

る。この地域は旧荒砥村

であり、北に赤城山を負

い、東に柏川が流れ、南に

利根川の流れをひかえ、

西は東山道が遠く走つて

いる。北に山、東に川、



赤城山南麓地図

南に水、西に大道をもつた地は「四神相應の地」と言われている。平城京の地をトするにもこの思想によって行なわれたことがその詔に見えてい。上毛野君にこの四神思想が入っている以上は、その思想が居住地の占定にもあらわれているのではなかろうか。

また、赤城山はもと「くろほ」と称した。現在、黒檜嶽くろひやけという名が山頂の最高峯にのこっているが、これは山頂の北部にあたる。西方に流れる川を白川といい、国帳にも白河明神の名が見える。赤城山とよぶのは南が関東平野に面し、その方面からの名と考えられる。山頂の東の峯を虚空藏嶽とよび、その西の小沼は神格化され、神仏習合により本地仏を虚空藏菩薩にあてているが、この虚空藏はまた青龍によつて表現されている。つまり、赤城山の各部分的な名称が四神によつて成立しているのである。これらの名称も上毛野君によつてつけられたものではなかろうか。

上毛野君はその伝承に荒田別は新羅征伐をし、学者王仁を百濟から招聘してきただとある。王仁招聘は日本の学問の基を開いたことになる。将軍として、文化使節として『日本書紀』に特筆されている。竹葉瀬は新羅征伐に派遣されたが、白鹿を得たとて途中から引き返し献上したとある。瑞兆を重んじる文化人と見られよう。弟の田道は新羅征伐をして、新羅の四邑の民を虜にしてきて、次いで蝦夷征伐で戦死したが、勇敢な将軍として記載されている。舒明紀の上毛野君形名の蝦夷征伐と天智紀の上毛野君稚子の新羅征伐との記事を併せて作為したように見える。また、天武紀の上毛野君三千は修史を命ぜられた臣下六人の筆頭であり、上毛野君の関係者には文筆者が多い。文化人として重きをなしているのであり、竹葉瀬の瑞兆に心を動かしたこととこの文化的な意識の反映であろう。祖荒田別にはこの両者を兼ねしめているのである。

上毛野君の一族には文化的な物を獻じて賞されたと伝えるものが、他の氏族に較べて多い。車持君は乗輿を、有馬君は高櫛を、商長首あきさきのゆきは衝ほりを献じたと『新撰姓氏録』に伝えている。要するに文化人であったことを誇りとしている